川柳塔

創刊大正十三年　通巻一一一三号

日川協加盟

特集　こんにちは新同人です

No.1113

二月号

第八回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第八回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題2句　共選）

課題吟

「窓」　みぎわ はな（ふあうすと川柳社）
森山盛桜（川柳塔社）

「許す」　梅崎流青（川柳葦群）
安土理恵（川柳塔社）

自由吟

片岡加代（番傘川柳本社）
小島蘭幸（川柳塔社）

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

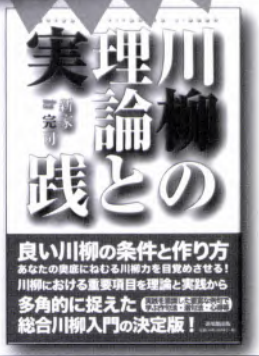
投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　**令和二年二月二十日（木）消印有効**

送付先　〒543－0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七－二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
TEL／FAX（〇六）六七七九－三四九〇

賞及び発表　各題特選に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

お待たせいたしました！
第四刷出来！



川柳の理論と実践

新家完司・著

ご注文は下記へ、ハガキかFAXにて。
お支払いは到着後で結構です。

実践を意識した豊富な例句で学ぶ作句法・選句法・心得
初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

〒689-2303　鳥取県東伯郡琴浦町徳万597　新家完司
326頁。送料＋消費税＝2,000円　FAX 0858－52－2449

番傘フェスタ二〇二〇

小島　蘭幸

少し早いかなと思いながら会場の太閤園に行くと、すでにスタッフの皆様が全員集合しておられました。それぞれの持ち場でテキパキと対応される姿勢に、番傘フェスタ二〇二〇への情熱がストレートに伝わってきました。

来賓席に案内されると、選者の小笠原望氏が出席されておられました。高知へ一泊されて早朝の飛行機で来阪されたとの事でした。毎月、番傘の表紙絵を担当されている高岡画伯には、今年の干支の鼠、松竹梅、寿を描かれた有り難い年賀をいただきました。番傘一月号の表紙絵は霊峰富士でした。

第一部の式典では、欠席の田中新一主幹に代わって森中惠美子氏が力強い開会のあいさつをされました。私は一般社団法人全日本川柳協会理事長として祝辞を述べさせていただきました。永年同人、水府賞、番傘賞、磯野いさむ賞受賞者と新同人の皆様の晴れやかなお姿に番傘フェスタ二〇二〇の重さをひしひしと感じることが出来ました。

第二部の句会では、新家完司理事長が、川柳塔社代表として堂々と選者を務められました。

第三部の懇親宴は、木津川計先生のお話と乾杯の音頭ではじまりました。美味しい料理と美味しいお酒をいただきながら楽しいおしゃべり、その中で小笠原望氏から、今年の四万十川柳大会の選者は、新家完司さんにお願いしましたということを聞きました。会場の信用金庫の大ホールに薫風先生と私の色紙と一緒に完司理事長の色紙も飾られると思うと、嬉しさが込み上げてきました。

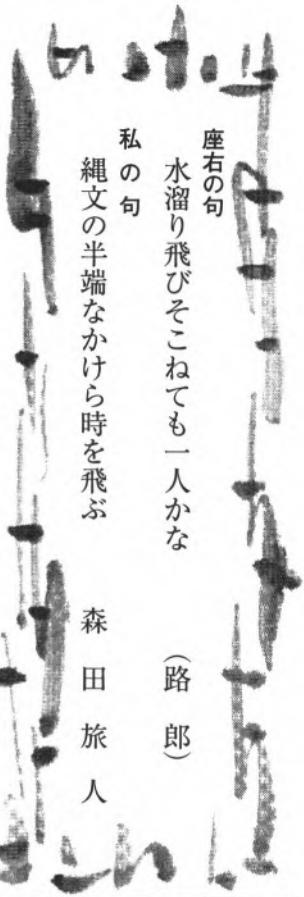
番傘フェスタ二〇二〇、楽しい一日でした。

暁をいだいて闇にゐる蕾　　鶴彬

翌朝、大阪城公園にある鶴彬の句碑に久し振りに会って来ました。

薄明かりの中で彬の句碑を見つめていると、暁の日を見ることもなく二十九歳の若さで獄死した彬の熱い思いに涙が溢れてきました。

写真一枚彬の句碑に手を合わす　　蘭幸



座右の句

水溜り飛びそこねても一人かな　（路郎）

私の句

縄文の半端なかけら時を飛ぶ　森田旅人

川柳塔　二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「千草高原スキー場」

■巻頭言　番傘フェスタ二〇二〇……小島蘭幸…(1)
吟行想い出ぽろぽろ……都倉求芽…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌⑱⑧……木津川計…(39)
自選集……(40)
温故知新……(43)
水煙抄……川上大輪選…(44)
橘高薫風句抄……(61)
誹風柳多留一二篇研究 80……(62)
愛染帖……新家完司選…(64)
檸檬抄「糸」……水野黒兎・鴨谷瑠美子共選…(68)
一路集（「鬼」……吉岡修選…(72)
（「灰色」……栃尾泰子選…(73)

吟行想い出ぽろぽろ

都倉求芽

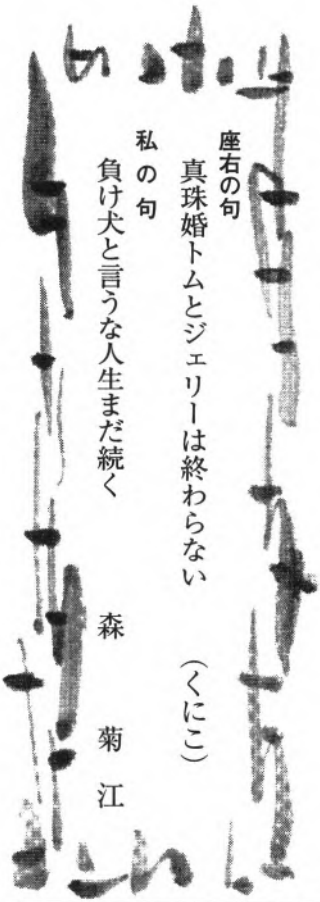
京都塔の会名物?に吟行句会がある。黒川紫香さんのお骨折りである時は和歌山、姫路などからの参加も。今回はそのうちのいくつかを。

第2回今宮あぶり餅。今宮神社東門前。「かざり屋」の離れ座敷。身幅の前垂れ、鼻に黄粉をつけた老女の接待で構えは明治時代。風情があって大変な好評だった。

第9回伏見寺田屋。Wさんが寺田屋の猪助さんと心易いというので全ておまかせした。ところが当日Wさんは欠席。それでも見学はした。近所の料理屋から膳が運ばれてきた。が食事は駄目。料理屋へ行って食事、だが句会は駄目。また寺田屋へ戻って句会。二度足三度足。ああ。

第50回八幡堀舟遊び。手漕ぎ舟で西湖まで往復。ヨシキリの囀りなどを堪能。休暇村で句会夕食。で無事終ったと思いきや舟遊びの際、水面の照り返しで顔が焼けたと女性陣からのクレームにびっく

初歩教室「　肉　」……居谷真理子……(74)
川柳塔鑑賞……山岡冨美子……(76)
水煙抄鑑賞……加川靖鬼……(78)
英語 de Senryu ⑱……吉村侑久代……(79)
『麻生路郎読本』余滴 (56)……乗原道夫……(80)
特集 こんにちは　新同人です……(82)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……(94)
せんりゅう飛行船 ⑩……新家完司……(96)
一月本社句会……(97)
句会燦燦……板垣孝志……(101)
各地柳壇（佳句地十選／山口光久・久保田千代）……(102)
二月各地句会案内……(116)
柳界展望……(118)
■編集後記（ひとこと／松本文子）……朱夏・勝弘……(120)



座右の句
真珠婚トムとジェリーは終わらない　（くにこ）

私の句
負け犬と言うな人生まだ続く　森　菊江

り。

第58回車折神社。句会が終って席料を払いに行ったら朱印帖の団体がわんさ。少々お待ちを、でみなさん先に帰ってもらい私一人が残った。さて払いになって永いことお待たせしたので三万円は一万円でいいと、これは助かった。

第73回大橋家苔涼庭。水琴窟で有名なこの庭を下見に行った。当主の饒舌は延々一時間。それで当日は句会もあるので40分程度で、とお願いして退散した。さて当日、やはり説明は終らない。そこそこに打ち切ってもらった。その後、小学校の同窓会でこの家と同じ町内の女性にこの話をしたところ「へえ！あの人町内では口は利かへんし頭も下げへんよ！」と絶句した。

最後に番外編。淀城の下見に行った時丁度京阪電車の工事中で上り線と下り線の駅が離れていたので断念したのだが石垣の上を散策していたところ、角の手前でなにやらガサガサと音がする。と曲がってみると若い男女がホンバンの真最中。これにはびっくり、早々に退散した。

川柳塔

大阪府　米澤俶子

ありのまま生きて私は冬木立
前置きが長過ぎるのも歳のせい
逝く日まで女としての志
聖職のことば学校から消えた
リメイクの服古いけどホッとさす
良き師良き友川柳塔はワンチーム

尼崎市　山田耕治

教室へ酸素を曳いた師を思う
夜が怖いと言う老人になった
いい音でポストの中に落ちました
五年生皿積み上げる廻る寿司
部屋中に汽車走らせて入らせず
今年また亡妻の花壇に小菊咲く

箕面市　中山春代

赤ちゃんとにこにこ昇るエレベーター
幸せの黄色が降ってくる銀杏
口ばかり動く公園大掃除

小島蘭幸選

紅葉狩の列がつかえる自撮り棒
日没でおひらきランチ忘年会
断捨離はきらいお家が寒くなる

藤井寺市　鈴木いさお

母の港出て妻の港へ辿り着く
若者には金　老人には時間
老人であること偶に忘れてる
安心して眠れるのです抱き枕
一日おきにしてから晩酌がふえた
紙オムツしてます文句ありますか

大阪市　栃尾奏子

奪う気も奪われる気も無いけれど
決して手に入らぬ横顔を思う
手が触れる嫌な気持ちがしなかった
触れた手の微熱夢まで持って行く
夢の中くらい悪妻許されよ
水で顔洗って良き妻に戻る

大阪市　谷口　義

友だちも引っ越して行き冬紅葉
一駅向こうに一人で姉が住んでいる
平熱は五度五分これでよろしいですか
同い齢だと言わないことにしよう
斜線一本引いて如月や如月や
そう言えば女にもてる人だった

羽曳野市　吉村　久仁雄

やがて逝く二人先陣は僕が切る
店継ぐと十三歳が軽く言う
幸せのふり幸せになる二人
桜見ればデータ記憶がすぐに失せ
依存症増えてカジノが焼け太る
シャッター街の裏に広がる休耕田

千葉市　海老池　洋

日の丸の旗旗の中御列の儀
ダムは無駄と誰も言わない水害後
冠雪の富士に日本という心
情報過多頭の中はゴミ屋敷
視力聴力気力も枯れていく老躯
懸命に生きる私もピサ斜塔

広島市　岸本　清

思いやりいつしか我にかえります
ラグビーが手本を見せたワンチーム
何事もなく過ぎたいい夫婦の日
役人も哀れ総理の尻拭い
心してハンドル握る喜寿の腕
花ごよみ見ては近場のプラン練る

橿原市　居谷　真理子

悲しみを吸い取る紙の本を読む
自分への言い訳ばかり上手くなる
夕暮れて恋しい人の墓に立つ
死者たちに囲まれ温かな孤独
空っぽじゃないぞ思い出があるぞ
巧妙に春を育てている冬だ

岡山市　工藤　千代子

ブラームスは滲むシューベルトは沁みる
冬が来る守宮も蜘蛛も去った今
トンネルをやっと出ました胃が痛い
香水も変えたし箸も買い替える
古希も過ぎ太鼓湿ってきたみたい
夕暮れの歩幅になってする散歩

岡山市　永見　心咲

裸木のような私に触れないで
冬芽持つしだれ柳に芯がある
冗談で済ませば傷は残らない
真ん中に時計わたしも狂えない
シーソーに独りバランスとれぬまま
ポップコーンもソーダ―水も皆ヤンチャ

富田林市　山野寿之

百円でお好み焼きを売る露店
ちぐはぐの話に笑い合う番
コンバイン年に一度の秋日和
ブランドの皿へサラダは自家野菜
旅カバン凹みも傷もリメンバー
爺ちゃんが妊婦に譲る愛の席

羽曳野市　中川ひろ介

古梅咲くここに都があったころ
令和二年被災の街が立ちあがる
冬ざれたビルの谷間に鳴る第九
中村医師に続け平和を受けつぐ子
雪空に餅つく音がにぎやかに
割り勘で桜育てる趣味の会

大阪市　古今堂蕉子

自虐趣味自慢話よりましか
十二月こわれたままのおもちゃです
桜咲く頃笑顔に戻るだろう
乾いた胸にモーツァルトが沁みる
新月に出合い満月に別れる
中ジョッキ四杯友の口のなめらか

出雲市　岸桂子

祭り好き遺影に聞かす笛太鼓
青空の真下で泥の手を洗う
することがありすぎみんな未完成
寂聴の「いのち」読めないまま棚に
肩の力を抜いてとべるか水たまり
真っ白な地図を背負って行く余生

和歌山市　古久保和子

にんげんを捻りだしてる紙ねんど
パソコンもゲームもないがする帰省
メガホンで叫ぶ平和に刺がある
居てくれるだけで空気が柔らかい
方言も煉りこんである手打ちそば
大根干す風が味付けしてくれる

藤井寺市　鴨谷瑠美子

原点に戻ると開ける道がある
酒少し欲しがる朧夜のノート
空耳かそれとも愛のざわめきか
冬を咲く彩深く濃くゼラニウム
けじめとはこんなに重い後頭部
人情という厄介なもの捨てられぬ

岡山県　山縣のぶ子

しみじみと一人暮らしを謳歌する
なぜだろう口は達者で句が浮かぬ
スイッチもあんぽんたんになった歳
何もかも忘れて今日の布袋さま
亡夫のコップ思い出ばかり浮いてくる
住みついた鬼の講釈聞かされる

河内長野市　山岡冨美子

散歩する距離にわたしの歯医者さん
頑張ってほしい老舗の本屋さん
高野街道メタセコイアに小雪舞う
階段を登り整形外科のドア
薬局はお茶をサービスしてくれる
程々というのが老いを行く暮らし

藤井寺市　太田扶美代

婚約はまだ早すぎるチョコレート
約束の一つに秋が火を付けた
目を閉じるずっと信じていたいから
財布にも夢の欠片を入れてある
上から目線そんな夫のままでいい
転居通知水のおいしい街とある

松江市　松本文子

パンと御飯味噌汁組が同居して
不味公もニッコリ城の大茶会
美しい夢を拾った古民家で
故郷は越後私のシャングリラ
寝言言ってる人形も苦しいか
人形になって耐えてる老いの日々

神戸市　冨永恭子

身の丈と自家の大根今日も煮る
掃いても掃いても落ち葉のフラダンス
子に送るかぶら一番いいかぶら
冬空を突いて高菜の伸びやかさ
温暖化日本の本気問うている
面倒なことを迫ってくるスマホ

島根県　伊藤寿美

リメンバーヒロシマ佐藤しのぶも教皇も
反核を説く教皇の一途な瞳
三本の糸で文楽哭き笑う
板橋を渡れば並ぶ古墳群
老人と美田セットで残る過疎
留守番は亡夫の位牌と叙勲額

羽曳野市　藤原大子

12の目浴びてあくびをする赤子
エンドロール余韻にしばし立てずいる
少しだけリズムが合わずもめている
火も水もかぶる気概で前に出る
怒られるより黙られている地獄
券売機扱うまでの一苦労

米子市　野川宣子

転んでも酒瓶だけは放さない
被災地に師走の風は辛過ぎる
右に左に小走りになる十二月
そばがらの枕で父母を偲んでる
増税に生き方変えた自衛策
ジャンボくじ欲の無い人当たらない

熊本市　杉野羅天

薔薇色の素敵旅の日の夕暮れ
石蕗の黄が我喜ばす冬机
冬の薔薇健気にも咲くいじらしさ
温暖化また人災に泣くヒト科
柊が香り今年も庭に霜

北九州市　小松紀子

わけもなく山の紅葉みたくなる
忘れたい過去戻りたい過去共にある
伸びきったゴムにはならぬつもりだが
ゴツンと言いたいが言えばカドがたつ
うーんうまい自家菜園の野菜たち

唐津市　坂本蜂朗

夫婦して越えた傘寿よどっこいしょ
アルコール無しで踊ったぎこちなさ
孫自慢だんだん声が小さくなる
三年の日記今年で止めにする
四面楚歌天からも矢が飛んでくる

唐津市　山口高明

棘抜きの地蔵へ姑と礼参り
樟脳の香りほのかに喪の女
胸飾る亡母の形見の黒真珠
拘わらぬ方が無難と言う世相
携帯の中に私で無いわたし

札幌市　小沢淳

知った祈ったためだった神の医師
土くさい男になれと子を思い
善意での嘘の呵責に堪えている
単身赴任サラリーマンの泣きどころ
軸足はしっかりしてた風見鶏

弘前市　稲見則彦

影踏みを独りでしてる路地の裏
冬至だと亡母に言われカボチャ買う
あの暑さ冬暖房に使えぬか
上弦の月がわたしを嗤う 寒
バロックの響きも温いアナログ派

弘前市　今愁女

強力な希望に湧いたワンチーム
ノーベル賞も環境問題訴える
七姉妹末のわたしが残される
売れぬ土地老女懸命草を刈る
柿すだれも消え白い便りが静かなり

塩竈市　木田比呂朗

平穏な日々へ感謝の鬼遣らい
厳寒に今日も元気な電子音
キャッシュレス診察券はまだ増える
4Kで観ろと五輪が煽り立て
だとしても開花の準備する蕾

男鹿市　伊藤　のぶよし

ゴメンねが素直に言えて日本晴
鼻歌のメロディーやはり演歌だな
哀しさは亦も黙とうクラス会
まあいいか逝くときは逝くだけさ
今日も合掌朝焼けと夕焼けと

東京都　川本　真理子

どこにいても迷子の気分し始める
いつだって線を引くのは君だった
平和論語ると後ろ向きになる
花柄の便箋ばかり残りがち
まぶたには母が走ってくる姿

東京都　まえで　とよこ

水上バス観光客にかこまれた
もうあかんような気がする風邪でさえ
人生会議のポスター目をそらしたいそらせない
就職さき安心安全日本へ
巣立つ子は母さんなんで泣いてるの

八王子市　川名　洋子

省略に思いめぐらすちひろの絵
寂しくて受話器離さぬ独りの夜
並んでるそれだけでいい夫婦岩
それからと先を促す聞き上手
虫がいい話を母は懲りず呑む

横浜市　川島　良子

ひと煮立ちさせて本題に迫る
目指すものあるから弾む古希の道
断捨離で分かる価値観の違い
自信という収穫を得て年が暮れ
流行のタピオカ孫を誘いだす

横浜市　菊地　政勝

貧困な語彙に舌打ち増えてくる
実力がつくと運も寄ってくる
ふたりきりショートケーキも二分する
身の丈に合わせ年金小出しする
佛より人の温もり信じたい

さいたま市　星野　育子

五輪中と言わず永久に停戦を
議員宿舎よりも仮設住宅を
被災地のボランティア頼み限界
今日もまたイノシシと熊が出没
捨てた肩書きに元をつける未練

上尾市　中村　伸子

前頭葉の仕事何だったけと聞く
行列なしで食べられるなら極上パン
アンケート持ち家ですか　どうですか
ほっとする散歩中止の雨の朝
センサーのついた車を拒否の夫

大嘗宮二時間待ちもいとわない
空気吸う畏れ多くも皇居内
バカーと言ってやるあの日の私に
団塊は疎まれながら生きる今
良いとこは似ないものです血の流れ

朝霞市　前田洋子

心機一転促し年が明けてくる
人間を元気に演じ令和の代
初春にいのちの水を補給する
現実を歩く初日が背に燃える
あと五年傘寿へ少し欲が出る

越谷市　久保田千代

防寒のプラス一枚かっぽう着
添加物気になりだした豆知識
ハロウィンもクリスマスさえ弾まない
もうわがままに歩んでもよし林住期
失敗を肴に笑い飛ばす宴

犬山市　金子美千代

正月が来る年金のありがたさ
拾う神ばかり正月三ヶ日
人の輪にいてウトウトとする安堵
不揃いのおはぎを詰めて子等を待ち
締め切りが近い鉛筆トキトキに

犬山市　関本かつ子

一粒の米の中にも仏あり
妄想を食べてぽろりと歯が抜ける
雑木林のハミングに誘われる
冬日和ごろりごろりと首を干す
君の瞳の中でゆったりと老いる

鈴鹿市　小河柳女

天地人治める神へただ禱る
風雪へぶれてはならぬ杭を打つ
一日の反省あすは前向きに
赤い糸結び直して半世紀
絵に描いたような夫婦にある別離

富山市　島ひかる

長生きのＤＮＡを持つ不安
傘寿過ぎきつい登坂の入り口に
年明けに会うなら出さぬ年賀状
買いすぎて賞味期限の切れた菓子
ひたすらに飛び続けますその日まで

可児市　板山まみ子

ささやかな暮らし彩る実南天
適当に相槌打って聴く自慢
なんでなんで知識詰め込み児は育つ
御用心おいしい話みんな詐欺
飽きるほど生きて来たけどまだ半端

和歌山市　上田紀子

和歌山市　柏原夕胡

惚れているせいか足し算ばかりする
薬漬けになっても生きる欲がある
得意料理は肉じゃがですと言う女
体調不良明日の予定が決まらない
ふと亡母に電話しようかなと思う

和歌山市　喜田准一

正月は孫の年玉だけが増え
香港は他人事でもない日本
ふる里の秋はやっぱし冨有柿
世渡りは人それぞれにあるカタチ
雨降れば雨でやるべき事がある

和歌山市　坂部紀久子

アクセルばかり踏み続けてた日の疲れ
マンネリを変えるコーヒーブラックで
大声で唄い終って鳴るチャイム
何もなければストーブから離れない
ルミナリエ過去の苦しみ消すように

和歌山市　武本碧

気休めで言った言葉が功奏す
都合良く追い風吹いた朝の靴
メンバーを変えると空気シャンとする
デパートの自惚れ鏡罪なこと
キーワード忘れたままの玉手箱

和歌山市　土屋起世子

お愛嬌言い間違いに聞き違い
前向きになるとまだまだやれる歳
老眼鏡孫のおもちゃも扱えず
それなりに予定組んでる年の暮れ
来客があると信じている御節

和歌山市　堀冨美子

身の丈で歩く私の幸せ度
時効なのにむっくり起きる病の芽
試着室よくお似合いと世辞を聞く
老いの字を遠く熱中するハート
プライドが揺らぎ出してる忘れ癖

和歌山市　松原寿子

サラダとスープ添えタコ焼でとる夕餉
悩みひとつ躱す術さえ見失う
山陰育ち紀州の冬に耐えられる
熱いひと言添えて背中を押してくれ
完璧に果たせぬミスが眠らせぬ

岩出市　藤原ほのか

過疎の村祭囃子に盛り上がる
ひとつしかない花咲かす世界観
世界中自由に言葉綴りたい
十二月振り向かないで前を向く
少しだけ成長したと思いたい

海南市　小谷小雪

やせ我慢とにかく今日を折りたたむ
私にもあったようです片えくぼ
繋ぐ線いっぱいあってありがたい
欲減らし平常心を取り戻す
届けますひいじいちゃんの植えた柿

紀の川市　山東日出男

非正規にジッと手を見る暇はない
衣食住足りて現状良しとみる
縁側で抜いた鼻毛の数を読む
値上がりのたびに前島密翁
クマノミとイソギンチャクが凭れ合う

橋本市　石田隆彦

百均で急にのびのびする財布
種蒔けばいつかは取れる自家野菜
猿の芸みたいな謝罪見たくない
忖度の政治やがては枯れてくる
キャッシュレス時代に慣れぬ老い二人

京都市　清水英旺

電子辞書壊れて脳に穴があく
あがくのも生きてる証拠と醒めている
よい政治あってこそ人生百年
真っ先に訃報欄みる癖がつき
終わりなき輪廻の中に我もいる

長岡京市　山田葉子

バスも電車も満員にする青い空
食パンだけの店に行列出来ている
銀杏サラサラ冬の始まり告げている
見てもらえるだけで力を貰ってる
軽いジョーク受け流せずに浮いている

八幡市　今井万紗子

傷つけた軽い冗談だとしても
爪パッチンまだまだ女演じ切る
スッピンを隠すマスクは必需品
小窓叩く亡母さんだろか風だろか
ぷいと出て夕餉の支度気に掛かる

大阪市　磯島福貴子

エンディングノートもうかまだかと先延ばし
ご利益必至一足先にサクラサク
朝ドラ効果火鉢囲んだ日懐かし
店じまい客寄せセール延延と
パパママがサンタと知る日いつか来る

大阪市　岩﨑玲子

ケイタイを持たずのんびり暮してる
のんびりとうろこ雲見て友想う
ナツメロで昔の彼を思い出す
子どもたち等しく育てみな違う
貯金箱割っちゃいました夢のため

大阪市　内田志津子

アンケートさらさら書いて誤字脱字
こんがりと焼いたサンマが高級魚
不器用な生き様うつすレントゲン
軽い嘘重ねて罪が深くなる
善人の顔でふわふわ生き延びる

大阪市　宇都満知子

独楽回し婆ちゃんだってまだ出来る
凧揚げならまだ競えます河川敷
少しずつ我慢で二人楕円形
千切りキャベツ軽くふんわり愛を盛る
ドレスコードを確かめて晴れの席

大阪市　江島谷勝弘

西灘の夕やけを見に行こうかな
いい人だまたご馳走になりました
便りではサチ子ミヨ子も千の風
止めとこうお金もないししんどいし
残り福期待してるがやって来ぬ

大阪市　榎本日の出

淋しさは言わない老いの反抗期
生きている日日が健康記念日よ
趣味なのに悩み苦しみ焦り出す
初対面なぜか波長がピッタリと
才能の限界知って無茶ばかり

大阪市　榎本舞夢

令和師走喪中ハガキが多くなる
ベランダに二羽の雀が来て秋に
父さんが葉ボタン買うて珍らしい
一通の手紙天位とウソホント
この年で努力は実ることを知る

大阪市　大川桃花

百歳の詩集空を見よと言う
お医者さん近くに変えて老い支度
グレタさんの必死へ大人なまぬるい
残り福と言われ町会長当たる
虫喰いの跡痛ましい如来坐像

大阪市　大治重信

母そしり想い出すのは母ばかり
晩めしをぼそぼそ食べて今日終る
鍵もろて信頼されて立ち寄らず
妻流の薄い味噌汁菜にして
馬が合い酒が合ってる古馴染み

大阪市　奥村五月

私が何にもせぬ夫作りあげ
広い家田舎にあるがワンルーム
ミサイルは増産しても飢える国
人が産むロボット進歩人けずる
武器を売る買う国もある何時平和

大阪市　小野雅美

目立たぬよう左右見ながら花が咲く
振り向かぬ後ろ姿にある返事
表情の奥に潜んでいた答え
過去は過去さらり流して梅茶漬
願い事神よ忘れていませんか

大阪市　笠嶋惠美

元気なく朝から鰻食べてみる
食べる場所朝昼晩と変えてみる
生きる事死ぬ事思う八十三
恩師とのつながりうれし涙声
行かずとも見れる紅葉見事なり

大阪市　金川宣子

追い込みに脳の活性望む孫
ライバルをびっくりさせた薬指
久し振り家族揃った夢の中
合鍵を渡せば急に秘密めく
大掃除散らかし過ぎてやる気でず

大阪市　川端一歩

戦友がいつも私の側にいる
三軒長屋八十以上五人居る
介護保険この高額に苦労する
消しゴムがボクの弱点見て笑う
年の暮いいことあって墓参り

大阪市　坂裕之

渋い顔一度もせずに準備する
鍋囲み家族団らん孫主役
朝一番ああしんどからどっこいしょ
うたた寝は働いている証です
一線を超えてはならん晩酌も

大阪市　髙杉力

上役のジョーク一つで座がゆるみ
同郷と分かり地酒で飲んでいる
世の中は廻るつなぎの役もいて
斜めから目盛見ているダイエット
犬と孫の話になって蚊帳の外

大阪市　髙杉千歩

冬の苺美しさ頂く
バースディです九十五歳怖いです
無表情だが食べること忘れない
それでも生きるのか老人ホーム怖い
車椅子から始まる第一歩

大阪市　田中廣子

戻れたら亡妹とゆっくり話したい
香港は早く決着民主化へ
中村さんなぜ殺された胸さける
ノーベル賞笑顔素敵な吉野さん
会えば又いつも話に花がある

大阪市　田中ゆみ子

ギネス更新皆一番が好きなんだ
ステージ4明日は句会に行く予定
これからも道はくねくねあみだくじ
プライドも欲も切り捨てたらあかん
北風の坂登る時闘争心

大阪市　津村志華子

三日月はわたしの邪心刺してくる
高層の箱がわたしの侘住い
ハルカスの眼下の町はおもちゃ箱
子煩悩な父の命日大晦日
ひたすらに平和を祈る令大書

大阪市　寺井弘子

足元を見透かす妻と五十年
雑念をさらさら流す終い風呂
ひとりぼち夕焼け雲にぶら下がる
幸せと答える素顔光らせる
コスモスの笑顔をおくる茜雲

大阪市　寺本実

戻り道夕焼けだけが優しくて
肩書きがないのに肩をいからせる
追伸に弱気の案を足しておく
さよならも言わず落ちていく夕陽
この辺でアクビ一つも入れてみる

大阪市　中井萠

親父ギャグ愛想笑いでおつき合い
百均でいつも値札を探すクセ
アッやばい妻の地雷をまた踏んだ
検査終え年相応と一言で
子と孫の会話むずかし蚊帳の外

大阪市　原田すみ子

二股三股イケメンばかりファン歴
言ったもん勝ち女はとかく言い過ぎる
診察券弱いところを知っている
あきらめぬがやり直すのに要る月日
少子化で親はレールを敷き過ぎる

大阪市　平井美智子

幸せの儀式豚饅二つ買う
電源を入れて私を立ち上げる
嘘ついた心が赤く腫れている
「そうやなあ」「まあええやん」で生きのびる
どの指も明日を向いているのです

大阪市　平賀国和

代替わりと風水害の年暮れる
古稀となりウルマンの詩を噛みしめる
好奇心と情熱あるか自問する
体が元手テレビ体操日課です
町会の餅つき昭和思い出す

大阪市　藤田武人

フレームに嵌めた二人のワンシーン
世の中で一番強いママのチャリ
鉄仮面被り強か心理戦
散らばった地雷踏まずに生きている
マネキンの服試着してうなだれる

大阪市　横山里子

肩口の寒さ飼い猫抱き寄せる
放課後は角の駄菓子屋子のサロン
今日もまた敵に惚けたと見破られ
一年は今日が大事の積み重ね
人類の滅亡ＡＩが嗤う

大阪市　若本安代

人生のゴール見えないから走る
走らねば暦はすぐに薄くなる
旅すれば違う自分がそこに居る
旅仲間河内音頭ではしゃぐ宴
いい出会い感謝を一つ足した旅

堺市　奥時雄

行く先を考えたりはしない雲
成り行きにもう逆らいはせぬ八十路
二千万使わないままあの世行き
日に四度今更ながら歯を磨く
難聴に予防の手だてあるのかな

堺市　柿花和夫

ママさんも仲間に入りうさばらし
花嫁の父が居場所をさがしてる
困ってるはずがよく飲みよく歌う
ファイトならまだ残ってるスニーカー
火をつけた人が消火器さがしてる

堺市　加島由一

令和二年馬を見る目が肥えてくる
お雑煮のミソにこだわりある旧家
あちこちにまめに顔だすねずみ年
こたつの上のミカンが減らぬ独り者
万博を視野に八十ストレッチ

堺市　源田八千代

元旦に酒豪と下戸の年始客
転勤で親孝行となる息子
法話聴く今日は義弟の一周忌
ワンマンのリーダーに要る潔癖さ
ハッピーエンドへシンプルライフ心掛け

堺市　齋藤さくら

消費税上げて散蒔き増えている
庇われる年になってる知らぬ間に
腹の中曝け出したら腹が減り
お名前は存じています初対面
父さんの居ぬ間に掃除冷蔵庫

物忘れ以外すこぶる元気です
脳トレと倦まず弛まず五七五
脳トレに毎年作るマイブック
百寿へと毎日稼ぐ一万歩
ハフハフと焼芋美味い元気です

堺市　坂上淳司

ネコ年と称しネズミを威嚇する
気が急くのか背なのまあるい影法師
病得て少し覚えた祈り方
わんさかと冷蔵庫には期限切れ
分かるまい日ごとの糧のない辛さ

堺市　澤井敏治

しあわせに気づきよろこび噛みしめる
霜のあさブラックのむかカフェラテか
人生に歌とおどりは欠かせない
木枯しに入れた行火が手離せず
米だけで生きていけないのがこの世

堺市　遠山唯敎

みんな笑っている僕の写真帳
よく動きよく蹴躓く充実期
サプリより健康に良い腹八分
孫たちに賢いねえと言う魔法
偶然に戦争になるはずがない

堺市　内藤憲彦

ロマンスはないが流行りのグレイヘア
雪吊を見事と誉める豆知識
洗濯機開けて気がつく干し忘れ
大寒波サルも集団自衛権
同期会ことば交わさぬ元夫婦

池田市　太田省三

電飾も不況の波に消えた暮れ
階段の崖降りるよに身構える
検診でしっかり水を飲めと言う
意に染まぬ事も笑って流す齢
消息の気にした友の訃報来る

貝塚市　石田ひろ子

有難い病気知らずのＤＮＡ
もぐらたたきのように痛みが顔を出す
私が先に逝ったら墓は別にして
ゆっくりと皮が剥けてく心地良さ
決着をつける明日を模索する

河内長野市　大島ともこ

終電に銚子一本仇となり
舌だけはかじかみません冬登山
明日のクスリ律義な顔で仕分けする
とっておきの手段隠し持つ意気地
眼の術後世間が見えて困ります

河内長野市　梶原弘光

河内長野市　木見谷　孝代

計らずも死と向き合った昨日今日
小春日の中で夫の転院日
エアーベッド腰痛が消えよく眠る
前向きにリハビリプラン声弾む
味つけが合って食欲増してきた

河内長野市　黒岩　靖博

師走どき捻り鉢巻き気合い入れ
商人は男のロマン知恵一つ
世界を股にかけて男は夢を追う
切り札は胸に抱いてあの世まで
共白髪支えられたり支えたり

河内長野市　辻村　ヒロ

二次会で棘など抜いて帰ります
五センチも身長縮み深呼吸
老いの春杖磨いてる好奇心
カラフルな薬見せ合う老い仲間
わらべ唄遠き乙女の顔になる

河内長野市　中島　一彌

炊き出しの出会い知り合い無二の友
まな板のくぼみを妻が自慢する
老人力つけて深まる夫婦仲
泥臭い夫婦が強かに生きる
蜘蛛の巣も庭の風情の一つなり

河内長野市　藤塚　克三

集まるとすぐに持病の体験談
百歳に備えへそくりと節約
湯豆腐を囲む夕餉はやわらかい
世話には来ない遺産分けにはやって来る
二合飲んで醒めると妻が怖くなる

河内長野市　村上　直樹

茹で蛙明日の日本を語らない
被災地の庭に雄々しく福寿草
戦争のむなしさ語り継げ昭和
憧れは卒寿颯爽舞うワルツ
あの世への土産に令和楽しんで

河内長野市　森田　旅人

誘い水句集ひとつで湧く泉
月へ行く備え朝夕スクワット
鬼瓦見ると背筋を立てている
この星の未来救えと娘の涙
手暗がり気合で通す針の糸

河内長野市　山室　光弘

セクシーで解決すれば無い苦労
税金を返せと言いたいまつりごと
記憶はらはら枯葉のように散っていく
拉致改憲私の手でと口は言う
手元には小銭いくばくキャッシュレス

岸和田市　岩佐ダン吉

勢いで立ったが誰も続かない
徒手空拳それがスタートではないか
祝長寿どうもそうではないらしい
番号で呼ばれて知らぬ振りをする
最高のおしゃれ胸張り歩くこと

岸和田市　宮野みつ江

ばたばたと過ぎた一年振り返る
独り者同士気楽な長電話
ラインなら無料と話止められず
やわらかな冬の日差しに黄のすみれ
寄せ植えの主役今年もシクラメン

岸和田市　雪本珠子

ありがとう言って言われて五十年
ありがとうは人を遣る気にする言葉
ユーモアを交えて話す人が好き
何事も自然にまかせ焦らない
いつ幕を閉じるか分からない歳に

四條畷市　吉岡修

お経かて判らんとこがありがたい
手術台で握手したのは仏だな
グルメツアーみそ汁だけはうちがいい
一浪は想定内のことだった
サイタサイタ僕にもあった一年生

吹田市　野下之男

大臣の名前おぼえた　もうやめた
若き日の八千草さんにサインせがむ
台湾北満父はよくがんばった
そう快だ行きかう船が汽笛ならし
三時だよプリン忘れず冷蔵庫

高槻市　片山かずお

ありがたい快食快便が続く
正論で勝ったが味方いなくなる
妻に指示されて窓拭き草むしり
草むしり五坪の庭に小半日
手をつなぐことはしないがまだ夫婦

高槻市　島田千鶴子

会えぬから友への祈り深くなり
いつもの顔揃いましたねティータイム
冬本番俄然はりきる鍋奉行
思い切りが悪く残り火抱いている
遠目なら十分若いあの歩幅

高槻市　初代正彦

新バージョンのパソコン僕を困らせる
悪友の元気な声のする便り
気忙しいのもありがたいことですわ
脇とりのようなリズムの食器拭き
子供らの歩む明日を支えます

高槻市　杉本義昭

母が振る両手に涙止まらない
被災地を見舞う天皇若い背
正念場本当の顔が見えて来る
欲得を捨てれば叶う願い事
カタカナの店があふれて舌を噛む

高槻市　富田美義

天高くゴメンナサイが干してある
悩んでも子等の未来は子が決める
さまざまな助言に悩む我が財布
悩みなど無用試飲の栓を抜く
聞き役の吾輩だって有る悩み

高槻市　富田保子

私より長生きすると言ったのに
不況風年金様へ手を合わす
無料バス有難いなと地図を見る
夢ひとつ捨てると視野が広くなる
やる気ある時はチャンスが巡りこぬ

高槻市　原洋志

チャンネルを回して紅葉見て歩き
バーゲンで上手に買ったはずのムダ
コンビニをオアシスにする独り者
誘発のスマホ親の目届かない
年金の目減りで旅が縮こまる

高槻市　松岡篤

断捨離の前で未練が通せんぼ（断捨離）
断捨離の最難関は人だった
捨てないよ場所図書館に移すだけ
栄光のカップ銘板だけ残す
グリップにナイスショットの跡がある

高槻市　安田忠子

令和初の忘年会に超浮かれ
ご馳走を頂く時の超笑顔
爪を切る伸びる早さに驚いて
少し言葉控えめにして穏やかに
孫の未来確かめてから逝きたいな

豊中市　池田純子

目覚しにお断りして朝寝坊
機種変更スマホと日々を知恵比べ
跳ね回る妻には羽根があるらしい
一年の記憶をたどる日記帳
温かい師走が不安温暖化

豊中市　上出修

低金利株へ土地へと走り出す
団塊から受けるバトンは重すぎる
コンサートの余韻肴に酒を飲む
百年に一度の豪雨今年二度
女子会に占領されるランチ時

豊中市　きとう　こみつ

曲がっているきゅうりが持っている主張
日本の国旗汚れがよく目立つ
羊水にいたから水泳は得意
輪ゴム5つ並べてできる五輪の輪
犬の歯もきれいに磨く愛犬家

豊中市　藤井則彦

相槌はイエスなのかとつい思う
円満な夫婦は人の字に似てる
強面ほど女の涙には弱い
肩で風切ってた人がボランティア
少子化は残業ばかりしてたツケ

豊中市　松尾美智代

佗助は一輪がいい小さき床
人の命も流れる川も還らない
しなやかな絹　強い木綿も母の糸
コンビニのコーヒーを飲むジム帰り
我家の主孫のひと言畏まる

豊中市　水野黒兎

銀杏散り浄土を照らす高野山
突然の訃報棒立ちの師走
もう少しあと少しだと目指す丘
新しい風に出会える一人旅
無の境地悟れぬままに除夜の鐘

富田林市　片岡智恵子

野の花の名を諳んじて茶花なり
くわえ煙草で赤ん坊背負う女に逢う
明日あると思う心は隙ばかり
中村医師の死へ悲しさと悔しさと
戦中派反骨心に支えられ

富田林市　中村恵

火を踏んで走る少女の恋一途
吹く風はわたしの弱み突いてくる
意地悪な今日のメガネは曇りがち
泣きに行く秘密にしてる場所がある
寝る前にリセットボタン押しておく

寝屋川市　伊達郁夫

本一冊あれば私の居場所です
置手紙戯れですか愛ですか
山肌を童話の色にする枯葉
隙間風ずらしミカンを剥いてます
ウインクをされて私が発芽する

寝屋川市　冨山ルイ子

今も夜はきらい仲仲眠られぬ
12時1時2時3時やっと寝る
熟睡をせぬ人早く死ぬらしい
中村哲医師長生きして欲しかった
大根の間引き菜漬ける揚げと炊く

寝屋川市　平松　かすみ

お茶お花習った頃が華でした
冷えピタで直るくらいの恋でした
天秤に掛けて嫁いで来たそうな
ママチャリがくつろぐ主婦の風邪三日
シャッターが下りたままです靴の音

寝屋川市　森　茜

燃えるものあるか熟睡する孫よ
亡父の喝ずっと後押ししてくれる
尾瀬歩く日へこつこつとストレッチ
お神楽が消え森閑として鳥居
今日の無事いとおしむよう夕焼ける

羽曳野市　安芸田　泰子

漕ぎ出す令和の舟に乗れた幸
芽吹く春信じて落葉いさぎよし
気象異状秋の居場所が狭くなる
後悔を引きずっている重い足
裏切らぬ土と信じて種をまく

羽曳野市　磯本　洋一

水の都考えられぬこの惨禍
無戦国日々の幸せ日本丸
廃校の黒板に書くありがとう
菜の花がちょっと早いか首すくめ
エンジンを止めてペダルを見て降りる

羽曳野市　宇都宮　ちづる

給湯器突如壊れた冬の朝
預貯金をごそっと消した屋根修理
老いの居に執事のような器械来る
年賀状おせちお掃除皆簡素
老いの朝俎板の音しなくなり

羽曳野市　徳山　みつこ

ぱっと開いた山茶花の紅に酔う
改ざん廃棄隠ぺいどっと持ち越す
黙々と日々山守る一軒家
縁側の陽に充電をした私
見渡せばいっぱい学ぶ背なばかり

羽曳野市　三好　専平

笑わない老いた貉となりにけり
生きているうちは地球よ壊れるな
財布にはゼニより薬入れておき
わたくしの断酒奇蹟のつみかさね
新しい落葉を踏んで初詣

東大阪市　北村　賢子

おだやかな初日を祈る令和二年
硬い蕾もようやく春の陽へ笑う
暗雲の奥に広がる青い天
寂しさへ尚更凜と背を伸ばす
刻まれた皺に生きてきた誇り

東大阪市　佐々木　満　作

コンマ差の悔しさリベンジを誓う
少し間を置いて状況見極める
喪のハガキ嗚呼あの人もこの人も
紅白の裏番組を観る晦日
木枯らしに負けぬ後期の万歩計

枚方市　丹後屋　肇

相撲列車春到来を告げている
待ち兼ねたファンの耳へ触れ太鼓
場所入りへ鬢の香りを嗅ぎにゆく
小兵力士館内が湧く技のキレ
重い怪我序二段リベンジを誓う

枚方市　藤村亜成

不可解な行動スマホ持ってから
好奇心のぞかせてからの縁
ちょびっとでええから美味いもん食べたい
鍛錬の木刀朝の空気斬る
予告して友逝く言葉のしかかる

枚方市　山口弘委智

ふるさとの記事に包まれ野菜着く
秋惜しむ鉛筆の芯尖らせて
根に命とどめて草は春を待つ
ふたりして感謝感謝の大晦日
冬晴れは天の素顔が透けて見え

松原市　森松まつお

二日目は大雨でした加賀温泉
お土産は相田みつをのカレンダー
爆睡の妻だ机が変ろうと
辛抱の足らん自分に腹が立つ
まだあおり運転してるアホがいる

箕面市　大浦初音

悩んだ時は楽しい方を選ぶこと
やってみよう転がる石に苔つかず
ボケ防止行くところ有り用がある
振りむかない未来は前で待っている
憧れる八十路すぎてもピンシャンと

箕面市　酒井紀華

ラフランスの姿で老いる妻の背な
来年は末広がりと御告げあり
花笠音頭みんな美人にみえる笠
したたかにジルバ踊って自己主張
夕暮れにサンマ焼くのか笑い声

箕面市　出口セツ子

老春譜息子と海外旅行する
三日間次男荷物を持ってくれ
喜ばすために観光ガイドの子
四十分遅れが普通らしいバス
三時間待ちの高級レストラン

夢語る孫へ平和を守らねば
カニカニとカニアレルギー恨めしい
福袋おせち予約と急かす暮れ
残り物煮込みおでんに早変わり
ウォーキング試飲で元気取り戻す

箕面市　広島巴子

裸木の桜へ非情の雨霰
老友（ともの）の訃へ朱線はうすく直ぐ会える
かすみ草無ければ花束引立たぬ
花屋にもエリートたちの別室が
松園は娘の恋を雪で画く

八尾市　内海幸生

まあまあの人生今日も空青い
無農薬誇る胡瓜のイナバウアー
燃え尽きるまで刺を隠して咲うバラ
来年こそは完全燃焼してよトラ
動物の楽園脅かすヒト科

八尾市　寺川はじむ

A市とB市で違う老人の扱い
上下など関係はない露天風呂
けんけんぱが出来なくなって冬に
待ちかねた本が届いて寝不足に
足の踏み場ないけど跨いで通る

八尾市　宮﨑シマ子

どうせなら笑顔えがおの十二月
待っても待たなくても正月は来る
時には合意なき決断もあるが
まだ続くもういいかい　まあだだよ
七草を言えるまだまだ大丈夫

八尾市　村上ミツ子

大阪の師走マラソン走り抜け
木枯しに気持ばかりが小走りに
残照のように生きたいもう少し
老舗にもペイ専用のレジが有り
庖丁を研いでトマトの試し切り

八尾市　山根妙子

行ったとこばかり懐かし老いの旅
どないしょう想定外に備えろて
街歩き頭の中にトイレ地図
地蔵さまゆっくり話できそうだ
お隣りも老いたお二人だけの音

神戸市　上田和宏

冬晴れや時間たっぷりある一日
人の世かＡＩの世か新世代
浮遊するプラスチック死んでゆく海
丸うなる気などさらさら無い傘寿
国栄え廃れゆくままの故郷

神戸市　奥澤洋次郎

妻と僕ケンカも生きる証です
亡妹が手塩にかけた孫元気
○と×はっきりさせぬ老いの知恵
新しい靴今日の散歩は遠まわり
赤提灯しばれる夜の救世主

神戸市　敏森廣光

現地人と思われスリも狙わない
広東語はケンカしているような音
香港デモでツアー予定がよく狂う
香港の良さを大事にして欲しい
百歳と元気に五輪見られそう

神戸市　能勢利子

萎えていく気力体力もどかしい
へこたれるな元気を出せと大落暉
不器用な男もついに八十路まで
落葉散るようにふわりと終の章
ギブアップだけはしないと八十路坂

神戸市　山口光久

サンタさん信じてる子の目が愛し
ヘルスメーターふえても減っても叱られる
もっともっと使ってくれと言うスマホ
生きてるから悩むんだなと書く日記
老いるとはこんなになるの身のまわり

神戸市　山口美穂

恋かなしメトロノームを狂わせて
明日開く蕾の先にある未来
新しい風に出逢ったいい笑顔
ふわりふわふわふわふわと生きている
出来た子と誉めているのは身内だけ

神戸市　山﨑武彦

老いふたり一つで足りるティーバッグ
寄せては返す波は地球の胸さわぎ
灰色も真似のできない個性です
膝裏の汗が覚えている蹉跌
年輪を数えてみれば同世代

明石市　糀谷和郎

福袋の中で微笑む鬼の面
デコボコがあっても丸い地球です
丸くなるどころか意地も張る八十路
花はみんな綺麗二十歳は花ざかり
千両役者にネズミ仕立てたバンクシー

尼崎市　加川靖鬼

光る目にウソなどないと信じたい
キャンパスの個性ゆたかな林檎たち
たんたんとこなしています日々のこと
遊ぶにも何かと知恵がいるのです
夕暮れに止まってしまう思考力

尼崎市　近兼敦子

尼崎市　永田紀恵

よく見れば狡猾そうなパンダの目
味よりもインスタ映えのする料理
タピオカも仲間入りした回るすし
年金の枠でお酒とおつきあい
亭主関白妻が相手にならぬだけ

尼崎市　藤井宏造

カウンターみんな淋しい一人酒
アル中にならぬ程度の酒を飲む
爽やかな恋をみつけに朝歩き
午後休診そうか土曜日だったのか
窮屈なような気もする深情け

尼崎市　藤田雪菜

風の音配って淋し冬となる
平和だなあ秋は新米いただいて
焼き芋をホクホク冬の贅食べる
見て回り優雅な顔に菊花展
主婦の座を一日やめる日曜日

加西市　山端なつみ

迷ったが賀状出そうと腰上げる
関空発二時間十分ロシア領（国際交流）
駅観光空港並みのチェック受け
草の根の交流料理と折紙で
帰国した実感便座温かい

川西市　山口不動

逆縁の母へ捧げるレクイエム
柳誌読む（故）とある方を二回読む
南極の氷溶けるや天高し
あの赤はどうだんつつじあの紅は
ソプラノを神へ返しにしのぶ逝く

三田市　足立つな子

総門仰ぐ念願かなう禅林寺
圧巻の真紅のもみじ目を奪う
定評の秋はもみじの永観堂
臥龍廊の傍のエレベーターに乗ってみる
ほほえみのみかえり阿弥陀に手を合わす

三田市　上田ひとみ

逢いたいと思う泣きたいとも思う
思い出はたくさんだけど淋しいよ
強くなれ守ってやると言ったでしょ
金風が吹く頃旅に出たのです
さよならの前にあんなに高くとぶ

三田市　大西重男

姉からの電話はいつも生きてるか
全員の飲み代払いあと悔む
飲酒喫煙できる特養探します
杖ついた自分の姿想定外
八十路でも子離れできずいらついて

三田市　尾崎一子

東京で家族が揃う母の喜寿
孫がうたうきれいな声を聴く車中
両方に孫ぬくもりが心地よい
なつかしい東京タワー半世紀
みんなから大きな花のサプライズ

三田市　九村義徳

無位無冠これほど楽な事はない
俺流に生きていますと言う頑固
肩書きが取れて無力を知らされた
糊代をたっぷりとって生き過ぎた
自分史に一筆夢を足してみた

三田市　多田雅尚

作るのは無理美味い不味いは言える
はやぶさ2帰還の土産待ち望む
白旗は振っても曲げぬ強い意志
歳月が不正も上手く忘れさせ
世界の目口先だけと化石賞

三田市　谷口修平

投げ出さぬ人が担いでいる神輿
絵文字でもちょっとドキッとするハート
シャッター街欠伸している招き猫
買いだめをしたから余計吸うタバコ
要らん事言うて自分の首締める

三田市　福田好文

木枯らしが無為に過ごした日を叱る
七回忌仏忘れて飲むしゃべる
深追いを悔いて酒場の隅で酌む
撮るたびに遺影を意識する八十路
飲み会のリーダーならば出来そうだ

三田市　堀　正和

柚三つ抱えて独り冬至の湯
パスポート切れて青春切符へと
コンビニが休み欲しいと言い出した
プレバトのファンの妻が姦しい
日に三度腹が空くから大丈夫

三田市　松本ゆかり

がらくたに埋もれてこれが至福なり
悪さするお金も今や億単位
立役者やっぱり裏の顔を持つ
好きに生きリスクの覚悟だけはある
進化論足をひっぱっている私

三田市　村田　博

そこそこに元気だけれど覇気が無い
まだ残る野心両手の範囲内
イエスノーだけで返事は出来ますか
補助輪を外し爆走する笑顔
洗濯機過労死のよう幕閉じる

高砂市　松尾柳右子

朝晩の祈り幸せかみしめて
避難所の冬を想像して耐える
おいしさの秘密は家族揃うとき
高齢化進み平和を考える
お化粧をすれば微笑みしゃんとする

宝塚市　丸山孔一

感謝ですいつも通りの今日の日に
木の机古い演歌の店で飲む
相続の手間を思って株を売る
あの白衣脱いだらただのオッサンや
スッピンも寝起きの顔も美女は美女

丹波篠山市　北澤稠民

年金でもしももしもの夢を買う
この田んぼ来年何を作ろうかな
今日もまたわしより若い友が逝く
酒の威が強気にさせる薄っぺら
幸福とは皆の答それぞれに

丹波篠山市　久保木剛

忘年会日頃の無口うそのよう
とりあえずビールとお茶のように言う
誘い水みたいな酒で終る宴
農閑期何もせんのに酒はいる
忘年会またやりました二日酔い

丹波篠山市　酒井健二

どっこいで昭和はパワーアップした
先読めぬままに健気に生きている
コーヒーにパリが流れて三百円
もの悲しジングルベルは聞き飽きた
アフガンで貫いていた生きていた

丹波篠山市　長谷川善輔

妻逝きて子ら年毎に遠くなり
スマホ鳴り子から文字だけ〝帰れぬ〟と
黒豆煮食べて想うは妻の味
爪を研ぐ猫満足顔で笑むがごと
一人居て猫に敬語で話しかけ

西宮市　秋元てる

とばっちり上手に躱す術を子に
どんぐりの帽子集めて冬に入る
早よメモれ生きた言葉にゃ羽根がある
まだ行ける言葉に力ある老母よ
前触れは要らぬ眠ったままあの世

西宮市　緒方美津子

年越せそうやねえ母からのメール
ケーキとローソク反比例するバースデイ
ママ友は子育て上手譲り合い
すっぽんぽんの冬木立山眠る
安いと思い込んでる詰め放題

西宮市　亀岡哲子

ハクションが出てすっきりと年明ける
晩年運は吉で長生き考える
家系図のアンカーとなる子が一人
満米寿ラストを飾るクラス会
得か損かやっぱり損な下戸である

西宮市　福島弘子

木枯しに耐える梢の小さい芽
銀ねずのドレス雅子妃気品増す
ユニークな草間弥生に魅せられる
さき織のバッグに友の在りし日を
柿みかん亡父の丹精甘かった

西宮市　福田正彦

交差点小走り出来ぬ足に喝
言訳は少しも聞かぬ父だった
危うさも個性を発揮乗り越える
一ひらの落葉に託す想い出を
楽しみを少し見つけて霜を踏む

西脇市　七反田順子

四季桜紅葉とマッチ絶景だ
ニューオーリンズ猫もジャズ聞くリズミカル
山茶花が鈴なりに咲く自然体
エアコンも新品温し孫を待つ
マリアカラスオペラと恋と燃えつきる

南あわじ市　萩原狸月

窓外に雁の渡りを見た旅情
近大も大間も区別出来ぬ舌
古民家の壁の汚れも文化財
長距離はこれが最後かこの疲れ
勝ち越せばうれしかろうに無表情

奈良市　宇賀史郎

世代ごと違う常識ある時代
その道のプロさえ欲しいアドバイス
日に万歩薬十錠医者通い
親我慢子供は言葉さえ知らず
遣り繰りにチラシ比べる妻の朝

奈良市　大久保眞澄

帰ります馬車がカボチャになる前に
菓子折りに小判令和の事件です
紅葉をスルーして枯れ葉になった
高かったと思うと捨てられない服
一泊にスーツケースのお嬢さん

奈良市　髙橋敬子

今年きた賀状数えて買う葉書
子の都合まず聞き決める三ヶ日
残りの日々楽し思い出増やせたら
伝統の品かざるお節に春あふれ
何作ろうと料理番組見る師走

奈良市　辻内げんえい

ふるさと納税お礼の品を待ちわびる
最後まで断捨離できぬ宝箱
通学路天使のはねが今日も行く
師走正月ここが勝負と受験生
留守番も孫いて羽根も伸ばせない

奈良市　山本昌代

コロコロと太めの母はよう笑う
栗ごはんに副える笑顔のエピソード
下手なウソ笑い話にして包む
笑いごえ咲かせています父母が居て
笑ってはおれない母の泣き言を

奈良市　米田恭昌

教皇来日平和に祷り深くする
原爆ドーム朽ちても凜と反戦歌
ホップステップ　ジャンプ忘れてけつまずく
負け虎の遠吠えポーズなら得意
まだ大丈夫だろうと五年日記買う

生駒市　飛永ふりこ

新春のめでたさ醸す寒牡丹
歩きすぎ遊びすぎたかどんと付け
はてさてと令和元年地も憂う
後姿もしやまさかのざわめきが
千春フォーク美声響いて人心地

香芝市　大内朝子

消費税アップやりくり腕上げる
亡母を恋甘えたい日の金平糖
七人の敵も一緒に老いている
冬枯れの雑草の根の逞しい
胸張ってオンリーワンを生き切ろう

香芝市　山下純子

火祭りの勇姿の君もあっと逝き
聖火ランナー復興掲げ東京へ
二人三脚転びながらも半世紀
青春を過ごした町で古希祝
ハートマークだけの告白片想い

桜井市　安土理恵

虚しさにふらりと出れば鎌の月
わたしの柩へマーガレットと白ワイン
上向いてごらんよ白い佗助よ
戒名は要らぬわたしはわたしだけ
冬の陽を淋しい胸に貼っておく

奈良県　安福和夫

没頭のつけが手足に足腰に
過ぎたるはの格言今身に浸みる
体調のケア怠れば趣味逃げる
匠には立入りできぬ世界あり
アバウト流効能伝授したかった

奈良県　谷川　憲

友の訃に長き思い出かけめぐる
老犬の介護に自分重ね見る
流星群天体ロマンかきたてる
子沢山の家に住みつく福の神
金婚過ぎ解けぬ未知数なお隠れ

奈良県　中堀　優

お相手が嫁はんだから言える事
野良猫に不足の愛をあげる妻
二人して花が咲く日も枯れる日も
家族の声聞いた時だけ開くドア
裸歩き誰も注意をせぬこの世

奈良県　長谷川　崇明

本真もん後姿に惚れ直す
追いかけるノルマが僕は鬼に見え
平均寿命伸びる幸せ不幸せ
二つ三つ予定とばした暮れの風邪
歳閲かれ干支で答えるお正月

奈良県　渡辺　富子

百名山こたつで踏破して満ちる
愛と憎きわどい距離でせめぎ合う
地下茎を張った反論揺るぎない
ひとつずつ背負うもの捨て風になる
人生暮色少し虹色塗っておく

岩国市　上村　夢香

小野小町に惹かれて古都の街ひとり
年の瀬に推理小説読み耽る
消費税どこ吹く風の東京は
初対面憧れの師と語り合う
師の言葉耳にチクリも心地よい

宇部市　平田　実男

ヘルパーの方もやっぱりドッコイショ
儲けにはならない鍬を今日も振る
年金が出る十五日二重丸
平成のバトン令和へ重た過ぎ
一日に一句六千歩がノルマ

下松市　有海　静枝

賛成と言えば安定ままの椅子
何故耐える波風怒涛ど真ん中
上からの目線に無意識の反旗
書くことが自己分析になり鎮む
前向かぬ日はおひさまが背に温い

防府市　坂本　加代

どの街も昔栄えた銀座名
爆音に猫も見上げる訓練機
不器用を看板にして闊歩する
干し草を座布団にして猫昼寝
抜かないで草も自由が好きだから

鳥取市　池澤大鯰

新年だ心と体リニューアル
包丁を新しくして腕に撚り
新妻の魅力のままで居て欲しい
金入れ歯やはり光って見えるかも
厚化粧光っているので正視せぬ

鳥取市　奥田由美

三泊では時間が足りぬ美人の湯
コンビニも信号無いが持つポルシェ
ユニクロに一枚も無い肥満用
軽トラに鹿が飛び込むほど過疎地
病窓に初冠雪の伯耆富士

鳥取市　加藤茶人

母の飯美味い無言の三杯目
有り余る時間足りない金の老い
井戸端のつもりロビーの立ち話
人が良いだけでは金はそっぽ向き
頭では理解出来ぬが腹は減る

鳥取市　岸本宏章

ボーッとして過ごす私のオフタイム
妻の留守パントマイムが多くなる
養殖の池には雑魚は入れない
渋いお茶入れて話題を切り替える
動揺が顔に出るからまだ小物

鳥取市　岸本孝子

七坂もカーブも越えてダイヤ婚
恩返し出来たか墓に聞いてみる
童謡と演歌の好きなおばあさん
旅立つ孫に財布の紐が緩くなり
温暖化サンマ漁まで波かぶる

鳥取市　倉益一瑤

言い分けのうまい男のやさしい瞳
悲しみを隠す笑顔が愛おしい
笑う癖泣く癖母にそっくりだ
生きるため尻尾は巻いておきましょう
鳥になるあとひと息がむつかしい

鳥取市　田賀八千代

相合傘に私の名前書いてある
今頭上げれば指名されそうで
手の届かない場所にあるから欲しくなる
スマホ変え孫に習ってするライン
生きている海だやさしく恐ろしい

鳥取市　棚田大

便利な世でも難題はどんと増え
おしゃべりも無言になって月眺め
何故か俺無言で過ごし喜ばれ
無言またおもろい時といやな時
中秋の名月見惚れ何もせず

鳥取市　谷口回春子

恋女房になぜか言えないアリガトウ
後悔をしない一日夢の夢
恥をかく次へ飛躍の第一歩
優しさのわかる世界は異次元か
不利なことあっという間にシュレッダー

鳥取市　永原昌鼓

あんぐりを誰も笑わぬ歯科の椅子
母さんに一生感謝誕生日
老い一人無言で過ごす日曜日
老春のシンボル白髪しわやシミ
どのコート着ても似合わぬ試着室

鳥取市　中村金祥

面倒が脳を活性してくれる
動揺はするなと孫が目くばせす
身をよじりボールの行方追っている
車椅子押せる元気な脚褒める
欲は捨て元の生活願うのみ

鳥取市　平尾菜美

ありがとう癖が付いたらしめたもの
おしなべて元気な八十路百までか
まだ引導を渡せぬままの持病です
鍬もてばきっと前向きやる気でる
怯まずに歩む未来の夜が明ける

鳥取市　副井ゆたか

足腰のバネの補修にかける手間
トラフグを陸で養殖摩訶不思議
賢い蚊爺を狙わず子供刺す
誤字脱字気にしながらも書く手紙
飛魚出汁に五島うどんがマッチする

鳥取市　山下凱柳

何かある真相の闇蓋開かず
ワンチーム言っては裏で乱す奴
明日こそ言ってるうちに歳の暮
老いにボケ断りもなく忍び寄る
川柳で眠ってる脳呼び覚ます

鳥取市　吉田孔美子

幹不動多少の事は愛嬌よ
孫なんぞタマ三毛ふくと明け暮れる
熱中症にまた手前まで懲りないネエ
春蒔は三日目喜々と芽が揃う
財に埋まり嫁の保身か子を五人

鳥取市　吉田弘子

思い出を温めている独りぼち
万一が手抜きをさせぬ整理整頓
プロポーション亡母そっくりと姉笑う
今月もゼロで終った置きグスリ
無人島そんな気もする外は雪

倉吉市　猪川由美子

破棄や隠蔽守りに必死官邸だ
忘れちゃならぬ拉致や被災後時は経つ
舞台の蔭で病欠に泣く選手有り
目まぐるしい世　情報過多に草臥れる
アイドルたち我慢限界結婚す

倉吉市　岡﨑美知江

一息で書いた不戦の墨の色
プライドが脱げずどこでも持ち歩く
籐椅子の軋みに合せ唄う母
昔むかし語り合ってるデイの椅子
本音吐き潤う酒が胃にしみる

倉吉市　田中紀美恵

ねえ貴方五億ためたね遊ぼうか
ふる里をほんのり照らす冬の月
たくさんの友が待ってるふる里だ
夕映えをひとり占めするふる里が
ぞろぞろと家族八人生きている

倉吉市　牧野芳光

あちこちが故障を起こし冬になる
言葉では言えないスマホなら言える
耳鳴りが高まる静かすぎる秋
これまでとこれから先が纏いつく
まなじりを上げ老醜を脱皮する

米子市　池田美穂

二枚舌食べる時にはちょっとじゃま
韓流は好きなのに今複雑だ
スピードをあげて師走がやって来た
取らぬ柿熊が見かねて取りに来た
子年から初心に返り作句する

米子市　伊塚美枝子

七十路はゆっくりいこうマイペース
老人会先輩パワー負けそうだ
もちつきの子真顔で杵をふりおろす
京の旅巡る神社に散り紅葉
会席の京の野菜が語りかけ

米子市　後藤宏之

身体にいいとおかしくないが大笑い
古い人間つきあってくれるかな
柿の実を一つ残してさぁ来年
日めくりに又おこられて頭かく
宇宙語はペラペラ下の孫娘

米子市　後藤美恵子

いい記事を探す日課の虫めがね
目配せで心通じた長い連れ
摘まみ食いの味を知りつつ子に注意
宝飾の秋波に財布よろめかず
声なき声聞こえる人に票入れる

米子市　竹村紀の治

柿熟れる頃から酒も旨くなる
家中を朝から探す保険証
絵葉書と電話一本旅土産
茶をすする音だけがする朝ひとり
すり減った歯車に酌ぐ郷の酒

米子市　中原章子

善意の医師ふみつぶされる悲しさよ
よく生きてよく死ぬことを考える
早朝の冷気にふれて凜とする
目指してた平均寿命坂越える
プラごみの害をなくして身を守る

米子市　成田雨奇

落款が歪んでもわしゃ書家じゃない
祝賀会祝意と妬心五分と五分
朝寝坊すると一日すぐ終わる
今思うしみじみ父の無念さを
生きてると返事しといてまだを付け

米子市　吉田陽子

精神を統一朝のモカ二つ
十二月躓きやすい足さばき
失敗は学びへすぐに繰り上げる
生きている限り多忙でいいのです
着物眠らせ母に背いたなと思う

鳥取県　門村幸子

京に遊ぶ英気養うもみじ狩り
戦無い世界想像できませぬ
大人はのらりくらりとケンカせず
年齢を確かめる癖計報欄
ラジオ聞きあと寝るだけの夜が好き

鳥取県　斉尾くにこ

奥様の悪口なんか誇らしそう
口外はしない自分との約束
お話ができ握手までできました
嬉しくてほろ酔いみたい春みたい
砂利道は砂利道なりの歩きかた

鳥取県　竹信照彦

煩悩も湧くことも無し冬炬燵
災害が世界一位の国に住む
Iターン生きる力が逞しい
孫二人入試目前猛ダッシュ
僕だって健康作りぼちぼちと

鳥取県　山下節子

兄弟喧嘩無言のままで食事する
時々は無言になって意地を張る
おはようをパスワードにし朝の膳
領収証上様とありきなくさい
平均点より上であり安堵する

松江市　石橋芳山

情けない男でうじうじと水母
裏切りと思うピザなら食べられた
裏切りの挽歌かタコ焼きが焦げた
滑稽な話をポケットにしまう
プライドのいたる所に走るヒビ

松江市　川本畔

雑な音昭和の家の隙間から
両論を聞いてひそかに鍵握る
少しだけ遅れて灯り持っている
噂いま聞いたばかりの傘たたむ
旨そうな言葉が残りものを売る

松江市　藤井寿代

夕日を乗せて湖面を走るローカル線
午前二時魔女のフライト三日月へ
遠距離のメール私のカンフル剤
ポジティブに生きると決めてペダル踏む
さよならを告げて見上げる冬の空

松江市　松本知恵子

イノシシと勝負している里の冬
山の端に原風景の日が落ちる
青春のフォークソングは永遠だ
ジャズ聴いて体の凝りがほぐれゆく
老い母と古い写真に花が咲く

出雲市　伊藤玲峰

心身とも元気なにより転けまいぞ
まだまだと気持ゆるめず感謝して
七人の曾孫すくすく風邪ひくな
母の祥月命日 弟の嫁命拾う
枯れそうな身も足腰鍛え呆けまいぞ

雲南市　菅田かつ子

感心をしながら法螺を聞いてあげ
夕焼けの空へ夫は旅立ちぬ（夫の旅立ち三句）
ぽっかりと空いて寂しい夫の席
帰ったよ言えば遺影の嬉しそう
片づけてまた散らかして生きている

岡山市　大石洋子

木枯らしが銀杏を散らす髪乱す
該当者なし逆剝けの痛さに似る
納得がいかぬまま平成終る
木枯らしに蒲団を重くして眠る
LED青冴えわたる年の明け

岡山市　丹下凱夫

黄落の只中にいて詩人なり
黄落が終っていっぽんの冬木
失望をしている公園のベンチ
なにくその気骨はあるが知恵がない
たまごかけご飯ですますお留守番

岡山市　前田恵美子

コンビニが家の前です食料庫
米五俵家族のために備蓄する
猫餌もグルコサミンが入れてある
幸福の切符はいつも胸の中
落とした夢ゆっくり拾う道がある

笠岡市　藤井智史

自然体見せてあなたと結ばれる
永遠にともにとバームクーヘンの愛
愛妻に貰った新しい翼
結婚はまだかまだです過去のこと
もう二度と書くことはない身上書

岡山県　大杉敏夫

キューポラが夢に出て来る飯場めし
三つ編みのさゆりが僕の青春さ
手を当てて君の鼓動を聞く至福
届くかも満天星へ投げキッス
クリックで消される僕の遠い過去

岡山県　髙岡茂子

思いやり恥ずかしがって届かない
デイサービス遠廻りするバスに乗る
孫受験風邪はひけぬと予防注射
気に入りのすり切れバッグまださげる
視察して掃除機かけて嫁かえる

岡山県　田中恵

青春に戻してくれる山の歌
登り坂胸のシグナル赤になる
誘われる今が旬だと紅を引く
おだてにも素直に乗って場をしのぐ
飛び石にいちゃもん付けている歩幅

岡山県　藤澤照代

ふるさとにしんしんと雪ふるテレビ
冬の手に冬の温度で出る蛇口
恙無く今年も第九聴いている
生きている証に出している賀状
鏡餅のヒビ母の手のひびに似る

竹原市　岩本笑子

知恵の輪を夫と競争して冬は
しんしんしん冬は私を追い越して
また薬増えたな二キロ痩せ
生きるのはこれからですよ毛糸編む
折り紙で折った薔薇から黄昏れる

三原市　鴨田昭紀

平仮名の言葉でチクリ刺してくる
微震にも崩れる老いた父の壁
わたくしの影がだんだん薄くなる
よそ見してうっかり幸せを零す
本当のわたしを探す遍路旅

東かがわ市　川崎　ひかり

閉寒成冬大根甘くなってくる
今私生命線のどのあたり
八十の手習い遅くないですぇ
手の届く処にいつも川柳誌
孫が来るまだまだ回る八十の独楽

松山市　栗田　忠士

冬ざれの広野に父が立っていた
丁寧に冬のしじまを編んでいる
冬の樹が明日へ貯めているマグマ
母さんの煮しめミシュラン五つ星
百均の掘り出し物がよくしゃべる

松山市　古手川　光

錦秋の故郷で心解き放つ
過疎進む嗚呼故郷が埋もれる
安心して病気も出来ん老い二人
嘘つきには見て欲しくないと桜
よちよちでスタートよちよちでザエンド

松山市　宮尾　みのり

ライオンもばらも孤独もあって街
パステルカラーの中で過ぎた日遊ばせる
端折ること割り切ることも生きる知恵
いきいきと身の程を知る雑魚である
真実も嘘もスマホの持つ力

松山市　柳田　かおる

自然治癒できない白い風が刺す
ゆっくりと待とう未知数なんだから
いい話に続きがあった泥の舟
することがいっぱい今日がすぐおわる
賞味期限切れるころからいい味に

西予市　黒田　茂代

異常気象の狼藉季語を狂わせる
この頃の旅のお供に保険証
エンジンを掛けても従いて来ぬ体
治らない痛みを歳が連れてくる
ガス中毒にならぬ程度に隙間風

西予市　西田　美恵子

吹き荒れる風には帰る場所が無い
スマホの指よりポストへ向かう足が好き
母の丸い背なが私の道しるべ
妬心一つ酔って今夜は眠りたい
策尽きて一日亀の甲羅干し

土佐清水市　辻内　次根

山盛りのごはん朝からいい天気
相応と思えば今日の物忘れ
日向ぼこ猫も半時動かない
月を観る信じられない地動説
冷える足独り暮らしになってから

（山崎武彦さんは43頁にあります）

川柳塔の川柳讃歌 ⑱

上方芸能評論家　木津川　計

伯父の家まず本棚を見た十五

山田　耕治

含羞の詩人だった杉山平一は若い頃、友人が家へ遊びにくるとなると書棚をカーテンで隠した。書架を見れば人物が判る。「裸を見られるようで恥ずかしい」とも杉山は書いた。僕の家は地下一階の小さな木造三階建てである。地下は書庫で内三分の一が書斎だ。やはり書庫は見られたくない。手のうちを見すかされる気がする。耕治さんは十五歳のとき、伯父さん宅へ行くとまず本棚を見た。伯父さんを計るとは耕治さん、すでに読書人でした。

大輪かと蕾のうちは期待した

吉岡　修

その杉山平一に「蕾」という詩がある。「誰がつくった文字なのだろう／草かんむりに雷とかいて／つぼみと読むのは素晴らしい／とき至って野山に／花は爆発するのだ／遠い遠い花火のように／その音はまだ／この世にとどいてこない」。まことに詩人は言葉の狩人であり開拓者だ。小さなつぼみは雷を内蔵していたのだ。爆発して花は開いた。修さん、その人物はまだわかりません。ある日、爆発して大輪風を見せてくれると期待しましょう。

関心は百まで持つか運と金

上出　修

「無職の高齢夫婦で年金などの収入が月約21万円だと、食糧など生活の支出は約26万円で毎月約5万円不足し、30年で2千万円も必要になるそうです。金融資産を持っていない人にはとても悲惨な数字になってしまいました。私は今のように年金をもらえるのか心配です」と朝日の「声」欄(19年10月22日)に11歳の小学生・川合陽佳ちゃんが投書した。11歳が将来を案じるアベノミクスである。修さん、百まで金が持つかどうか。あとは運次第です。

人知れず咲いているにちがいない

居谷　真理子

山の中へ入っていった幼いあやは綺麗な花が一面に咲いている所で山姥に出会った。山姥は一面の花を指差しながら「やさしいことをすると美しい花が咲くのだ」と語り始めた。「あやの足元に咲いている花は、お前が母親や妹のことを思って着物を買ってもらうのを辛抱したときに咲いた花だ」と妹だけにしか着物を買えない貧しい暮しの母親を思ったあやをほめた。斎藤隆介の名作『花咲き山』だ。真理子さんもやさしいことをされた筈です。

過去だけで終わる飲み会もうやめた

酒井　健二

毎日が日曜日で将来のない人は過去に寄りすがる。かつての栄光を誇ったり失敗を悔いたり、若い日々を懐しんだり……。そんな飲み会をやめて今を語ると、老化や病院通いの話ばかりで何一つ夢がない。先の杉山平一は90歳で出した詩集『青をめざして』の詩「マッチ」でこういう。「アンデルセンの少女のように／ユメ見ることのできるマッチを／わたしは　まだ何本か持っている」と。健二さん、90歳で「何本」もなら貴方は何十本もですよ。

練りあげた一句がまたも没になり

足立　つな子

中村草田男の名句「降る雪や明治は遠くなりにけり」を虚子は没にしていた。周りに指摘され、虚子は己が非を悔いた。岸本水府の選句も速く、ほとんど一瞥だった。練りあげようがあげまいが瞬時で選り分けた。虚子同様に見落とされて宙に消えた名吟があまたあったことを察するものだ。つな子さん、そう思えば諦めもつく、のではありません。貴方の無念の思いは、この讃歌で晴らされました。

自選集

ふむふむふむ妻が遺影を撮って来た
亡父の知らない風景がある七十二
年男ですと吹聴するなかれ
国宝の島から初春の景を見る
真っ新な御朱印帳と旅に出る

小島蘭幸

不器用なくらし重ねている夜寒
ふところの真ん中へんに老母在す
逃げ道をつくる淋しいふところだ
ふところにいつもほっこり冬の底
かきまわす口はいつもの女へん

宮西弥生

口出しをするから後に戻れない
心臓が時々急に踊りだす
順送り人事はいつも破綻する
十六歳の少女が大人を叱る
何をしたという事もなく過ぎる日々

村上玄也

小刻みに来る幸せは有難い
カタログで見るだけ新型の車
頑張って八〇二〇を目指す
渡り切るまで持たせたい浮き袋
ぽつぽつと身の上話する落葉

森山盛桜

渡り廊下

渡り廊下の中ほどあたりしずしずと
此の廊下　狭くて進めないのです
旅の駅　ここらあたりが別れ道
待ち時間にはぴったりのティールーム
枯野にも春が来そうな水飲み場

八木千代

視線まっすぐハートに届くめぐりあい
スタイルは言わぬ重ね着小雪舞う
友突然死悲しくも羨まし
スーパーはここパーマはここと押し通す
老々介護笑顔が少し足りないな

山本希久子

おめでとう御節料理の迷い箸
伊勢海老も鮑も食べてかずのこも
泥鰌鍋元気もりもり食べなはれ
長生の秘訣暴飲暴食で
亡母さん元気ですか　にぎりめし

板尾岳人

謹賀新年みんなが笑えますように
ひと言の重さもやがて風になる
気づくまで抱かせておこう無精卵
片意地を張って人生損をする
よく喋る本を一冊持っている

川上大輪

開戦日バンザイをした記憶あり
順不同だから気楽に生きている
卒寿にもまだ満ちて来る潮がある
藁屋根で育ちマンション暮しです
長生きを鍾乳石に笑われる

北野哲男

眠りから覚めない街のエトランゼ
てのひらの窪みに哀を溜めたまま
改札をピピッとタッチして鳥に
ひとり来て砂のつぶやき聴いている
たもつさんを想う銀杏の降る街で

木本朱夏

ふるさとの山が見送る霊柩車
地吹雪の底で新芽を抱いている
なまけてはあかんと天は雪をくれ
人情の香りただよう駅弁だ
牛の瞳に写ってるのは農高生

斉藤劦

金持ちの真似していると襲われる
うわべより中身ミサイルより笑顔
負け犬の影に重なる僕の影
ふんわりと温い蓋です掛け布団
桜咲くまでとろとろとゴミの中

新家完司

納豆とニンニクで消す加齢臭
団塊の挽歌「高校三年生」
団体旅行トンチンカンがひとりいる
まずは風呂・ビールそれから考える
その話出ればそろそろお開きだ

髙瀬霜石

何もかも頭に令和初と付き
身の丈の以上を願う初詣
申し訳ないと許されない話
生かされて等身大を良しとする
ハヤブサに会うまで生きて行く決意

竹治ちかし

奈良まちもインバウンドにアッピール
紅葉も見事合祀の弾む息
友情の輪に支えられ合祀祭
一周忌心の箍を締め直す
ミステリーツアーで旅の締め括り

津守柳伸

短か日の無残に陥る秋の窪　都倉求芽
いっせいに網打ちされる秋の冷え
鳥までさみしげに鳴く秋の暮れ
ライトアップもみじはヒトに酷使され
年号に元年はなし年賀状　西出楓楽

令和元年何とも辛い坂だった
引き摺った昨日だんだん重くなる
かなしみが内に籠ってゆく冬日
胸のうちブルーなままに秋から冬
何事も水に流している途中　土橋螢

宿題の子に毛糸編む母がいる
人の世は雪解脱山光輪寺
埋火に疑うことは悲しけり
宇宙船戻りて冬の月冴えて
柿干して山に雪くる山家あり　仁部四郎

すべきことできることとはちょっとの差
できること無駄口減らし往く八十路
すべきこと住民税は納めてる
できること妻に忘れず礼を言う
すべきこと投票権を果たすこと　三宅保州

南国といえどもこたつ入れてます
奥様によろしくと言うライバルよ
旅人はやたらと褒める雪景色
旧正月でなければならぬ漁師町
帽子廻して急造の募金箱　福士慕情

木枯しやビビンと唸る津軽三味
人を恋う木枯し窓をノックする
木枯しに鬣なびく寒立馬
木枯しが黄の絨毯を敷きつめる
木枯しが冬の扉を開けにくる　三浦強一

目を覚ませ気象災害世界一
日韓のグーチョキパーが終わらない
血圧は正常懐は異常
質問を浴びせて医者に嫌われる
子らよりもご近所さまへありがとう

新家完司川柳集（七）
『令和元年』
定価　1000円＋税＋送料
お申込み先　新家完司
TEL 0858-52-2414
FAX 0858-52-2449

川柳塔

（つづき）

（前月分）神戸市　山﨑　武彦

うきうきと生きてふわふわ老の恋
爽やかな風も味方のマタニティ
二枚舌まだ奥の手があるらしい
孫抱けば笑顔の中に歯が二つ
突然にライバル折れてくる怖さ

五煙抄

（つづき）

竹原市　若年　幸子

北風のヒュルリー紅葉踊らせる
お土産のレモンケーキは恋の味
名は出ぬが渾名とび交うクラス会
高齢独身お向い両隣

今治市　渡邊　伊津志

拉致と核アクトラインも掴めない
後ろにも目があるような感の良さ
空揚げの目をひん剥いた虎魚かな
貌に似ぬ珍味虎魚の薄づくり

高知市　三谷　松太郎

洋風の窓にちらりと老絵描き
落葉焚きしゃれた古着の重ね着で
買物は赤いポンコツのろのろと
ご婦人の気配はなくて独居らし

温故知新

小出智子川柳句集『蕗の薹』から

せっかちな人ばかりいる三分咲き
なりゆきで描かねばならぬ私の絵
若者の五月と同じ筈がない
おだてにも乗ろう鞭にも打たれよう
竹の皮で包んでほしいにぎりめし
可愛らしい鼠に描いてやりましょう
元日の家族がみんな揃っている
忘れられてゆく焙烙もゆきひらも
風船の数としばらく莫迦になる
線香の灰がすこうしずつ溜まる
繭の中恩を返してから眠る
鍋の底辛い話がこびりつく
忘れたいことを日記に書いている
何時死んでもきっと何とかなりそうな
人想う生駒山から時雨する
朧月五十半ばのつつましさ
屑篭を一つ私の部屋に置く

川上大輪選

三原市　笹重耕三

ご迷惑おかけしますね千鳥足
遠回りしながらやって来る皮肉
まあだだよ闇夜の裏で嗤う月
足腰を鍛えて老いにぶら下がる
かさ蓋を剥がすと顔を出すやんちゃ
気を抜いた辺りに潜んでるまさか

三次市　伊藤寿子

誕生日よう生きたねと亡姉の声
割り勘で誕生祝いして貰う
血圧の上がる話に耳を貸す
人生の緞帳下りるまで笑顔
令和の孫抱いては嬉しちと悲し
なるようになるさと生命線なでる

寝屋川市　川本信子

病室の外は無音のクリスマス
めまい症じっとしてましょ寝正月
退院で何はさておき家の風呂
百歳へどの色塗ろか模索する
置いてきた過去がとっても愛おしい
ひとつずつ枠を外して老いの坂

貝塚市　吉道あかね

お互いにとろりとろりと春の酒
生姜湯も柚子湯も揃え冬の中
充電をしすぎて体重くなる
百歳を生きるとしたら今が旬
来る年も転ばぬように惚けぬよう
うっかりもぼんやりもして老いの影

松山市　大内せつ子

おまけの話こころの隅をつっつくの
左巻きのつむじは父の置き土産
クレヨンの七色こころにくい恋
キャベツ畑にシナリオを書くシジミチョウ
ポツンのわたしじっと見つめる時刻表
まる三角四角寄りそう物語

年の暮第九俄かに騒ぎ出す
チッポケな命に出合う散歩路
亡き友の留守電消すに消されない
ハンダ付け日日多くなる脳回路
凹む日はひたすら我慢明日を待つ
この年で自分の器知りました

神戸市　大頭　としお

来るあてもないのにポスト覗く癖
場所変えて応募ハガキをポストイン
万国旗平和な国はどこだろう
避難場所母の歩幅で確かめる
幸運が落ちてないかと見て歩く
夢に見る夫はいつでも若かった

和歌山市　定松　宏枝

芳名録きれいに書けたことがない
笑っても哀が溢れてくるピエロ
バスツアー自慢話を聞き飽きる
だとしてもラピスラズリが碧すぎる
キスすれば溶ける煮凝りほどの夜
鬼になり仏になって親を看る

今治市　永井　松柏

まずポチと戯れ朝のルーティーン
木枯し一号迷うことなく今日は鍋
坊主ですか夕食期待してたのに
特急と言うてるわりによく停まる
ころころと自慢話が変化する
手に添うた茶わん ひとりのティータイム

神戸市　奥田　宗光

観光化ライトアップの千枚田
塩だけで握る新米頬緩む
ゆずり葉を見習い老舗代替り
趣味広げ繋ぐ仲間と呆け防止
独り立ち味わう自由不自由と
暮れになるとあちこち身体痛み出す

豊中市　荒木　郁子

ゴキブリの知恵こっそりとこっそりと
こっそりと逢えばまぶしい月の下
好きだよと言えずに脳が錆びてゆく
クイズ解きシナプス増える脳の中
人間が創るにんげんらしき物
タイマーをセットしてからマジになる

和歌山市　まつもと　もとこ

ほつれても絆やさしい糸かがり
目で問えば返事はとても良い笑顔
たおやかな君に苦労は似合わない
次の世も人に生まれて笑いたい
海鳴りを父の意見のようにきく
あの父の軽さを想う冬銀河

三田市　稲角　優子

宮崎県　黒木栄子

山茶花のはらりと散って伯母が逝く
夫婦でも一つ二つはある内緒
大吉のみくじ収める春財布
都市砂漠住む子案じて母の味
遺言に寄付の字見える遺産分け

佐賀県　真島久美子

父さんの椅子をときどき温める
止まぬ雨明けぬ夜とか聞き飽きた
カップルの横に座っている吹雪
泣いちゃえばいいよ誰かを盾にして
消しますね指鉄砲の先の君

五所川原市　むらのひとり

何も無い平和の中でみかんむく
日が暮れてまた日が暮れて空の酒
酒席では獏がウヨウヨ酌をする
雪の洞春の夢路を膨らます
岩を割る水のごとくに妻の位置

黒石市　北山まみどり

病名がわかって薄れゆく痛み
人になら気楽に言えた気は病
マイナスがマイナスを呼ぶ空模様
捨てきれぬ欲にからみつく邪心
まだつかめないリセットのタイミング

弘前市　髙森一呑

令和では覚悟してます仏様
四分音符何故か夜中に狂い出す
糞ふる鼻水チビリ津軽冬
リンゴ食べすっきりさせた腹の虫
切り札は妻が箪笥に取ってある

横浜市　加藤佳子

傘寿から一念発起ジム通い
骨密度三割増しと誉められる
シニア客に若いスタッフ孫の様
若返りもらって通う週二日
熟睡のおまけも付いていらぬ医者

富士見市　中島道則

母百寿食欲見れば腑に落ちる
人生百年まだまだ古希は青二才
夫婦喧嘩ガス抜きをしてノーサイド
目が覚めて朝と夕方間違える
平和ボケ隙に付け込む悪魔の手

名古屋市　冨田末男

人生の迷路に教え生かしたい
募るたび想像力が強くなる
堂堂と生きよう道がある限り
よく褒めて学力期待ランドセル
ローソクの価値停電で上げている

思うより大変な年九十歳
あまりにも移り変りし世を生きて
幼児期は旧東海道松並木
ここまでも生かされた事大吉と
これからの日本の幸せ祈るのみ

静岡市　渡辺芳子

コラムから元気を貰う今朝の窓
遠いひと想いださせる雪しぐれ
足元が冷えてホットにある至福
少年が駆け抜けてゆく白い息
玄関に孫の大きな靴並ぶ

和歌山市　北原昭枝

新米が届くおにぎり玉子かけ
猛暑より冬がいいねと着ぶくれる
知らなくていいこともある昼の月
やがて冬 枯木に花を咲かせたい
複眼で見ればゆとりも発見も

和歌山市　倉橋悦子

友情は別れた後の暖かさ
思惑がずれて無難な方選ぶ
健康寿命伸ばす方途を探す日々
話が止まり時計が進む物忘れ
昨日のことズボンの隅に在る小銭

岩出市　村中悦男

冷奴から湯豆腐へ衣替え
どじを踏むこんな僕にも明日は来る
柿の木に群がるすずめのサラメシ
ふる里の香りいただく混ぜごはん
歯ブラシをくわえハーイ宅急便

八幡市　武田悦寛

もし明日が見えればきっとつまらない
白ければペットになれたかもカラス
ガイドより詳しい人がいたツアー
しあわせは〇ばかりとは限らない
古希には古希冬には冬の恋の花

大阪市　石田孝純

しおどきは花あるうちと決めてある
出不精は老いを加速に走らせる
思春期の孫の背伸びが気を揉ます
穏やかに暮らせば愚痴も忘れてる
頼られて生きる力が甦る

大阪市　中村民子

風船カズラ風に吹かれて何を待つ
周りからヤイヤイ言うと解けない
二階から顔色変えて降りて来る
指切りの日から段々重くなる
冗談を二つに切って種を出す

大阪市　森廣子

かさぶたがそっといたわる傷の痕
体調に合わせノルマも日替わりで
風の便り耳をくすぐるだけのこと
対等は人それぞれの物差しで
気休めのつもりで買った宝くじ

堺市　羽田野　洋介

ビル谷間実らぬ大志浮遊する
まあいいかと少し濁った水も飲む
気休めの嘘に病人ただ笑う
急ぐほど謀反を起こすボクの脳
師走でも急ぐことない独り者

池田市　上山　堅坊

七十二歳父の享年やっと越え
一度でも案山子新米食べたかな
奔放に育てチャラ男にしてしもた
苦労人頑固なようで柔らかい
ボンボン育ち柔らかそうで意地っ張り

池田市　倉本　一弥

紅引いてこころに喝を入れる朝
何だっけ今年こそはと言った事
臭い物蓋をするよりシュレッダー
本棚に飾りのごとく広辞苑
ピカピカの防災服で視察する

泉大津市　助川　和美

ポジティブな私に涙似合わない
パワフルな人の話に疲れ果て
背中合わせの二人内政不干渉
私のゆるさすぐ簡単に考える
ジョッキからグラスへ変わる秋深し

河内長野市　原　熊　知津子

デパ地下を巡り元気も買いに行く
一時間しゃべりぱなしの美容室
美容室行こうが誰も気づかない
捨てられぬ思い出の中歳を取り
門松もお鏡もなし老いの暮れ

河内長野市　穂口　正子

性ですね驕る政権繰り返す
貰っても黙っています偉い人
スピードを落して過す二人です
まだ着れるスーツを捨てる師走です
若者が燃えなくなった日本です

高槻市　三谷　白黒

一枚の舌です嘘は言えません
しっかりと家に帰った酔っぱらい
傾いた家でも吾が家我がお城
留守番の時計なまけず時を打つ
空の旅母は小声でナムアミダ

豊中市　貝塚　正子

年金を減らさない党選びたい
無口な私酒がしゃべって丸裸
朝の電話発声をして受話器とる
近頃は好きなものから食べていく
やっと来たエレベーターに鳴るブザー

豊中市　齋藤　奈津子

そっと鍵かけてみたいな妻の口
さし迫る危険はないが妻の留守
気付かねば幸せだった勘違い
ヘソクリが孫の笑顔で消えて行く
食うだけは喰ってあの世の船を待つ

寝屋川市　岡本　勲

泣く場所を私にくれた夫です
酒とすし店の休みでパパ帰る
いつもよりワサビがしみる子供もめ
老人会仲良しうたでまた恋を
御越し下さい招く言葉も裏表

寝屋川市　坂本　ミヨノ

たかが風邪馬鹿には出来ぬ歳となり
装えば丸い背中もしゃんとする
ネクタイを締めて戦士の顔になる
装いの帯は緩めに食事会
装い新た令和を刻む花時計

神戸市　玄番　美恵子

左遷地にも名酒があると励まされ
月だって満ち欠けがある明日がある
ワイン通も勧める安ワインの店
お花見に招待された雀たち
アタックのための礫を隠し持つ

神戸市　米田　利恵子

出世頭今じゃ職場の太鼓持ち
忘れ物家を出てから思い出す
ニュータウン子らの戯れ今はなく
寝ころんで作句してると寝てしまう
啖呵切ったが成績低迷中

神戸市　斎藤　隆浩

天空へ叶わぬ夢を放り投げ
人生のスパイスはもう入れ過ぎた
たくましく生きて令和の世に笑う
久しぶり友の笑顔のシワを見る
恋無くも友達があり酒があり

神戸市　田本　古鈴

残り火をかきたてながら旅仕度
ごろごろと過去がとびだす古日記
ずぼらして愛の絆をたち切られ
プロポーズ受けて心は有頂天
一言がピントはずれてひびかない

神戸市　山根　弘華

尼崎市　清水久美子

早生晩生あっておもろい吊し柿
餅千個丸めたイブのボランティア
覚え書き詰まる二月のカレンダー
二月まで冬眠中と札提げる
慇懃にさせる元日の淑気さよ

尼崎市　寺嶋恵美子

図書館と句会に行けるご身分よ
音読は時間かかるが脳さえる
人様とひと味違う句を目指す
気がつけば外はまっ暗メシだメシ
今日の糧道で出会ったおばあさま

伊丹市　延寿庵野鶴

つまずいてひょっこり拾う明日の知恵
足湯して無縁な人と弾む毬
火も水も浴びて男の顔になる
衛星目撃ぽつんと一軒家
枕元避難グッズを置いて寝る

伊丹市　岡村風琴

笑点へ欠き餅かじる歯と笑う
胴切りにされたレンコンよく喋る
直角な意見が胸によく刺さる
掃除機へ街の噂が吸い込まれ
オンとオフ上手に使い世を渡る

伊丹市　平井富夫

痩せますよ美人になるよ また信じ
肉が好きフリカケも好き爺に似た
孫が来た早く隠せよ吊るし柿
神頼みお百度参りスマホから
足伸ばす心も伸ばす妻旅行

三田市　辻開子

介護中昼夜かまわずおいちょっと
落葉はくこれが小判であったなら
洗濯機なぜか拗ねる日多くなる
朝夕の冷えが行動遅くさせ
年ごとに上り下りの坂が増え

三田市　東内美智子

すべすべの肌も知ってたこの鏡
木枯しをカラオケにして子守り唄
同窓会年を彫ってる友の顔
大人への階段登る反抗期
頑張れよ婆ちゃんもっと生きるから

三田市　森玲子

露天風呂満天の星独り占め
孫が来たただ今元気充電中
よく笑う句会の元気持ち帰る
また今日も時間たっぷり予定なし
子の命暗いニュースに言葉でぬ

宝塚市　岸田　万彩

まずまずの暮らし不幸を噛み殺す
断捨離を急かす無常な余命表
もう少しやれたはずだとキリギリス
道譲る気配全くないスマホ
うかつにも理屈の森でなる迷子

三木市　山口　ヨシエ

虎落笛父の声聞く夜明け前
滑らかな起伏となってゆく月日
手探りで明日への策を練っている
失うもの無いと呟く冬の坂
この先は力を抜いてまろやかに

奈良市　尾畑　なを江

運が良いこの世に生を受けしこと
満ちたりた暮しに遠い年金者
こだわりのひとつ位は持ちたいネ
訳有りて誕生日だけ二回ある
腹の虫時には煮える事もある

奈良市　加藤　江里子

米を研ぐ恙なきこと祈りつつ
視点変え心が軽くなってゆく
朝刊紙つんとインクの匂いする
寒空を飛行機雲が裂いてゆく
手に馴染む辞書に思い出詰まってる

生駒市　児玉　規雄

休刊日今日一日が始まらぬ
血筋です一年中が休肝日
一日の損得がある閏年
人間の気まぐれですね神仏
雑念は五七五に収まらぬ

鳥取市　上山　一平

大漁の鍋を食み出す松葉がに
ＬＥＤ砂丘が浮かぶクリスマス
電飾のモザイク人間砂丘ゆく
いやがらせ事故目撃に絶句する
ダイヤ婚来し方偲ぶ丸い月

倉吉市　大羽　雄大

しっかりと耳開いて聴きもらす
ひとまずはほっとするガン検通知
のほほんも持っている明日への焦り
朝刊の明るい文字に弾みつく
今日の汗きっと明日へ役にたつ

倉吉市　堀　かずこ

行き止まりここが思案の別れ道
木の葉舞う私は少し老いました
赤とんぼどこへ帰るか陽が沈む
しゃべりたいうれしい事がありました
我が人生つまずきころぶ　でも歩く

宝くじジャンボの夢はシャボン玉　境港市　藤原久直

ご近所と声掛け合いが暖かい
ウォーキング時にコースを変えてみる
また肥りベルトの穴が後一つ
裸木で熟した柿が鳥を呼ぶ　米子市　川本美津子

幸せのボールをキャッチして見たい
朝帰り無言で開ける家のドア
いつからかボケの蕾が咲き出した
薬手帳古希を過ぎたら賑やかに
日記帳過去の自分を許す今　米子市　黒田紀美江

まず食事薬より効くよく噛んで
お財布とお薬手帳忘れない
ろくでなし御飯だけならうまく炊く
口紅も怒りも覆う黒マスク
人事の筈が病に仲間入り　鳥取県　下田茂登子

免許返納過疎に住むこと難しい
言い訳はすればするほど負けになる
誰さんが来てもお茶などもう出せぬ
支払は後でと言われ乗った船
七回忌亡夫の足跡置いたまま　松江市　中筋弘充

喪中はがきに元気ですかと書いておく
もういいでしょうと呟いている古時計
年越しができぬ魚も居る生簀
今日もまた土下座している管理職
ボランティアに負んぶに抱っこする役所　松江市　山根邦代

今日までを生きた証の意地がある
悔しさが強さをくれて今を生き
ニュースからなんでなんでと涙出る
賑わいに参加するのは枯葉でも
その笑顔副作用ないいい薬　安来市　原徳利

復興へダンプも汗を掻いている
寂しさを三枚拾う紅葉狩り
なぜなぜを問わずに散っていくモミジ
ぎざぎざの自律神経丸くする
山奥の蕎麦に秘密の味がある　笠岡市　小野美那子

いい返事待っていますと目がすがる
頼られるたびに呟き多くなる
今が花のんびり起きて食うて寝て
見ていたい夢のお山が動くまで
丸裸になって気がつく欲の皮

美作市　岡本余光

しんしんと朝の氷雨が気を塞ぐ
専用の足湯が欲しくなる冷気
仰ぎ見る空に気に入る雲がない
運命論借りて話を切り上げる
不自由を少し感じて世間体

広島市　田桑恵子

針の穴めがねずらして苦闘する
外反母趾思い出の靴みな処分
雑踏の行き交う人は師走顔
金時人参おせちの出番待っている
アフガンの星と輝く中村医師

広島市　松尾信彦

優しさを小出しにしては慕われる
じっくりと聞いた苦節を溶かす酒
いずれはと老後を視野に家事仕事
晩学の脳に歩留り期待せず
百歳を視野に入れては米を研ぐ

竹原市　土井輝恵

支えられたことを忘れて失語症
娘が叱るハハハと笑い空を見る
転載され私の愛句中八に
日めくりにこだわってます惚け防止
紙おむつはずれて元の頑固爺

府中市　岸田武

忘年会酒を止めたと友は言う
自転車を杖に忘年会帰り
駅裏の粋なところへちょっと寄る
聞くだけでも怖いデブリという魔物
関係ないとスマホの孫は素っ気ない

阿南市　小畑定弘

燃えた日がボクにもあった青写真
酔うとすぐ淋しがり屋になるワタシ
アルバムの隅に小さな罪がある
たっぷりと泣いてワタシは強くなる
残り火を撲るような人に会う

松山市　郷田みや

結局は言い訳ですねその答
踊り場で冷静になるはずでした
締切りがちらつき焦げた今朝のパン
そう言えばゆっくり夕日見ていない
現実逃避やっぱりドラマ観てしまう

大洲市　花岡順子

好きだから甘い言葉に気を許す
もう少し一緒にいたいお茶誘う
幾たびも水の恐怖にうなされる
あやふやのまま残される負の遺産
まだ火元くすぶっている仲直り

沖縄県　宮　すみれ

花束もラッピングされ嬉しそう
陽を浴びて老いの情熱弾け出す
初踊り母の祝いに扇子舞う
令和初つばきのつぼみ色をつけ
わがままな同士じゃれ合う風とバラ

沖縄県　禱　モモト

次次と薬物騒ぎ世の中は
アフガンに半生尽し死の帰郷
シュレッダーに呑込まれた招待者
貸した金縁の切れ目か十余年

福岡県　本田　さくら

昔話せがんだ娘二児の母
小中高テクテク歩き今がある
ローマ教皇核のこわさを切々と
千の風になった彼女は今どこに

唐津市　岩﨑　實

新札へ両替依頼年始来る
一つでもすればすんだことにする
お休みでおいしかったよにぎりずし
香港の大規模デモは本格化

黒石市　石澤　はる子

ドロ舟がジタバタしても無駄という
肩書き取れ空気は旨いものと知る
別れた日の夕日が今もまといつく
笹舟の行方を追ってから独り

黒石市　千葉　風樹

シグナルは笑顔こんやはうたげだね
あたたかな虹は無言でやってくる
ホヤホヤの屋根ぽかぽかの皮下脂肪
白髪染めうりきれました小正月

白河市　鈴木　たけし

達筆の気分でメモる新手帳
父逝って聞きたいことが増すばかり
どう見ても働き蜂は美しい
レントゲン十枚撮って出るシップ

横浜市　巖田　かず枝

朝ドラを見てると父を思い出す
AIに扱き使われる新時代
温暖化冷戦地球を泣かすもの
テーブルに薬くだものチョコレート

横浜市　長島　亜希子

都合よく公人私人使い分け
文書破棄机上すっきりした役所
百円で売って儲けがあるんだね
嘘も方便これも懺悔が要りますか

神奈川県　小田　幸子

主なく家の解体秋の風
冬の朝犬を抱えて眠る母
冬の日の陽だまり追って植木鉢
自然こわし自然求めてゴルフ場

大雪にならねばいいと父見舞う
寒いこと知るはずもない熱帯魚
穢れなど感じられない冬の富士
皆さんへ冬眠中と葉書だす

栃木県　廣瀬良磨

日本の美四季までなくす温暖化
処女雪に足跡刻む挑戦者
戸が一枚絆をなくす都市砂漠
政権が灰色にする民主主義

名古屋市　山本三樹夫

若い頃跳び込んだ川足すくむ
口開いてみんな見とれる航空ショー
知らん存ぜずタライ回しでまとまらず
文書隠し渦中の人は逃げ回り

江南市　脇田雅美

門前に饅頭ほしい西明寺
旅もいい帰った家はもっといい
レジ係面倒になるキャッシュレス
難問に無口な人が光る案

豊橋市　西郷紀美代

投げキッス投げて投げても拒否される
指切りげんまんあっという間に来る別れ
乗り遅れいまださまよう私です
耐えに耐え消えなくなった眉間ジワ

石川県　堀本のりひろ

人類愛身命かけた真の医師
崇高な手記行跡に神をみる
開運を祈る熊野の大みくじ
プレゼントのリースを飾る仏教徒

和歌山市　佐藤まき

幾星霜ときめき消えたマイハート
寺参り家内安全恙なく
古き都朱印帳持ち紅葉狩り
境内の冷気おもわず身震いし

和歌山市　鍋嶋澄子

誤字脱字直して返すラブレター
過疎の村一番鶏も寝坊する
ネグレクトあってはならぬ負の連鎖
後一つ胃袋欲しいバイキング

和歌山市　西川千鶴

楽しみに今年も聴ける春の海
青春をスマホで潰す人あわれ
玄関に一輪の花妻の意気
まず最初無事の確認クラス会

和歌山市　福島一雄

人は皆命あればと言うけれど
男とて時には涙呑んでいる
明日へ翔ぶ鶴の行末祈る指
名前負けしている息子親思い

和歌山県　三枝眞智子

一つずつ仕事終いの十二月
コンビニのおにぎりだっていいお味
お茶の間で只で五輪を見るつもり
愚痴ばかり聞かせた果ての孫自慢

和歌山県　森下よりこ

山茶花が一輪咲いて自己主張
木の葉舞う冬将軍がすぐそこに
日溜りがなんとも嬉し午後の秋
政権が永く続くと奢り出る

京都府　北野クニオ

九十歳家計遣り繰りしています
いじけない性格孫に残したい
山海の珍味いただき無理を聞く
すき焼き鍋我が家の宝南部鉄

大阪市　柴本ばっは

目覚ましに起こされるまで寝ています
暇つぶし昼寝早寝で不眠症
スマホ手にますます眠気遠くなる
明日だけを思っていると楽ちんだ

大阪市　中村峰子

終活を計画したが先送り
吟譲と鯛の造りという至福
譲る気でおれば悠々生きられる
迸る墨痕仰ぎ湧く元気

大阪市　樋口眞

大人でも注射痛いしイヤなんだ
前の家窓ふきしててメチャ焦る
始めると止まらなくなる大掃除
録音の自分の声が宇宙人

大阪市　降幡弘美

教皇は核廃絶で平和呼ぶ
初詣で世界平和を神参り
年の暮れ紅白歌も様変り
正月はおせち食べずにハムとパン

大阪市　前川善之

待つ身にはゆっくりすぎるレジの列
へそくりにジンワリ響く消費税
忘れっぽい国民性か日本人
欠礼に故人の笑顔よみがえる

大阪市　松田聰

完全燃焼今日の私をほめてやる
むっつりも口軽くなる吟醸酒
スルー出来ず児等の募金に札入れる
しゃなりしゃなり和服着こなす異邦人

堺市　楠井輝子

安物のワイン冷やせば高級酒
バラ咲いて手入れの妻の鼻高し
残命と残金睨んで生きて行く
操りの人形の様に管で生き

堺市　古川光雄

指図せぬ女探して三千里
ことわりの殺し文句が後を引く
顔よりも雰囲気よねと女言う
あの飲み屋あいそ良すぎて疲れます

泉大津市　磯野　不二夫

ホルムズ海油ほしさの用心棒
自慢子のビデオ一日見る苦痛
身の丈が縮む割には目方増え
定期的謝罪練習する会社

河内長野市　渡邊　修

初詣天災無き日祈るだけ
ノーベル賞小学校同じと胸を張る
妻が言う家事子育てもワンチーム
母の味ほとんど最後に豆板醤

吹田市　岩口　のぞみ

嘱託のオフ日はいつも医者通い
見下すなぼくもそこそこ生きている
断捨離で兄弟縁も切れていく
寂しいねテレビ文化の衰退は

東大阪市　秀　爷

定年後粗大ゴミには気を付ける
宝くじ夢をはぐくむ年の暮
心はやれどついてきません八十路足
紅い葉に心ウキウキまだ八十路

枚方市　谷　英也

家のタマ　ゴキブリからも逃げ回る
退職時つくったダブル吊ったまま
後継者みんな自分と思ってる
点滴のおちる速度は我が余生

八尾市　田邊　浩三

酒の肴位の軽さです僕は
せせらぎと鯛の郷癒される
九条が日本の平和正念場
我家には桜見る会オファーなし

八尾市　前田　紀雄

立て歩け足に号令かける朝
身だしなみさぼれば老いが滲みでる
おいしい話他人に喋る筈がない
声だけは変わらないねと再会す

大阪府　奥野　健一郎

新米の一粒づつの光りあり
山茶花は何を儚み零すやら
だんまりの里を駆け行く救急車
無理しなや現品限りの身体やで

大阪府　髙木　道子

背のほこり払ってくれた指に惚れ
延命の要否なりゆき欄が無い
うちの子は犬のことなり午後のお茶
介護してもらう日まではおーいお茶

神戸市　青山　ひろし

どう過ごす長い余生の時間割　神戸市　石川克美

川柳で嗤うしかないわが人生
川柳で日頃の憂さを吐いてます
お正月準備せずともやってくる　神戸市　輿水弘

あといくつ老いてなお追う花の夢
もしかして夫のイビキ空白む
とりたてて言う個性無し流れ星
つかれても生きた着古し折りたたむ　神戸市　近藤勝正

うれしいことしか書かない日記には
見たかったあなたの老後どんな顔
気に入りの杖は放さぬあの世でも
目立たない隅が私の指定席　神戸市　松倉正美

まだいける自筆の賀状出しました
身の丈に合った暮しでほぼ豊か
孫が来て重たい口が軽くなる
ハイとローすれすれ乍ら基準内　尼崎市　山田厚江

内視鏡おなかの中も綺麗やで
ゴミ出しが僕の仕事になりました
大根おろし僕の愛情すりおろす
褒めてんの痩せればきっと美人やで

数多い妻の愚痴かて鍋で煮る
菊作り頑固な父の優しい目
秒読みに着ぐるみ手間とるトイレット
膝交えじっくり煮込む子と息子　三田市　生田えい子

贋作も祖父は信じた宝物
北風と共にシャッター下ろす暮れ
空き家にも令和の風をお裾分け
リスクある跡継ぐ山の一軒家　三田市　幸田厚子

嘘つくな泥棒だって迷惑だ
可愛いと言われたエクボも皺の中
我が世代子の付く名前勢揃い
奈良漬の美味しい酒蔵見つけたよ　三田市　住吉美和子

幼子も手が出る味見ひなあられ
何回も騙されながら春に会う
アフガンにある不条理よ医師を撃つ
初日の出じいじばあばも希望湧く　三田市　中山昭美

安心を詰めた鍵束重くなる
パソコンも口答えする遠からず
独り寝の添い寝の相手ガラクタよ
博物館年経りゃ宝ガラクタも　三田市　中山寅男

三猿になれば家庭は平和です
紅葉も落葉すればごみとなる
免返納証紙千円買わされた
月冴える御伽話は消えていく

三田市　馬場　貴美江

神さまは時に味方に時に敵
大丈夫お齢ですよとお医者さま
弱いなあそない札束積まれたら
金ないがいっぱい居てるお友達

宝塚市　太田　としお

鏡には心の悩み散らつかせ
過去は過去今をきらりと生きている
映る身の哀れな姿でも達者
かわす酒はずむ会話で咲かす花

丹波篠山市　澤　良子

きっかけが老いの心を活気づけ
こわくない自信を持って迷わない
引き時を失敗したか考える
お人好し阿呆がいつもついてくる

丹波篠山市　藤井　美智子

独りでもこの世の嵐乗り越える
日めくりに花マルつける句会の日
夜遊びの猫の帰りは午前様
断捨離の手間が省ける失くし物

西宮市　髙橋　千賀子

札束が老若男女黙らせる
飾るほど中身ない人ぼろを出す
便利だとスマホにしたが手に付かず
知恵が付き矛盾を突いて怒る孫

奈良県　室田　行久

仏壇の花を入れ替え心地良し
幸せそうに寝てる母の横顔
砕けてもまた夢を買う宝くじ
暑くても寒くても行くボランティア

山口市　青木　隆子

お正月迎える準備日にひとつ
無理かしらきっと出来るよひとり言
庭紅葉眉間の皺を連れて行く
想像が明日の幸を連れて来る

鳥取市　大前　安子

空バスが風切り走る田舎道
生き延びる術を知ってる団子虫
税金で出来てる椅子は柔らかい
赤ちゃんのそばで大人は平社員

鳥取市　山野　すみれ

スナックで名入り川柳ファン増え
今日こそは飲まず唄わず言うて飲む
顔出せばスナック今宵もご繁盛
泣き笑いしてても福は寄ってくる

倉吉市　伊藤　嘉昭

倉吉市　宮田風露

星空を仰げば雲が邪魔をする
好きな事手当り次第して呆けぬ
電子辞書脳の油になっている
寄り道もまた楽しんで五七五

境港市　中井虎尾

初雪や砂丘は白い雪の原
バッハにはエドとエゾでは大差なし
口開けて唯今我は歯の工事
明日という日に追いつけぬ追いつけぬ

米子市　妹能令位子

供物にもカロリーオフでダイエット
仏前の朝茶で今日の段取りを
鬼が棲む心なだめにボランティア
検査値に脅されるからダイエット

松江市　相見柳歩

アイドルの歌で揺れてるこころ知る
いいひとがこんな近くにいたのにね
山陰を歩いて涙もろくなる
元気でた元の彼女と話したら

出雲市　黒目ひでお

回想法記憶をたどりボケ防止
旅路終えモグラ叩きの日々送る
病あり命をつなぐ医者はしご
春よ来い世直しの夢いま蕾

雲南市　永見安子

寒風に色づく柿のあたたかさ
紅葉狩り毎日できる山暮し
まあいいか自分でほめて日が暮れる
夕焼けに欅の大樹背伸びして

益田市　篠原紋次郎

渓谷の音に合わせて散る紅葉
台風ぐらいで逃げはしません忠魂碑
クーラーをつけるとうまくなるビール
免許証返しおいしい酒の味

瀬戸内市　宮宅比佐恵

改憲は要らぬ平和な令和ほし
初詣平和を願う人ばかり
杖つかぬ幸せ感謝初詣
温暖化人の心は寒くなる

津山市　髙橋由紀女

勝因は見えない絆ワンチーム
農ごよみ出てきた亡父の赤ライン
満月のしずく夕餉のかくし味
後ろボタン留まらぬ両手笑い出す

尾道市　小畑宣之

若さより年相応にチョイ元気
大国になれずとも良し平和なら
ペットには優しく部下に厳しいよ
優しさの裏には何かありそうだ

（若年幸子さん、渡邊伊津志さん、三谷松太郎さんは43頁にあります）

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

阪神大震災　八句

地にひそむ魔の天空へ駆け抜けし
吽形の仁王の突如叫ぶとき
南　京　町
閃光から光焔首なき兵馬俑
地震熄んで一輪の薔薇毅然たり
遠吠えのごとく余震のつづく夜
月赤しわれも傾く三宮
柳友の死に近寄りがたき長田町
これからも神戸に住むと卒寿の師
田辺聖子先生へ
紫綬うれしインクひときわ匂い立ち
長　男　と
酌ぎ交わし而立と古稀は一瞬ぞ
千代紙にはや好きな色孫娘
大寒も明治　大正　昭和　平成
大井川鉄道
茶畑によし杉によし鯉のぼり
政治家の臍を比べてみたくなる

土佐にて

淀川と四万十川の生きる道
哀悼　西尾栞先生　五句
南無菊花儀礼信を棺に入れ
足弱の師なり天女に手を引かれ
閻魔にも和顔愛語を説き給い
目の限り菜の花の黄が師の浄土
波の音よき思い出を繰り返し
大矢十郎さんを悼む
句の仏補陀落山に妻を詠み
八月十五日
五十年毎年夾竹桃と蟬
富士山の藍に一礼してしまう
睡蓮も輪廻転生の旅か
酒倉の佐川西町東町
しりとりも匠みのりとはじめけり
病妻に花買う晩年の明かり
父は古里をその子は国を捨て
あじさいの七変化して不垢不浄
老いらくに契の恋もありぬべし
古稀の屠蘇生き死にもはやかそかごと
生きていることが上だと思う古稀
餅の罅わが皺の手に受けて食ぶ

誹風柳多留一二篇研究 80

山田昭夫・石川道子
小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男
清博美

687 **安房と上総を杉戸にて仕切ル也**

山田 杉戸は「②江戸時代、品川宿の遊女屋の張見世の下座の後にあった杉の戸」（『日国』）のこと。品川沖の向こうは安房と上総の国。海岸沿いに並んでいる宿屋の杉戸で房総半島が見えなくなるというだ。この句の杉戸は、海岸沿いに並ぶ飯盛宿の修辞であろうが、実際の杉戸の前には、「めしもりと見へず御玄関ばんと見へ」（天五宝1）るような下級の女郎（飯盛女）が並んでいた。品川では表向き遊女は置けないから、そのような方法で張見世を張ったのだ。

安房や上総を見はらしてやつ付ル　玉7

清 賛。

688 **車引娘を壱人ほめなくし**

山田 車引はガラが悪く、女の通行人などへ平気で淫猥な罵声を浴びせたりした。その車引が、「娘を一人誉めなくし」というのだが、「誉めなくし」が分からない。「誉めなくし」は管見の辞書類には見当たらないが、佐藤要人先生は「『誉める』と『なくす』の合成語。（略）『誉める』が原因で、『なくす』は結果」とされている。そして本句について、「誉めた結果、娘を取り逃がしてしまった（娘がその場を逃げ出してしまった）という意味になりましょう」（『二八篇輪講』。本句は二八篇8丁に「車引娘をひとり誉めなくし」として再出）と解されているが、妥当であろう。

横町へ車力ハ嫁を誉メなくし　新二〇5

清 賛。

689 **七月ハ小だと遣リて気を付る**

山田 今度の七月は小の月だと、遣り手は遊女たちに気を付けている。小の月は二十九日で、大の月より一日短い。七月の次は八月で、書き入れ時の八朔や十五夜の月見があるので、気合いを入れよと発破を掛けているのだろう。現在の暦では大小月は決まっているが、旧暦では毎年配列が違っていたから、注意しなければならなかった。

七月が小でおはりのいそかしさ　一二26

石川 気合いを入れよ、というのもあるでしょうが、日数を間違えると大変だということでは。八朔もあることなので。

小栗 同右。「八朔」の句。

清 賛。山田氏も、引用類句に八朔の句を持ってきている。

690 **すりばちへ茶をぶんまける新世帯**

山田 新世帯は、所帯道具などほとんど無く、また出来るだけ一緒に居たいから、どうしても不精を決め込む場合が多い。その結果、朝食の時の茶の出し殻も、擂り鉢に「ぶんまけ

る新世帯」となるのだろう。

茶斗だもつとねよふと新世帯
あら世帯朝ハ成たけ茶漬にし　一一27　一三九29

清　賛。

691　**数をよくなぶられて来るかねの礼**

山田　江戸時代、婚期を迎えた娘は元服と称して、髪形を変え、鉄漿を付け（半元服）、眉を落とした（本元服）。初めての鉄漿は知人縁者など七ケ所より貰い、初鉄漿をしてそれら七ケ所の家に礼に行くのが習わしであった。これを鉄漿の礼というが、鉄漿を付けた顔は、昨日までの自分とは全く違って見えて、恥ずかしい限り。その上、相手の人たちも面白がって冷やかすやらで、娘にとっては「嬲られて来る」ような気分である。「数をよく」は「数も丁度良く」ほどの意で、七の数が縁起が良いというのだろう。英語ならラッキーセブンでピッタリするが、わが国でも、七夕とか虹の七色、七福神、七宝、七草などと、結構縁起のよい数である。

かねの礼どりや見よふぞといやがらせ　安四宮2

清　賛。

692　**又けんくわしに来たといふ中のよさ**

山田　碁敵来たる。

碁敵ハにくさもにくしなつかしさ　初37
いさかいをしい〳〵碁打中か能シ　二六42

小栗　賛。なるほど。

清　碁敵としていいでしょう。

693　**二三里も手前からつく大男**

山田　雨譚註「賊か」。二三里も前から賊が機会を狙っているというだろうが、句の印象からすると、盗賊というより護摩の灰あたりが想起される。大男の句は殆ど「のろま」「間抜け」のような意で詠まれているから少し気になるが、

和らかに見へてもこわいごまの蝿　新二四10

という句のように、「のろま」のように見えて実はとんでもない奴だというような事か。

小栗　不明。「大男」の悪人の句はあまりないようだ。

細井　山路先生も「賊」とすぐわかる、とおっしゃっていますが、どうもピンと来ません。

清　目的の場所へ二三里手前、ということで何かないだろうか。前句は、一応「つもり社すれ〳〵」である。

694　**御くたびれ扨お内義はひよんなこと**

石川　亭主が長旅から帰って来ると、いる筈の女房がいない。実はお留守の間にお内儀がひょんなことから、と近所の世話役か親しい人が女房の出奔を告げに来た。

旅かへり女房に付キやかましさ　一〇25

細井　賛。

とハ知らすしてカ、ア今戻つたぜ　三九15

てなことに……。

清　そんなところか。

695　**こうはらなものハ坊主の野がけ也**

石川　野駆け、つまり遊びである。坊主といえば戒律を守り、身を謹み、謹厳実直を絵に書いたような存在であってしかるべきだと思いたいのに、野放図に遊び騒いでいるのはいかにも腹立たしいというのであろう。

がうはらさ跡ヲにごして妾うせ　天六満1
ふらちさハかまよりなべを和尚かい　天五智2

清　賛。坊主が野掛けなどすることはなかろうと、一般人は思っている。

愛染帖

新家　完司　選

（投句257名）

立ち読みで来年の運確かめる

（評）年末の書店に並ぶ運勢の本。自分以外のは不要なので買うのは勿体ない。だが、「タダ読み」での運勢はいかがなものか？

西宮市　高橋千賀子

血糖値よりも気になる物忘れ

（評）血糖値は薬で抑制できるがボケに効く薬はない。「見たこと聞いたこと想ったことを五七五に纏める」それがボケの予防薬だ。

広島市　岸本　清

ぼっち飯ぼっち映画も慣れたもの

（評）ひとりぼっちの食事。ひとりぼっちの映画鑑賞。慣れてくるとラクチン。であろうが、会話が減るとボケが早まる恐れあり。

横浜市　加藤　佳子

あと五十年だ　金婚式挙げる

（評）金婚を迎えた句はしばしば拝見しているが「これからスタート！」は初めて。二人で向かえば大丈夫！　ご多幸を祈る！

笠岡市　藤井　智史

荷造りに不安も詰めて転居先

（評）三田市から越谷市に転居された作者。初めての土地に不安が募るだろうが、慣れると「住めば都」。第二の故郷にして頂きたい。

越谷市　久保田千代

良き事は点苦しみは線でくる

（評）朗らかにカンラカラカラと笑うのは一瞬のこと。苦虫を噛み潰したような顔はなかなかほぐれない。まさに点と線である。

奈良県　中堀　優

新刊書二ヶ月待って図書館で

（評）人気の新刊は希望者が多くて順番待ち。だが、所帯持ちの良い賢婦人、それぐらいのことはヘッチャラ。見習いたいものである。

西宮市　緒方美津子

たられば を食べすぎ前へ歩けない

（評）「もし、していたら」とか「もし、していれば」など、済んでしまった事を悔やんでばかり。鱈とレバーなら旨いのだが…。

大阪市　石田　孝純

カラオケのタッチパネルにいびられる

（評）曲目を予約するタッチパネル式のリモコン（デンモク）。慣れない新型など思い通りに動いてくれず「コンチクショ～！」。

箕面市　中山　春代

あと五年でゼロになるだろ同期生

（評）まるでカウントダウンのように、年々減ってゆく同級生。しかし、最後の一人が消えたときの「ゼロ！」は誰が数えるのだ？

三田市　堀　正和

ミーティングさえ平熱を保てない

大阪市　栃尾　奏子

老人のペイペイ払いぎょっと見る

河内長野市　渡邊　修

Mの血とSの血マキロンをかける

佐賀県　真島久美子

死んだふり出来ないのですこの躰

長野県　丸山　健三

耳痛い話は感度下げて聞く

和歌山市　武本　碧

耳朶を引っぱり元気つけている

大阪市　大川　桃花

気が付けばドンとそびえる喜寿の坂

石川県　堀本のりひろ

夕暮れが迫る人生ゆっくりと

熊本市　杉野　羅天

アシスト自転車で坂道が好きに

大阪市　宇都満知子

現実を知るにはやはり裏通り

神戸市　山口　光久

夏痩せもせず冬が来て寒太り

貝塚市　吉道あかね

衣替えに叱られている太り過ぎ

岡山県　藤澤　照代

万が一ヤセたら美魔女コンテスト

三田市　上田ひとみ

身体には結石あるが意志弱い　加西市　山端なつみ

猫が好き犬も大好き人嫌い　京都市　清水　英旺

パプリカの自信の色を持ちたいが　橿原市　居谷真理子

頑張らないことが長寿の秘訣かな　神戸市　近藤　勝正

部屋の広さ測っています掃除ロボ　松山市　郷田　みや

好きに寝て自然に起きて朝ごはん　京都市　都倉　求芽

病気でも元気でもなしふわり住む　西予市　西田美恵子

私の鼻にハズキルーペがよく似合う

あやふやを叱る三三七拍子　大阪市　平賀　国和

句をひねる歓喜の歌を聞きながら

英語より国語が大事定年後　鳥取県　門村　幸子

無駄大事ときどきします大回り

共感す「歩けるだけでメッケモノ」　弘前市　髙瀬　霜石

三角も四角も個性なり　ファイト

この指に止まれ赤ちょうちんの下　豊中市　きとうこみつ

パワハラかセクハラになる親父ギャグ

納棺師ひょいと亡母を持ち上げる　宇部市　平田　実男

肩書は置いて出かけるクラス会　沖縄県　宮　すみれ

クラス会歌の一つも手みやげに　神戸市　大頭としお

松葉蟹はつ競りの声冬を呼ぶ　鳥取県　山下　節子

蟹解禁港の路地が匂う湯気　三田市　尾崎　一子

さあ食べよう郷の誇りの松葉蟹　松江市　石橋　芳山

ねちっこく俺が残ったままでいる

金儲け考えている眠れぬ夜　奈良市　大久保眞澄

七十になったと自慢してまわる

年並みにイケズに磨きかけている　神戸市　上田　和宏

似てきたな息子だんだんケチになる

川柳で直ってきたぞへそ曲がり　大阪市　小野　雅美

スタートは順調としておく令和

黒以外の服もたまには買ってみる　松江市　中筋　弘充

悪口をキャッチしにくくなった耳

配役で顛末わかる時代劇　高槻市　島田千鶴子

事あらば走れるようにスクワット

ほどほどにしてねと消化器の嘆き　川西市　山口　不動

見舞い状昔話が無難です

軽トラは世界に誇る名車なり　河内長野市　木見谷孝代

夫臥し一番長く共に居る

他人事の死が突然に身に迫る　府中市　岸田　武

すぐですぐ箱に入れられ可燃物　五所川原市　むらのひとり

愛よりも電気毛布が欲しい骨　橿原市　安土　理恵

働かぬ脳カニミソと入れ替える　岡山市　大石　洋子

朧豆腐のような頭を初期化する　尼崎市　山田　耕治

隣より早く雨戸を開けましょう　札幌市　三浦　強一

地獄では運動不足ないだろう　倉吉市　牧野　芳光

私の知らない事は訊かないで　香芝市　大内　朝子

ときめきの心を売っていませんか　河内長野市　村上　直樹

百歳時代備えるアホウ悩むバカ　神戸市　奥澤洋次郎

前向けば三途の岸が霞んでる　河内長野市　山岡冨美子

欲があるうちは元気でおれそうだ

河内長野市　中島　一彌
書き留めた佳句が輝く箸袋

西宮市　福島　弘子
川柳のネタに困らぬ父だった

大洲市　花岡　順子
平々凡々名句が出来る訳がない

山口市　青木　隆子
自分の句下手だと分かるだけ進歩

堺　市　坂上　淳司
新芽にと裸を晒す冬木立

岡山市　永見　心咲
ブランドの柿は試食を重ね買う

東大阪市　佐々木満作
干し柿のすだれを揺らす神渡し

海南市　小谷　小雪
おなじみの小鳥に残す木守柿

東大阪市　北村　賢子
いつ死ぬかわからないからまだ遊ぶ

千葉市　海老池　洋
妻に似て小煩くなる娘たち

松山市　柳田かおる
スマホ持つ前から私スマホ首

黒石市　千葉　風樹
いくたびも人をゆるした赤信号

鳥取市　奥田　由美
サザエさんと互角の強さうっかり度

高槻市　片山かずお
喜寿の運転少し歪んで駐車する

大阪市　津守　柳伸
うらはらな心が透ける遠眼鏡

豊中市　水野　黒兎
未練などないと呟くのが未練

大阪府　米澤　俶子
片づける絵本に見入り心和ぐ

堺　市　澤井　敏治
たこ焼はテイクアウトと決めている

鳥取県　斉尾くにこ
じわじわとじわじわじわと歳をとる

今治市　渡邊伊津志
前進だ目が前にしかついてない

尼崎市　寺嶋恵美子
甘いもん半分減らし街へ出る

米子市　竹村紀の治
エレベーター餃子定食乗っている

箕面市　出口セツ子
魂のキャッチボールをする囲炉裏

大阪市　江島谷勝弘
「高原列車」を歌うと爽やかに

河内長野市　原熊知津子
尽きぬ欲望太り続ける大都会

鳥取市　岸本　宏章
すばらしいバネ持っている猫の足

奈良県　渡辺　富子
リュックと杖しっかり持って空の旅

三田市　谷口　修平
忘れたという事さえも忘れだす

河内長野市　森田　旅人
魂を洗うさらさら砂遊び

豊中市　上出　修
文春が過去を掘り出し火をつける

大阪市　岩崎　玲子
カラオケで曝け出しますおんなの我

米子市　池田　美穂
キャッシュレス手続きだけでギブアップ

河内長野市　藤塚　克三
五輪後はハヤブサ帰還待ち望む

大阪市　柴本ばっは
月光仮面で育った息子爺になる

池田市　太田　省三
旧姓の名札しっくりクラス会

大阪市　古今堂蕉子
窮屈な世になりましたハラスメント

香南市　桑名　孝雄
パワハラセクハラよくぞ耐えたぞ昭和っ子

米子市　吉田　陽子
輸入牛肉アメリカっぽい味がする

河内長野市　梶原　弘光
内視鏡違う病と鉢合わせ

富田林市　中村　惠
火の用心怠り火の粉あびている

弘前市　福士　慕情
イントロで解る演歌が好きである

神戸市　冨永　恭子
陽が落ちると中島みゆき聞きたくなる

和歌山市　まつもともとこ
大吟醸くっと男の顔で呑む

富田林市　山野　寿之
大根の皮きんぴらに酒のアテ

大阪市　若本　安代
寒鰤の旨さ地酒と舌鼓

藤井寺市　鈴木いさお
食欲はないがお酒なら飲める

大阪市　平井美智子
返杯の猪口をニンマリ迎え撃つ

三原市　笹重　耕三
ダンディーに飲むほどほどの正義感

池田市　上山　堅坊
どんなときも楽しく酒を飲むおしゃれ

安来市　原　徳利
咳止めに熱燗風邪に玉子酒

大阪市　奥村　五月
山ほどの薬をのんで酒ハシゴ

岡山市　丹下　凱夫
点滴をしてまで忘年会に行く

米子市　伊塚美枝子
たこの糸切れた夫が朝帰り

東京都　川本真理子
梅酒から始めよう寒さ対策

大阪市　内田志津子
記念日に寿司は特上酒は燗

池田市　倉本　一弥
耳遠くなり妻との会話噛みあわず

和歌山市　土屋起世子
品格も気にせぬ独りバスルーム

沖縄県　禱　モモト
浪花節唸る女の色っぽさ

豊中市　藤井　則彦
いまどきの男に足りぬ痩せ我慢

八尾市　宮崎シマ子
おおきくなった孫小さくなったお婆

三田市　北野　哲男
ドラフトの金の卵を抱くコーチ

奈良県　山本　昌代
アップップ今日の私はお金持ち

羽曳野市　宇都宮ちづる
卒婚を知ってますかと夫に訊く

堺　市　内藤　憲彦
何様だと思ってるねん我が妻よ

岡山県　田中　恵
近寄るな癇癪玉が破裂する

寝屋川市　伊達　郁夫
産室も焼き場もカード払いする

三田市　足立つな子
娘が嫁ぎ継ぐ人もなく墓じまい

倉吉市　岡崎美知江
さそわれたが遠慮してますデイの椅子

大阪市　髙杉　力
最古参バイトの意見聞いてみる

松山市　大内せつ子
こじつけの言い訳まわれ右をする

八尾市　前田　紀雄
野党共闘あやかりたいねワンチーム

防府市　坂本　加代
輪の中に私も入りワンチーム

広島市　松尾　信彦
毎日がコピー上書き恙無し

鳥取市　田賀八千代
ちょっと高めのランチ食べます給料日

大阪市　藤田　武人
猿顔の僕にそっくり織田裕二

大阪市　横山　里子
謎めいた女が好む片ピアス

神戸市　敏森　廣光
道端の石にもあるよ自己主張

尼崎市　永田　紀恵
採用は下戸に限定パイロット

堺　市　羽田野洋介
早過ぎたもう一眠り夜明けまで

三田市　村田　博
皮下脂肪溜めて冬眠するつもり

米子市　後藤美恵子
世の風に晒され渋が抜けてゆく

和歌山県　森下よりこ
ドクターヘリいつも我が家をすれすれに

鳥取市　池澤　大鯰
つぎつぎと家族順繰り歯科通い

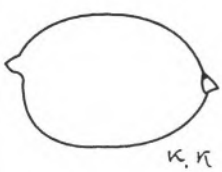
貝塚市　石田ひろ子
焼香の列にスマホと並んでる

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句３２８名）



「糸」　水野黒兎　選

継ぎはぎの昭和知ってる糸切り歯　神戸市　山﨑　武彦
耐え難きを耐えた昭和の糸切り歯　島根県　伊藤　寿美
武運祈った千人針の赤い糸　堺　市　坂上　淳司
赤糸の切れ端持って浮遊する　海南市　小谷　小雪
糸の端持っててねって言ったのに　五所川原市　むらのひとり
針と糸持たなくなってきたスマホ　津山市　髙橋由紀子
糸電話ケータイよりも強かった　唐津市　仁部　四郎
充電の心配はない糸でんわ　豊中市　きとうこみつ
糸切れて大空好きに駆ける凧　三田市　堀　正和
糸切って富士目指したい奴凧　堺　市　奥　時雄
風に吹かれ蜘蛛の糸にも飛ぶ自由　熊本市　杉野　羅天
糸切った凧よその後も幸せか　千葉市　海老池　洋
ジンクスを持たぬ女の糸切り歯　高槻市　富田　保子
切れる糸繋がる糸よ長い旅　越谷市　久保田千代

「糸」　鴨谷瑠美子　選

糸電話ケータイよりも強かった　唐津市　仁部　四郎
細い糸絆となりて太くなり　大阪市　大治　重信
釣り糸を垂れて天下に背を向ける　香南市　桑名　孝雄
糸口が掴めたあとは順調だ　四条畷市　吉岡　修
切れる糸繋がる糸よ長い旅　越谷市　久保田千代
糸切って富士目指したい奴凧　堺　市　奥　時雄
みちのくに津軽三味線鳴り響く　奈良市　仲西　賛郎
置き忘れ記憶の糸を手繰り寄せ　横浜市　加藤　佳子
返し縫いばかりして来た木綿糸　貝塚市　吉道あかね
赤い糸良く縺れます昭恵さん　八尾市　前田　紀雄
核ゼロへ糸口さえも掴めない　鳥取市　岸本　宏章
和解への糸口お互いの笑顔　東大阪市　北村　賢子
糸切れた凧淋しさに耐えられず　岸和田市　宮野みつ江
犯人さがし見えない糸の探り合い　宝塚市　太田としお

天女からある日貰った謎の糸　大阪市　森　廣子
ガサガサの手が絹糸に遠慮する　豊中市　池田　純子
綾取りの橋が繋いだ指と指　大阪市　藤田　武人
人情の糸が織りなす世間体　豊中市　藤井　則彦
迷い道糸の先にはある光　河内長野市　森田　旅人
仕付け糸からまり易い反抗期　堺　市　内藤　憲彦
パッチワークの糸目が温いマイバッグ　大阪市　宇都満知子
難問の糸口掴み湧く希望　三田市　村田　博
毛糸玉ころころころとよく笑う　高槻市　島田千鶴子
喪の糸に終着駅はないのです　黒石市　千葉　風樹
縦横に糸が絡まる家族の和　三原市　鴨田　昭紀
妻が縫う思いどおりのしつけ糸　尼崎市　近兼　敦子
幸せを転がして編む毛糸玉　岡山市　藤澤　照代
返し縫いばかりしてきた木綿糸　貝塚市　吉道あかね
横糸に笑いも入れて織る介護　大阪市　平井美智子
糸底を見れば席主が身構える　唐津市　坂本　蜂朗
一糸でも端切れ活かした亡母の針　高槻市　初代　正彦
縁と云う糸が繋がる年賀状　寝屋川市　川本　信子
人情を横糸にして織る暮し　三田市　北野　哲男
仕立業糸が主役の半世紀　丹波篠山市　藤井美智子
綿密な幾何学だろう蜘蛛の糸　大阪市　津村志華子
AIもかなわぬ奇策くもの糸　大阪市　内田志津子

糸通すまでが仕事のボタン付け　米子市　竹村紀の治
針や糸女性も持たず皆スマホ　大阪市　奥村　五月
試練の日平安信じ手繰る糸　河内長野市　森田　旅人
人情の糸が織りなす世間体　豊中市　藤井　則彦
歳月が太く強くの赤い糸　南あわじ市　萩原　狸月
糸口は訛り一気に距離縮む　大阪市　原田すみ子
年経ても真価問われる躾糸　西宮市　緒方美津子
恋の成就ミサンガに込め手作りに　池田市　倉本　一弥
針に糸ハズキルーペはよく喋る　高砂市　松尾柳右子
極太で編んだ愛ならほどけない　藤井寺市　太田扶美代
糸デンワ飽きて音信普通です　塩竈市　木田比呂朗
はり穴を通って糸は一人立ち　米子市　池田　美穂
糸切り歯きらり世界へいざ五輪　河内長野市　村上　直樹
存続へ心の糸を結び合う　和歌山市　松原　寿子
絆という糸でむりやり縛られる　高槻市　片山かずお
時々は糸染めながら五十年　広島市　松尾　信彦
だいじな人の首あたためる古毛糸　堺　市　遠山　唯教
人情を横糸にして織る暮し　三田市　北野　哲男
パッチワークの糸目が温いマイバッグ　大阪市　宇都満知子
どうせなら金糸銀糸で編む絆　西宮市　亀岡　哲子
太い糸吐いて男は自立する　宝塚市　岸田　万彩
七色の糸は女の守り神　八尾市　宮崎シマ子

太い糸吐いて男は自立する　宝塚市　岸田　万彩
赤い糸昔の絆今鎖　和歌山市　福島　一雄
おはようにｔ縺れた糸が解けてゆく　和歌山市　土屋起世子
糸口は訛り一気に距離縮め　大阪市　原田すみ子
針はボク愛妻糸の役をして　大阪市　川端　一歩
縦糸は白横糸は赤九十九折り　三木市　山口ヨシエ
終章の風糸目つけない凧になる　三田市　足立つな子
喜怒哀楽カラフルに巻く糸てまり　奈良県　渡辺　富子
すき焼きの糸コンニャクが拗ねている　米子市　竹村紀の治
天変地異にまだ耐えている赤い糸　三原市　笹重　耕三
義理の糸切って終活ワイン抜く　堺　市　柿花　和夫
心地よい糸を手繰らす日が弾む　和歌山市　堀　冨美子
忙中閑釣り糸引こうと引くまいと　松山市　宮尾みのり
釣り糸が揺れていざなう白昼夢　京都市　清水　英旺
釣り糸を垂れて天下に背を向ける　香南市　桑名　孝雄
凧糸を結んで守る母の城　大阪市　津守　柳伸
独り占め出来ぬと悟る蜘蛛の糸　寝屋川市　伊達　郁夫
釣つけやるけど要は糸とおし　四條畷市　吉岡　修
日々新た細く長くと糸車　鳥取県　門村　幸子
緩急を互いに使う赤い糸　米子市　後藤美恵子
縺れ糸もう気にもせず凡夫婦　和歌山市　上田　紀子
拉致の子へ望みをつなぐ細い糸　箕面市　中山　春代
母が編む湯気で伸ばした古毛糸　堺　市　古川　光雄

絡み合う糸をほぐしている根気　羽曳野市　藤原　大子
難問の糸口掴み湧く希望　三田市　村田　博
耐え難きを耐えた昭和の糸切り歯　島根県　伊藤　寿美
天下る糸に役人ぶら下がり　愛知県　関本かつ子
蜘蛛とあやとり相手にとって不足なし　奈良市　大久保眞澄
マリオネット糸がもつれる千鳥足　札幌市　三浦　強一
切れた糸如くに諭吉飛んで出る　鳥取市　山下　凱柳
縺れ糸いずれは解ける人の知恵　倉吉市　大羽　雄大
今の世にきちんとしたい躾糸　加西市　山端なつみ
冬空の旅を楽しむ毛糸帽　奈良市　山本　昌代
凧の糸なかなか父は譲らない　三田市　上田ひとみ
赤い糸切ってわたしを置き去りに　富田林市　中村　惠
横糸に笑いも入れて織る介護　大阪市　平井美智子
切れそうな糸を愛しい子がつなぐ　鳥取市　倉益　一瑤
糸切歯昭和の母はなお遠く　箕面市　中山　春代
マスゲーム一糸乱さぬ北の美女　奈良県　長谷川崇明
野麦峠の風に悲劇の糸を聴く　大阪市　米澤　俶子
あなたにはわたし木綿に木綿糸　橿原市　居谷真理子
おくさまの糸に引かれて生かされる　大阪市　江島谷勝弘
紅い糸切れて女は強くなる　和歌山市　定松　宏枝
ライバルのほつれた裾にある焦り　大阪市　栃尾　奏子
切れかけた糸を子供の手が握る　宝塚市　丸山　孔一
揚がったら子に手渡した凧の糸　札幌市　小沢　淳

また一人喪中ハガキで切れた糸　犬山市　関本かつ子
蜘蛛とあやとり相手にとって不足なし　奈良市　大久保眞澄
しつけ糸外す間なくて娘は親に　三田市　生田えい子
独り居の夜を編む毛糸買いました　岡山市　永見　心咲
ラメ糸が輝く寒の観覧車　堺　市　澤井　敏治
一人ぼち何時か孤独の糸電話　和歌山市　三枝眞智子
野麦峠の風に悲劇の糸を聴く　大阪市　米澤　俶子
釣糸を垂らし続けて未だ独り　宝塚市　丸山　孔一
横糸の支え縦糸自立する　松山市　柳田かおる
白秋に思いを馳せる糸車　和歌山市　西川　千鶴
煩悩が絡まる膝の毛糸玉　藤井寺市　太田扶美代
人生はこれから玉止めはしない　笠岡市　藤井　智史
切るための糸を紡いだだけのこと　佐賀県　真島久美子
糸面を削り出し角やわらげる　鳥取市　池澤　大鯰
ぼろぼろになった昭和の躾糸　弘前市　髙瀬　霜石
三味の糸突然切れて胸騒ぎ　奈良市　仲西　賛郎
絡みつく二本の糸が夜を編む　今治市　永井　松柏
あれ糸が切れてる部屋に入ったな　大阪市　降旗　弘美

秀　句

あなたにはわたし木綿に木綿糸　橿原市　居谷真理子
マリオネットの糸が切られてから自立　大阪市　小野　雅美
人間の糸が絡まる交差点　富田林市　山野　寿之

糸切った凧よその後も幸せか　千葉市　海老池　洋
息絶えたとき糸になる心電図　鳥取県　斉尾くにお
糸でんわ母の柩に入れてやる　弘前市　福士　慕情
綾取りの橋が繋いだ指と指　大阪市　藤田　武人
逃げていく真珠糸が切れました　桜井市　安土　理恵
天高く凧舞い上がりグッドバイ　丹波篠山市　酒井　健二
糸たらす日がなたらして釣果ゼロ　弘前市　稲見　則彦
糸の切れた凧になっても諦めぬ　奈良県　中堀　優
イニシャルで夫を縛る刺繍糸　横浜市　川島　良子
糸辺の名前頂き愛されて　和歌山市　坂部紀久子
感動の糸であなたと結ばれる　熊本市　杉野　羅天
深謀と遠慮めぐらす蜘蛛の糸　藤井寺市　鈴木いさお
ほころびた人間の和を糸で縫う　鳥取市　中村　金祥
針はボク愛妻糸の役をして　大阪市　川端　一歩
慌てずに戻そう話の糸車　和歌山市　喜田　准一
喜怒哀楽カラフルに巻く糸てまり　奈良県　渡辺　富子
経糸の緩みを妻は見逃さぬ　岡山市　永見　心咲
ナノになっても天まで続け赤い糸　羽曳野市　徳山みつこ

秀　句

天変地異にまだ耐えている赤い糸　三原市　笹重　耕三
わたくしの最後の砦　糸切り歯　弘前市　髙瀬　霜石
古里の訛で鼓舞の糸電話　黒石市　千葉　風樹

「鬼」

（投句　２１０名）

吉岡　修　選

故郷の空き家を守る鬼瓦　香芝市　山下　純子
善人の顔して鬼が忍び寄る　今治市　永井　松柏
鬼よりもずーっと恐い老いの坂　神戸市　山口　光久
この世ではとても出来ない鬼退治　岩国市　上村　夢香
時折は鬼の手握り生き延びる　大阪市　小野　雅美
身の内の鬼を吐き出す高笑い　高槻市　島田千鶴子
鬼ごっこ見つけて欲しい人が居る　和歌山市　喜田　准一
鬼の上司と仏の上司仲がいい　弘前市　髙瀬　霜石
土踏まず叩き心の鬼払う　海南市　小谷　小雪
忍耐を迫る鬼にも来た老化　神戸市　冨永　恭子
疑心暗鬼愛とも弱さとも思う　箕面市　出口セツ子
可愛くても魔女はときどき鬼になる　堺　市　澤井　敏治
八重歯から鬼歯に変る鬼女の面　大阪府　米澤　俶子
極寒も酷暑も耐えた鬼瓦　三田市　谷口　修平
懐に角を失くした鬼を飼う　西宮市　髙橋千賀子
鬼だって一人ぼっちじゃ遊べない　和歌山市　まつもともとこ
この役は鬼にならねば勤まらぬ　阿南市　小畑　定弘
なんでやろ爺ちゃんいつも鬼の役　大阪市　江島谷勝弘
親のチエ滅びて鬼の子が育つ　高槻市　富田　美義
両親が実の子虐待して死なす　東大阪市　北村　賢子

鬼が潜んでいそうな静かすぎる部屋　豊中市　松尾美智代
身の内の鬼も卒寿を越え仏　香芝市　大内　朝子
日本の鬼は怖いがユーモラス　大阪市　樋口　眞
鬼でいいやっぱりあなたしかいない　大阪市　平井美智子
鬼の目に涙むすめが嫁ぐ朝　三原市　鴨田　昭紀
鬼親を見抜けぬ児童相談所　三田市　堀　正和
この町をしっかり見てる鬼瓦　高槻市　松岡　篤
仕事では鬼と呼ばれる酔っぱらい　可児市　板山まみ子
鬼の首取ったか野党よう燥ぐ　松原市　森松まつお
ワンチーム試合の鬼も嬉し泣き　八尾市　山根　妙子
淋しさは仕事の鬼の定年後　堺　市　奥　時雄
鬼の出る童話はみんな温かい　札幌市　小沢　淳

佳　句

もういいかい鬼は薄目で待っている　奈良市　大久保眞澄
まだ食うなと鬼より怖い鍋奉行　宝塚市　岸田　万彩
形相は鬼だが実は仏さま　豊中市　水野　黒兎
鬼さんもお招きします淋しくて　大阪市　柴本ばっは
赤鬼も一升飲めば青くなる　三田市　村田　博

人

地獄絵に女の鬼が見当たらぬ　三田市　北野　哲男

地

鬼と思って下さいと書く手紙　藤井寺市　太田扶美代

天

本当の鬼は仏を守っている　岡山市　丹下　凱夫

軸

豆まきも減って鬼には住みやすい

「灰　色」

（投句　207名）

栃尾奏子選

灰色の心じゃ君を愛せない　笠岡市　藤井　智史
灰色の空から降った偏頭痛　広島市　松尾　信彦
会社ではどっちつかずのグレーです　尼崎市　山田　厚江
懐かしの昭和火鉢の灰の色　熊本市　杉野　羅天
灰色の人生だったサングラス　長野県　丸山　健三
考える時間をくれた冬の空　神戸市　冨永　恭子
灰色を使いこなして夫婦仲　香南市　桑名　孝雄
灰色の空にもきっとある希望　豊中市　水野　黒兎
何となくグレーミステリアスで好き　犬山市　金子美千代
ウインウインと灰色の握手　札幌市　三浦　強一
使い勝手がいいねグレーということば　岩国市　上村　夢香
灰色になると人間臭くなる　大洲市　花岡　順子
グレーゾーンわたしはいつもここにいる　弘前市　稲見　則彦
権力が灰色にする民主主義　名古屋市　山本三樹夫
灰色の容疑のままの仮保釈　東大阪市　佐々木満作
灰色のままで時効を待っている　倉吉市　牧野　芳光
灰色の涙誰にも悟らせぬ　大阪市　小野　雅美
灰色のダウンじいちゃんらしくなる　松原市　森松まつお
グレーゾーン住めば案外おもしろい　倉吉市　大羽　雄大
灰色になって人人人の中　橿原市　居谷真理子

灰色のルージュも売れる自己主張　横浜市　菊地　政勝
輪郭も薄いグレーになった顔　海南市　小谷　小雪
薬にも毒にもなれる褒め言葉　弘前市　髙瀬　霜石
スニーカーなら探しはしないシンデレラ　大阪市　原田すみ子
灰色に丸く収めたがるおとこ　大阪市　横山　里子
もう同化するしかないと決めました　三田市　上田ひとみ
グレイです僕のはらわた食えません　石川県　堀本のりひろ
いい子ぶる男はきっと灰色だ　奈良県　渡辺　富子
イチローのロマンスグレー拍手する　米子市　中原　章子
シンキングタイムなんです今グレー　西宮市　緒方美津子
灰色の嘘が難なく紛れ込む　今治市　永井　松柏
灰色のままでいいのよ楽だもの　岡山市　永見　心咲

佳　句

灰色の絆スマホの中の恋　大阪市　平井美智子
煩悩の根っ子はきっとねずみ色　三田市　尾崎　一子
灰色になり立ち止まる歩道橋　佐賀県　真島久美子
言い訳をすればするほどややこしい　大阪市　坂　裕之
ロマンスグレーとても和服がお似合いで　大阪市　柴本ばっは

人

灰色の答は核心に近い　富田林市　中村　恵

地

忖度に改ざんプラスシュレッダー　大阪市　江島谷勝弘

天

冬の空急に素直になられても　大阪市　石田　孝純

軸

くちづけはいま曇天を突き抜ける

初しぐれ教室

題 ― 肉

居谷 真理子

関西地方で「肉」というと牛肉を思い浮かべます。関東では豚肉を指すことが多いとか。だから豚肉を使った中華まんを関西では豚まん、関東では肉まんと言うのですね。佳句の不二夫さんの句にある「かしわ」も懐かしい言葉です。主に関西地方で鶏肉、それも上等の肉をそう呼んでいました。

（原は原句　参は参考句）

原 子のおかず肉さえあれば文句なし　弥　生

参 成長期肉さえあれば文句なし

原 肉メニュー欲ばってみても胃が嫌う良　子

参 肉メニュー口が欲しがり胃が嫌う

原 肉じゃがは義母の味にはかなわない　奈津子

よくある発想です。表現を工夫しましょう。

参 肉じゃがも義母の味にはかなわない

参 肉じゃがは義母におまかせしています

参 肉じゃがを褒めれば義母の良い機嫌

原 選択は肉か魚か機内食　通　則

参 肉さかなどちらも欲しい機内食

原 肉食べるいいね食べようああとりか　マキコ

参 お肉ですどうぞと鶏肉を出され

原 ビフテキも立ち喰いさせて売りまくり　光　雄

立ち食いのステーキ屋?ではないですね。試食販売だと思います。

参 ビフテキのかけらを試食させて売り

原 肉じゃがの肉ばかり食う孫にイラ！　一　弥

川柳では！や?などの符合は原則として使いません。符合に頼らず言葉で気分を表現しましょう。

参 肉じゃがの肉だけ食うなコレ孫よ

原 安い肉料理次第で御馳走に　千賀子

参 こま切れをご馳走にした腕の冴え

原 肉食系豊かになって草食系　秀　爺

句意が分かりにくかったです。取り違えてたらごめんなさい。

参 肉食の果てはベジタリアンになり

原 旬が来た故郷恋しぼたん鍋　開　子

参 故郷はいまが旬だろぼたん鍋

原 肉弾戦ラグビー日本よくやった　ひでお

参 肉弾戦日本ラグビー界夜明け

原 すき焼きの肉になりたい時もある　久　直

参 すき焼きの肉ほどもててみたいもの

原 手前味噌果肉わんさとリンゴジャム　閑

果肉を詠んだのはこの句のみ。「手前味噌」「わんさ」の言葉がそぐわない感じ。

参 手作りの果肉たっぷりリンゴジャム

原 この言葉血となり肉となるように　千　代

参 いつの日か血となり肉となれ言葉

原 健康は肉体づくり一万歩　三樹夫

参 健康な肉体めざす一万歩

原 肉屋にて値札にらんで量をとる　のぞみ

参 味か量か値札にらんでいる肉屋

原 棘がある皮肉たっぷり誉め言葉　(川)信　子

皮肉はたいてい棘を含んでいます。省略しましょう。

参 たっぷりの皮肉をもらう誉め言葉

原 片想い君の肉筆秘密箱　(東)美智子

この句も大胆に省略して、読者に想像し

てもらいましょう。

参 肉筆を秘密の箱に仕舞ってる

原 スキヤキの匂いと音を忘れてた　悦　寛

参 スキヤキのそうだこの音この匂い

原 寒くなり豚汁三日も続いた　風　露

参 豚汁が三日続いている寒さ

原 肉座布団のおかげ骨折免れる　亜希子

参 ぜい肉のおかげ骨折免れる

原 掴めない安く売りたし腹の肉　峰　子

参 ひと掴み安く売りたい腹の肉

原 食う前にテンション上がる神戸牛　正　美

参 家族みなテンション上がる神戸牛

原 三日月に肉がたっぷり満ちる月　もとこ

個性的な着眼ですが作者の思いが読みとれません。

参 三日月もだんだん肉がついてくる

参 三日月もやがてやがての肥満体

原 贅沢が付けたぜい肉重い税　くみ子

「贅」「ぜい」「税」駄洒落めきました。

参 贅沢が付けたぜい肉背負ってる

原 頬の肉落ちてシワ増え腹は出る　隆　子

参 頬の肉落ちておなかは出っ張って

原 ビフテキは久しく食べぬ歯に合わぬ　勝　正

参 ビフテキとご無沙汰のまま歯も老いた

原 贅肉を飢餓の備えと自慢する　行　久

参 贅肉で飢餓の時代に備えてる

原 自営業筋肉質は潰れない　睦　子

参 したたかな筋肉を持つ自営業

原 肉の日は爺さん散歩日と決める　一　平

参 肉の日は腹を空かせるため散歩

原 肉ジャガで口よ喜べ卒寿です　英　也

参 肉ジャガで卒寿の口を喜ばす

原 ビフテキを望めど無理な年金日　和　之

参 ビフテキはちょっと無理かな年金日

原 外見で有るよに見せる肉襦袢　えい子

参 その部分あるよに見せる肉襦袢

原 料理変へ買過ぎ肉で楽しみだ　ミヨノ

原 好物肉食べて太ってまだ食べる　ミヨノ

ミヨノさんは肉がお好きなんですね。二句を一句にしてみました。

参 肉が好きつい買い過ぎる食べ過ぎる

原 焼肉の匂いの店で立ち止まる　(森)廣　子

参 焼肉の匂いが足にまといつく

参 焼肉の匂い吸い込む店の前

原 唾み合う遺産相続見苦しい　ゆ　き

「見苦しい」とまで言ってしまうと言いすぎです。

参 遺産相続骨と肉とがいがみ合う

原 すき焼はアメリカ産でいく財布　佳　子

参 スキヤキはアメリカ産がいい財布

【佳　句】

食卓に肉が遠のく老いふたり　紀美代

ムダ肉を筋肉に変えミニを履く　弘　美

肉饅を土産に父の靴が鳴る　眞智子

品書きにかしわとあるでええ店や　不二夫

ステーキを食べても英語しゃべれない　よしお

【今月の推せん句】

クラッシック流す牛舎はAランク　**幸田　厚子**

腹の肉背中の方に攻めて来る　**若松由紀子**

肉饅を持って電車の隅にいる　**髙木　道子**

初歩教室は誌友の方のためのコーナーです。同人の方はご遠慮ください。

川柳塔鑑賞

同人吟　山岡冨美子

―1月号から―

窓際の二人絵画になりました

栃尾奏子

二人の人生の花のときであろう。遠い昔をふっと思い出す美しい一コマ。

ふところを開いて木枯しを見せる

居谷真理子

言い訳をするな「だけど」ともう言うな

工藤千代子

子を案じる親の思いは深い。うるさいと思い乍ら、子もしっかりと受け止める。

長が付く同士の話生臭い

牧野芳光

仰せの通り。優雅な「桜を見る会」さえも、長が絡むと生臭くなる。

乗り継いでまた乗り継いで行く銀河

太田扶美代

ブラックホールを解明する時代、乗り継いで乗り継いで行けば、銀河にもいつかは辿り着けるのであろうか。壮大な夢を見るのは楽しい。

人間の品位をつくるやせがまん

斉尾くにこ

やせがまんが品位をつくるという発想が面白い。何事であれ、くにこさんは丁寧にこなす優等生なのであろう。

おばあさんに保護シールはいりません

谷口義

ごもっとも。要る物は他に沢山あるのですもの。保護シールで今更なにをどう隠せば、おばあさんも様になるのでしょうね。

爺さんのステージフォアになりました

山田耕治

本社句会の課題をお書きの耕治さん。そんなお年にはとても。あの立派な字に負けぬ句をと願っている一人なのです。

仲の良い夫婦にもある危険球

山口光久

信頼し合っているお二人だからこそ言える言葉では。危険球なんて。過激な発言に年輪を感じます。

老いて今亡母に似てきた前のめり

松尾美智代

焦る気持ちの前のめりか、ただの前傾姿勢なのか。亡母に似てくるのはホント。

町内にだあれも知った人は居ず

久保田千代

でもきっかけは「希望だいた日」とか。人のネットワークに限界はない。新しい場所の新しい暮らしに心からのエールを。

大地の子であった昔のわたしです

小河柳女

大変なご苦労をされたのですね。現実は恐らくドラマを超えていたのでは。胸をえぐられる思いで見ていたテレビの遠い記憶があります。

釣瓶落し自転車やめて徒歩にする

金子美千代

六十代の友が自転車で転倒、圧迫骨折と診断、一か月半寝たきりとか「やめて」本当に正解でしたよ。美千代さん

土手に寝て破れた恋のあれやこれ

古今堂蕉子

恋は破れたほうが深くなる。しかし、何年もたてば笑い話でしょう

美女の蕉子さんの恋でも。

隔世遺伝二十歳の孫の飲みっぷり

村上直樹

幸せな老後に乾杯。孫に負けじと飲み過ぎないように、若いおじいさま。

秋の夜の独り電話をしたくなる

片山かずお

あの猛暑がまるで嘘だったように秋は早い。喋るのも億劫だったはずが思わずスマホへ手を伸ばす。

人前で恥をかくのも生きる糧

藤井則彦

この方にしてこの句、恐れ入りました。

神様に嫌われ仏様に縋る

鈴木いさお

世の中、そんなに都合よく行くのでしょうか。例えそれが、いさおさんのようなイケメンであったとしても。

暗記したパスワードだよ出て来ない

内海幸生

となると、もうパソコンもスマホも現金を引き出すことさえアウト。諭吉さん私のお金じゃないの、と喚いたところで耳を貸してくれない。

神さま。仏さま。パスワードさまの時代なのである。

鉛筆と自由自在に飛んでいる

西口いわゑ

しばらくお目にかかっておりませんが達文は健在ですね。本社句会にもどうか元気なお顔を見せてください。

びちびちの頃の写真を見る癒し

大内朝子

びちびちはお互いに無理になりました。これからは優雅路線で、いつまでも素敵な朝子さんを演出して下さい。余生は長いのですもの。

知らんぷりしてますカイロ貼ってます

安土理恵

実は私も。外出には必携のアイテム。元気な振りも苦労ですね。お互いに。

アルバムを開けば孫とアンパンマン

松本文子

懐かしいですね。私も甥たちにはその都度のキャラクターをさんざんねだられました。幸せな日の遥かな思い出です。

LLとLの間にいる私

岩本笑子

笑子さん握手です。もう私達は健康が第一ですものね。お洒落より実用です。

元気でもらう年金不足など言わぬ

岸本孝子

言いにくいことはジョークで言っておく

岸本宏章

自由にまだ動ける。年金もある。この幸せで十分ではないかと謙虚な孝子さんと、気配りの宏章さん。

溝跳べる人は整形外科に来ぬ

福西茶子

ごもっとも。お住いの周りの田園風景が浮かびます。茶子さんもきっと、程々お元気で医者通いをされるお一人なのでしょうか。

既往症みんな引き連れ湯を巡る

竹村紀の治

これぞ老後の理想、羨ましい限りです。でも紀の治さん、くれぐれも湯疲れなさいませんよう、十分お気をつけて。

車検済む後二三年は走りたい

岩切康子

お元気で頼もしい。運転には自信を持っておられるのですね。早々と免許を返納した私としてはちょっぴり羨ましい。安全運転で、まだまだ長い老後の暮らしを楽しんで下さい。

水煙抄鑑賞

―1月号から

加川靖鬼

本当は泣き崩れたい曼珠沙華

岸田　武

彼岸会が近づくと、突然球根から花芽が伸びて、十日余りで山野を朱く染める珍しい花。根に毒を含むので敬遠されるが、仏教では「人の心を和らげる花」と称される。可憐で繊細な花だと、武さんは詠まれた。

ふたりきりふたり手となり足となる

吉道　あかね

ひらがなを重ねた手法。夫婦ふたりの仲睦まじさが手にとるように見える。

せわしくて用心深く飛べぬ鳥

むらの　ひとり

飛べない鳥は意外に多い、飛べないから用心深い。しかし鳥の話ではなく自分に置き換えて詠まれた句。同感です。

こんなにも草の名知った過疎ぐらし

柴本　ばっは

大自然に囲まれて、野草を勉強された熱意に敬意を表します。昭和天皇の「雑草という草はありません」は有名な言葉ですが、柳誌で雑草と見るたび淋しくなります。

ケーキの上でちょっと気取っている苺

森　廣子

一寸気取らせて、人の気を引くのはケーキ職人の腕の見せどころでしょう。草冠に母　イチゴはフルーツの女王です。

街明かりひとりひとりが生きている

坂本　星雨

人類には明りが無いと生きて行けません。街明りの中で、ひとりひとりが暮らしています。家族も団体も一緒に生活していますが、しかし百万ドルの夜景は如何なものか。無駄な明りも多いようです。

七癖が個性となって光り出す

玄番　美恵子

凡人に欠けているのは、個性かも知れません。変な癖の持主は困りものですが、梅檀は双葉より芳しで、個性・癖・特長が無ければ、光りようがありません。

私の鼻がトリュフをキャッチする

清水　久美子

トリュフは土の奥深くに生えるが見つけるのは難しいらしい。その高級珍味を食べ馴れているから、まず鼻がキャッチして足を運ばせる。すばらしい嗅覚ですね。

ボロボロの羽を開いた秋の蝶

髙橋　千賀子

晩秋にボロボロの羽をした蝶を見かけますが、手を差しのべても逃げようとしない。渡り蝶か、何物かに襲われたのか。何千キロも海を渡って移動する蝶もいると聞く。体を休めて、想い出の旅の夢でも見ているかも知れない。

眠れない夜に繙く歎異抄

松倉　正美

本屋の前を通ると『歎異抄』が横積みにされている。その前を素通りする訳にはいかない。手に入れたら積んどくだけで、もう読んだ気分。正美さんを見習って、じっくり繙きたい。

断り状とてもきれいな文字でした

太田　としお

どんな文面だったのでしょうか。女文字で蝶が飛び立つような変体仮名と思いたい。字は性格を表すといいますが、ますます惹かれますね。

英語 de Senryu㊽

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

家賃だけ稼いで　女房気が強し

just earning
the money for rent
my wife makes herself boss

羊羹のことでもめてる老夫婦

an old couple
arguing about
sweet bean jelly

---

just だけ　earn 稼ぐ　money for rent 家賃　make oneself boss 自分をボスにする
old couple 老夫婦　argue about ～について揉める　sweet bean jelly 羊羹

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句㊳

子規カレンダー(愛媛大学校友会)

新年号に続いて、今回も写真と日英語俳句のカレンダーを紹介します。明治期、俳句・短歌・文章の革新に取り組み日本文学の近代化に貢献したのが、松山生まれの正岡子規です。彼の俳句を英訳し、写真を加えた日英語俳句カレンダーが愛媛大学校友会より毎年、出版されています。シキプロジェクトの田村七重さんとヴァージン・ルース *(Vergin Ruth)* さんが英訳を担当しています。月が替わると葉書にも使用できる実用性も兼ねた優れものです。いつか川柳の日英語カレンダーが生れると素敵だと思います。

New Year's water/ overflowing/ the bamboo gutter
1月　若水になりてこぼるゝ筧かな　(明治28年　写真：松山城二之丸史跡公園)

dandelions/ dotting the green/ of the spring field
4月　たんぽゝをちらしに青む春野哉 (明治25年　写真：四国カルスト公園)

coolness/ dew from the lotus falling/ from leaf to leaf
7月　涼しさや葉から葉へ散る蓮の露 (明治24年　写真：松山考古館)

green persimmons/ by the gate of a teahouse/ selling sweets
9月　駄菓子売る茶店の門の柿青し (明治28年　写真：一草庵)

『麻生路郎読本』余滴(56)

路郎の「川柳人協会」④

棄原道夫

昭和11年7月号で、路郎は川柳人協会の設立を発表したが、9月号から「川♣協♣の♣頁」を「川柳雑誌」に設けている。同号「編輯縦横」で、次のように述べている。

〈「川♣協♣の♣頁」を設けた。これは川柳人協會自體のことや川協全會員へ報告すべき柳界の重大問題などの告知板の用に供することにした。〉

9月号では、川柳人協会に懸ける意気込みや決意以外に、「在鮮川柳家には風水害の被害なしとの知らせがありました」「川柳始祖句碑再建の據金募集の締切（九月二十三日）が迫りました」の報告・連絡が掲載されている。以降の「川♣協♣の♣頁」を見ていくことにする。

10月号では、川協の理解と協力を得るために東京、横浜、松本、京都を精力的に訪問した報告がなされている。川柳雑誌東京支社長・福田山雨楼の肝煎りで、9月19日夜、芝浜松町の田中すゞか居に東京の柳人に集まってもらい協力を願った。東京の柳人は、信子、茶六、三太郎、雀郎、○丸など、17名の出席。午後十時に散会して、車で横浜に向かう。横浜柳人は、懐窓、柳葉、車山、兎猿子、雨垂など8名の出席。午前1時半散会。この日は保土ヶ谷の山雨楼宅に一泊。21日夜、松本市を訪問。民郎を入れて18名が集まった。22日夜に帰阪。23日夜には、京都各吟社連盟主催の初代川柳忌に出席した。

11月号では、「川・協の範圍」で次のように述べている。

〈「美すゞ」の巻頭言に關西の川柳人協會、關東の京濱吟社聯盟の文字がある。なるほど京濱吟社聯盟は關東のものかも知れぬが川柳人協會は關西の川柳人協會ではない。海外の川柳人まで加入してゐる點から云つても川柳人の川柳人協會である。強ひて所を冠むせたいなら世界の川柳人協會なのである。この點、「美すゞ」に限らず、誤解してゐる人々が尠くないやうである。從來なんでもかでも地方的に解釋せうとする認識不足がこの原因を作つたのかも知れない。幾度も繰り返へすやうであるが川柳人協會は對吟社觀念をすてた柳人個々の横のつながりの運動なのである。〉

12月号では、岡田三面子名誉会員逝去が報告されている。同号には、矢野錦浪（谷孫六）の逝去も報じられているが、錦浪は会員ではなかったようで、他のページに掲載されている。

昭和12年2月号の「柳人に告ぐ」に、〈川・協の仕事として、來年度あたりから年刊句集の刊行を創始したいと思ふので、今のうちにドシ〳〵會員に加盟して頂きたい。句集編纂の委員は全國役員並に正會員の中から適當な方に依囑して地方色を失なはないやうに、眞に日本的な年刊句集にしたいと思つてゐる。心ある人々の支援を乞ふ〉とあるが、実現することはなかった。

4月号の「日本柳壇百人撰の移管」に、〈從來、川柳雑誌社の年中行事として遂行し來つた「日本柳壇百人撰」の事業は今後川柳人協會へ移管し、一層權威あるものとすることにした。大方川柳人の御諒承を乞ふ〉とある。「日本柳壇百人撰」は、昭和7年から昭和15年まで1月号（14年は2月号、

15年は4月号）に掲載された。編集部（主に路郎）がその年に活躍した川柳人百人を選出し、自選句を掲載したものである。7、8年は一人3句、以降は1句掲載した。

3月号の「川♣協♣の♣頁」は、名古屋で開催される「全国川柳家交驩大會」の宣伝以外の4項目を全文挙げておく。

〈★役員費の廃止

川・協の仕事は目に見へぬ經費が懸るので、理事や評議員には從來役員費の醵出をお願ひしてゐたが、三月からは役員費は全部廃止し、一層の御盡力を願ふことにした。尤も費用が要らぬから廃止した譯でなく、費用は仕事をすればするだけ、役員が動けば動くだけ多額を要するのであるが、全國に多數の役員を必要とする關係上、役員費の支出を願はない方が、役員を推薦する上にも好都合なので内規を改正することにした。同時に役員の任期は總て滿一ヶ年とし、正會員中から理事長が推薦する形式にした。選擧が理想だとは思ふが、今のところでは選擧の手數をかけて、それだけの成績が擧るかどうか、手數ばかりかかるのが落ちではないかと思うの(ママ)で推薦することにしたのである。

★特別會員及顧問

從來の名譽會員以外に特別會員及び顧問の制度を設けて協會の陣容をより堅實にすることにした。特別會員は川柳家外の賛助者、顧問は代議士及辨護士に依頼。

★各地の吟社へお願ひ

川・雑の例會では川協會員章の提示によつて會費の割引を行つてゐるが、全國各地の各句會でも川・協會員には特に會費の割引をお願ひする。割引實行を應諾された吟社は御一報を乞ふ。本欄に紹介して會員の出席を促す事とする。

★寫眞を募る

遠隔の地にあつて、親しみを早めるために會員の寫眞を掲げたいので近影の恵送を乞ふ。〉

「★特別會員及顧問」について、特別会員と顧問が誰になったのか、報告されることはなかった。

「★各地吟社へのお願ひ」は、6月号まで毎月掲載されている。6月号の「『川・雑』例會費値下斷行」に、〈柳界への貢献と改革に邁進しつゝある川柳雑誌社では來る六月六日の例會から會費三〇錢を二〇錢に値下げし、川柳人協會員章提示の方へは從來二〇錢のところを一五錢に奉仕的値下げを行ふ事となつた〉とある。6月号以降にも会費の割引実行を応諾した吟社の報告がなされていない。当然のことだと思う。川柳雑誌社が会費の割引をして川柳人協会員数の増大を図ろうとするのは路郎の勝手だが、他吟社からすると、吟社として協力する訳にはいかないと相手にしなかったのだろう。前述した昭和11年の11月号に、〈幾度も繰り返へすやうであるが川柳人協會は對吟社觀念をすてた柳人個々の横のつながりの運動なのである〉とあるように、川柳人協会は、川柳人個々の参加であり、吟社として参加しているのではないから、他吟社を巻き込むのはおかしいと思う。

「★寫眞を募る」は、昭和12年7月号から昭和15年3月号にかけて「柳人素描」と題して、38名の川柳人が紹介されている。そのうち、川柳雑誌社以外の川柳人は17名である。一部挙げておく（雅号表記は当時のまま）。名誉会員では前田五健、安川久留美、梅本秋濃屋、小林不浪人、前田雀郎、池田可宵、中島紫痴郎。理事の阿部佐保蘭、佐々木三福。評議員の越智伽藍堂。正会員の冨士野鞍馬。

（次回に続く）

こんにちは 新同人です

川柳は魅力的

米子市　池田　美穂

このたびは同人に推挙頂きありがとうございました。川柳歴の長さだけは私も引けをとりません。

平成十八年春、初めて公民館の川柳教室で詠んだ句を当時の講師、小西雄々先生がえらく褒めてくださり、単純な私はすっかり川柳のとりこになりました。

以来十四年、講師は政岡日枝子先生に代わってからは、選者をされていた縁で新聞や各大会への投句も始めました。

その後、後藤宏之先生にもご指導を頂くようになると川柳塔誌も紹介され、誌友となりました。

初歩教室に投句しておりましたが、七月号で髙瀬霜石先生に投句した「のろのろ」三句で「卒業」と、おっしゃって頂きました。

年を経る毎に楽しさは形を変えましたが、十七音で詠むことの潔さ、そして自分をそこに詠むというところが気にいって今日まで続いています。

自分の未熟さ、力不足は重々わかっていますが、精進すればいつか、きっと、本当に納得のいく一句、路郎師のおっしゃる「いのちある句」が詠めると信じています。

今　嘘を書けば昨日も嘘になる

敬愛する八木千代先生の句を座右の銘として

川柳との出会い

米子市　伊塚　美枝子

何も知らない私が川柳と出会ったのは今から十三年程前の事でした。地元のラジオで「川柳を作ってみませんか、五・七・五で季語も要らないし簡単ですよ」その日の題は「川」でした。「日野川の川面に踊る鮎一つ」人生で初めての句でした。メールで送りました。すぐにラジオから私の句が流れ、おまけにパーソナリティさんから賞をいただきました。「ええっ!!」驚きましたが「川柳って面白そう」わからないままに新聞の柳壇にも投稿を始めました。

そんな時に友人から公民館の川柳教室への誘いをいただき、指導して下さっていた小西雄々先生から私の知らなかった川柳の基本を教えていただきました。『目から鱗』川柳の難しさと共に楽しさも教わりました。雄々先生の後を受け継いで下さった政岡日枝子先生からは、また違った川柳の面白さを教わり、物の見方、接し方、辞書を引く事の大切さ等川柳の奥深さを知る事が出来ました。

素晴らしい先生と出会った事で、私の人生が変わりました。人生最後の趣味として、楽しみながら日々精進を続け、まだまだ未熟な私ですが川柳と共に歩み続けたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

川柳との出会いに感謝です！

こんにちは　新同人です

よろしくお願いします

岡山市　大石洋子

歴史ある柳誌に自分の名前の句が掲載される喜びに浸っています。お仲間に加えていただけたことに感謝しております。書いて書いて自分を確かめることができたらと夢を抱いています。年を重ねてからの出会いでしたので、残り時間が気になって仕方ありません。リズムがずれている自分を定型に納めつつ、日常のなかの一コマをすくいあげ、ユーモアでコーティングして、社会に関われたらなどと、十七文字に期待をこめています。欲張りすぎて、まだまだ消化不良が続いています。

先人達の句に接してはへこみ、他の皆様の句に接しては、その発想にへこみ、自分の理想の句はどんなものなのか暗中模索です。毎月の締め切りの十五日があっという間にやってきます。自由吟の八句をまとめるのが楽しいような苦しいようなで、最後はエイッと提出しています。

大衆文芸である川柳が、もっと世の中で活躍できたらと願ってやみません。高齢化の歪みもかぶっています。先日の全国高等文芸コンクールでも川柳の部がありませんでした。裾野を広げたいものです。

よろしくお願い致します。

ご挨拶

美作市　大杉敏夫

川柳との出会いは中学校同期の友人の母親に川柳家が居て、当時、ペギー葉山のヒット曲「南国土佐を後にして」で「ダイヤルを回せば南国土佐が出る」と川柳に詠んだのを聞いて興味を覚えました。

当時、岡山県下でも有名な先生が地元におられましたので、私も川柳を始めることにしました。

川柳塔本社句会にも高速バスに乗って参加したこともあります。たくさんの同人・誌友の方々の作品を耳にしながら川柳の奥深さを知りました。また地元の大会にも参加したこともあります。

現在まで細々と続けておりますが、一向に進歩はなく浅学非才を晒しております。他にも趣味はたくさんありますが、現在は川柳だけにしております。

今後ともご指導よろしくお願いします。

こんにちは　新同人です

川柳とパソコン

池田市　太田省三

今から二十年以上前、職場の川柳募集で入選したのがきっかけで川柳を始めました。当時は、入門書や総合雑誌を読み、公募コンテストに投句するのが精一杯でした。

大きく変化したのは、定年後に地元の会館で川柳句会に参加したことでした。それまで句会に参加したことが一度もなかったのですが、句会では参加者が様々な視点から作句しているのに感心しました。

そこで本格的に学ぼうと思い立ち、有名な全国結社の見本誌を取り寄せ、比較検討した結果「川柳塔」に入会しました。投句数が多く、それだけ多くの作句ができる、と判断したのが入会の最大の理由です。

入会以来三年が経過しましたが、その間毎月欠かさず投句を続けてきました。毎月、誌面に目を通しながら、何か感じるところがあった句を抜き出し、エクセルに保存しています。自分の感想も付け加えて保存しておくと、改めて読み直すときに非常に役立ちます。

また自分の作品をエクセルに残しておくと、関数の利用によって二重投稿の防止ができますし、句材のテーマなども入力しておくと検索するのも便利です。

パソコンを利用することは便利ですが、ただ一点だけ留意事項があります。それはバックアップを小まめに行うことに尽きます。パソコンはＯＳやモニターの損傷などによって買換えを余儀なくされる時が必ずやってくるからです。このときに過去のデータが全部喪失することは耐えられません。私は毎月、投句を終えた時点でバックアップをしていますので、作句途中の限られた時間を除けば、ほぼ完全な保存状態を実現しています。

川柳に限らず、必要な情報は整理して保存することの重要性は紙ベースの時代から不変です。また誌面もスキャナーで取り込んで保存していますので、過去の誌面を参考にするときに非常に便利です。

パソコンと川柳の二本立てで楽しい日々を送ることは、私の日常生活に溶け込んでいます。

川柳は心の糧

倉吉市　岡﨑美知江

「川柳」に出合ったのは、主人、義母、実母が逝き、やっと落着いた頃、地元新聞の川柳欄に「母」という題で投句したのが初めてです。選者様からおさそいがあり、川柳に心を寄せ初めました。

平成16年地元の川柳会に入会、令和元年「同人」に推挙され、仲間に入れて頂きました。句会には、新家完司川柳塔理事長、牧野芳光県川柳会長、斉尾くにこ県理事、米子、倉吉、湖山の会長、副会長が御出席くださり、句会を盛りたて育てて頂いています。若い指導者にも恵まれ、前向きに句作り出来る様になりました。例えば「春」の季節表現、ポップコーンが弾ける様な「春」という表現等、八十路坂の私には想像もつかない表現です。

また全国の句会にも投句、勿論全没もありますが、これが勉強の励みになっています。

私にとって忘れ得ない事があります。震度六弱の鳥取県中部地震の時には、青いテントの屋根が沢山見える中で、作句した思い出、川柳が心を励まし、落着かせてくれました。川柳をしていてよかったと心に残っています。

人生は終生まで勉強、のろのろで未熟な者ですが、どうぞよろしくお願い致します。好きな句は沢山ありますが

暖かい色で寂しい身を包む　　完司様

綴じ代のような所で生きている　　芳光様　　です。

こんにちは　新同人です

終焉の妻に捧げた川柳

三田市　大西重男

十年程前ゴルフばかりしていた頃、友達から「人生最後はベッドでの生活になる。ベッドの上ではゴルフはできないが、川柳は出来るぜ」と言われたことがあった。

それから五～六年後、妻が癌で入院し、日増しに病状が悪化、会話が出来なくなっていった。毎日見舞いに行っていたが、帰る際妻の頬を撫で「また明日」と言って帰ってくるのが続いた。そんな時新聞の文芸欄に兼題「頬」の川柳募集が掲載されているのが目に入り、一度投稿してみようと思い立ち、病院での妻とのやりとりから「病んで寝る妻の頬っぺをそっと撫で」という句を投稿した。それが幸運にも入選し、川柳って面白いと思うようになった。

その一ヶ月後妻は亡くなり、ひとり暮らしで無聊の日々を過ごしていた時、幼友達から川柳教室入会の誘いを受け、それから川柳を作り続けている。

先に述べたように初めて作った句が幸い入選し、気をよくしていたが、本格的にやり始めると段々難しく、よい句が作れない。先生から「とにかく沢山作句することだ」と言われ、川柳教室での作句や川柳塔をはじめとして新聞文芸欄、その他機会あるごとに投稿し、苦しみながら楽しんでいます。

川柳　おかげさま

鳥取県　門村幸子

最近つくづくしみじみ思う。「ワタクシの川柳へタクソ」なぜと言って、周りの人がみんな先生級に見える（イヤ実際そうなので）。

雑文、対談集、活字を読むのが好き。しゃべるのは苦手。長い間、活字を離れていた時期もあったけれど、今、齢七〇歳、雑事から解放されて、本にたどり着く時間帯が一番落ち着きます。

五〇歳代に、ふと（ホントにふと）幼稚な俳句か川柳かわからない句を新聞投稿して初めて記載されたときの嬉しさ。それが励みでした。川柳は「人間を詠う」というそこが好きです。下手の下手でも実感句、自分の五七五を文字にできて幸福でもある、ありがたくもある、一句も浮かんで来なくてあせりもする、自信喪失もする、でもよき師にめぐり会えて続けています。

川柳塔仲間に入れて頂きありがとうございました。

好きな言葉は昔から「念ずれば花開く」「たたけよさらば開かれん」です。

朗らかでめげぬ周りの仲間達に大いに元気を貰っています。いつの日か「わたくしの一句」が、そう、ふと生まれたら（虫がいい!?）と願っています。

こんにちは 新同人です

川柳との出会い

横浜市　川　島　良　子

きっかけは地元の広報誌の川柳入門講座(あおば川柳会)でした。当時四十七歳だった私は脳梗塞の意識障害で入院していた母の見舞いに連日病院通いをしていました。

菱田満秋先生との出会いで川柳の楽しさを学ぶうち、母の句を残したいと思うようになり川柳にのめり込むようになりました。八人兄弟の末っ子の私。死に向かう母、まだその現実に向き合うことのできぬ自分との戦いの中で悶々と過ぎる日々。素直に日記を書く様に川柳を綴るうち序々に冷静に現実を見ることができるようになりました。母を見送り相次いで義兄、義姉そして六十五歳の時は最愛の夫を癌で見送ることになりました。気持の折れかかった私を救ってくれた川柳に感謝の気持です。ありがとう川柳。

川柳塔へは四十八歳の時に誌友として入会。満秋先生亡き後あおば川柳会を脱会。川柳塔ひと筋で投句させて頂き古希の道を歩む現在に至っております。

今回同人の仲間入りをさせて頂き感謝申し上げます。初心のつもりで新たに川柳を友として楽しんでいきたいと思っています。よろしくお願い致します。

ツールとしての川柳

豊中市　きとう　こみつ

川柳と出会ったのは２０１２年の夏の終わり。母を春先に亡くし同時期に夫とも別離。その事で原点に帰り、素で生きていけるように感じた時期でした。親に心配をかけることもかけられることも、また夫の心配をすることもなくなった事は、自分自身に責任をもって生きなければならないという事でした。まさに自己責任で発言できるようになった時期に「心を吐く」川柳に出合うとはまさに運命の出会い!!ではありませんか。

それからという私はさらに素にして自分を表現することを、つまり生きることを言葉にしていくことでエンジョイしていきたいと思いながら、そうなれるように目ざして川柳と仲良く歩いてきました。川柳と二人三脚？　しかしまわりには天根夢草先生他、理解しあえる仲間がたくさん。だからみんなと歩いてきた気がする。ありがとう皆さん。どうぞよろしくお願いします。

これからも常に原点を追求し素をさらけ出し、生きた証を川柳というツールをたずさえて人間追求、私追求をできたらと考えています。心からの感謝とこれからの未来に À la vôtre !

こんにちは　新同人です

川柳を始めた動機は

倉吉市　田　中　紀美恵

始めにこんな未熟な私を同人に推薦いただきありがとうございました。私が川柳を始めたきっかけは、倉吉市上灘地区の月刊紙UWANADA（ウワナダ）公民館だよりに、打吹川柳会として川柳が掲載されていました。すばらしい句ばかりで、うわあすごいと毎月見るのが楽しみでした。ようし、会社を退職したら始めようよ思っていた矢先、すごく素敵な方とお会い出来、だんだんと川柳が楽しくなり、その友と切磋琢磨し現状に至っております。

打吹川柳会に入会して二年目にがんという大病にかかり、二年間句会へ出席出来なくなり寂しい日々を過ごしましたが、その友達にはげまされ助けていただき、いろいろな事を教わり今は忙しく楽しく句会へ出席させていただいています。私達の会はすばらしい先輩の方がおられ、私もすこしでも上達するよう頑張って行こうと思っております。

私達の会も高齢化が進み会員が少なくなり寂しいかぎりですが、毎月二十名前後の方が出席され会長始め和やかな会となっております。この三ヵ月前から若い会員も増えて嬉しいかぎりです、私も病気しないよう続けて行こうと思います。

私と川柳

尼崎市　近　兼　敦　子

私が川柳を初めたきっかけは母です。川柳をしている母はとても楽しそうでイキイキとしています。私もしてみたい、そう思い勧められて、木本朱夏先生の教室に行かせていただきました。丁寧な添削、川柳のお話、知らなかった世界にどんどん魅了されました。

その後「西宮北口川柳会」に入会させていただきました。句会では先輩方のアドバイスを頂きながら、毎月楽しみに参加しています。また同人にも推薦していただき感謝しております。

句をつくるのは、毎回とても大変です。苦労してできた句が抜けた時は本当に嬉しいです。私の句を共感していただいたことが次の句会への励みとなっています。

「心がある」「愛がある」「常にアンテナを」母が私にアドバイスしてくれた言葉です。迷いながら作句していますが、これからも頑張っていきます。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

こんにちは 新同人です

川柳との出会い

鳥取市　田賀　八千代

私と川柳との初めての出会いは、私がその当時勤務していた施設で、利用者の方々の「生きがいづくり」の一つとして採り入れたことでした。その頃はまだ国鉄に勤務しておられた故・両川洋々先生の協力を得、月一回「川柳教室」を開きその担当をしていました。そして地域の方にも声がけして少しずつ広がっていきました。仕事の関係もあり担当を変わり、長い間川柳から離れておりました。

その後ご縁があり、福祉の専門学校に勤務しておりましたが、学生と関わる中「川柳を知って欲しい」と思うようになりました。しかし、日々の授業に追われなかなか出来ませんでした。そんな時、両川洋々先生に相談すると、忙しい中(市会議員)快く引き受けてくださいました。

私の二十年ぶりの川柳再開でした。学生たちが卒業後、県内外の施設で利用者の方々と関わる中で、少しでも感性を磨いて欲しいと思ったからです。私は現在「川柳ふうもん吟社」に所属し。今年から「大山滝句座」に通いお世話になっています。

両川洋々先生が撒かれた多くの種が芽吹いていくことを信じ、私も川柳を楽しんでいきたいと思っています。多くの仲間の方々と共に。

川柳ジイジ

神戸市　敏森　廣光

ゴルフ、囲碁、孫の三つのゴに夢中であった私に、川柳と言う途方もない世界を教えて下さったのは、山崎武彦様でした。とある神戸のシニアゼミでご一緒させて頂き、偶々山崎様の句にふれ、また川柳の魅力を語られ、山崎会長のもと川柳勉強会を立ち上げることとなったのです。また私は居谷真理子先生の教室でも、ご指導を受けました。

今では、一ヶ月に五つの句会、二つの勉強会に出席する、川柳ジイジになってしまっております。会社生活を離れ気ままな生活を送っていましたが、川柳を通じ、

①句会における披講の緊張感、自分の句を読みあげられた時のあのドキドキ、そして小学校以来の自分の名を告げるあの誇らしさ等、他では味わえぬ場を知る事ができました。

②句会が終わると反省会という飲み会。いつの間にか反省会の常連となり、お蔭様で多くの柳友を知ることができました。句会の中では聞けない、川柳へのアドバイス、心構え、そして人生観等に接し、興味がつきません。

こんな私にも一つ夢があります。生涯かけて自分の句はこれだと言う句を一句作りたい。そんな夢の実現に向けて精一杯学んで参ります。

皆様どうぞよろしくお願いいたします。

こんにちは 新同人です

川柳との出会い

河内長野市　中島一彌

「小人閑居して不善をなす」と言うが、古希を間近におとなしく読書三昧と主夫業に明け暮れていた頃、友人を介して川柳と出会った。ボケ防止に効くという殺し文句に魅かれプラザ川柳に入会し、その頃読んだ田辺聖子の「川柳でんでん太鼓」が面白く、触発されいつしか川柳の虜となっていた。

川柳は鉛筆とメモ帳さえあればいつでもどこでも可能であり、閑居した小人にはピッタリの趣味である。「馬上」「厠上」「枕上」という言葉も教えていただいた。自分にとっては朝のウォーキングが合っているようだ。新鮮な空気を吸い脳の活性化につながるのか不思議と収穫がある。

毎月の川柳塔誌から諸先輩方の一句に込められた文芸作品を鑑賞させていただくと、発想の豊かさ、切れのあるフレーズ、言い回しの上手さとリズム等々に圧倒されるばかりである。「誹風柳多留十二篇研究」も味わい深いコーナーである。質の高い古川柳は今日の我々にも訴えてくるものがあり不易の作品である。

最近は何か場違いの所に来てしまった感すら覚えるのもあり苦悶の日々が続くこともあるが、早く川柳に親しみ楽しめるよう精進して参りたい。

ボランティアガイドから川柳

奈良県　中堀　優

退職してからの認知症防止に、何か良いものはないかと探しておりましたところ、友人により奈良の観光ボランティアガイドを紹介されました。適当に頭を使い、足の運動にもなり、また子供達はじめ大人の方とも話が出来る。これはいいと早速応募、六ヶ月の厳しくも楽しい研修を終え、やっと入会の許可が来ました。

その月の会報に新人紹介の趣味の欄に、小生が書いたハイキング・俳句の文字が、先輩の目に止まり「俳句してたのなら川柳にこないか」と誘われました。これが川柳塔ならにお世話になる始まりでした。

それから月日の経つのは早いもの十年余り、なかなか上手くいきません。そこでその先輩、今はなくなられているのですが、開いて下さった勉強会、大好きだった酒にちなんで「酔柳会」と命名し、終わった後の反省会という名の飲み会が楽しみで、今も続けて頑張っています。たかが十七音されど十七音ですね。なかなか大変です。

でも自分史作りと思って頑張って行きますので、皆様のようにはいきませんが、どうぞよろしくご指導の程、お願い申し上げます。

こんにちは 新同人です

私と川柳

米子市　野川宣子

このたび、川柳塔同人の仲間に加えていただき新たなスタートを、切らせていただくこととなりました。

川柳との出会いは、十数年前同じ自治会でお世話になっている政岡日枝子さんのお誘いでした。和やかな雰囲気の中で皆さん生き生きとされている姿に出会い入会いたしました。川柳塔誌を勧めて下さりそれから下手なりに、初歩教室、水煙抄にも投句をしておりました。毎月届く塔誌が待ち遠しくてたまりませんでした。

そのうちに、楽しかった作句がだんだん苦となって、壁に何度もぶち当たっております。弱音を吐くたびに政岡さんからは、励ましの言葉を頂いております。

先生方、先輩の句に触れて頑張る力にして行きたいと、思っています。まだまだ未熟で勉強中ですが、このたび同人に推薦を頂きました。八木千代先生、政岡日枝子様、竹村紀の治様には感謝しています。

今後とも御指導のほどよろしくお願い申し上げます。

父・母のことを偲んで作った句です。

向う岸煙草くわえた父がいる　宣子

光り物縁がなかった母の指　宣子

後れ馳せの新人

丹波篠山市　長谷川善輔

六十年くらい以前でしたか大阪にいた頃、〝番傘〟同人の知人から、「川柳をやらないか」と、声をかけられました。私が短歌を作っているという話になったときでした。「そんなおじんみたいなことようせんわ(笑)」と、話したことを覚えています。その後、阪神大震災のせいで、篠山に住むようになり、年齢も六十をすぎて充分におじんになりました(?)

日々、絵を画いたり、コーラスにも入っていましたがボーッと暮らしていた五年ほど前〝川柳ささやま〟に入らないかと声をかけられました。作ってみると、面白くはなりましたが、うまくいきません。季語のない俳句のようになったり、無理に諧謔や風刺を入れようとして始末に困りました。最も困ったのは、馴染んでいた短歌より十四文字も少ないことでした。「これは思ったより手強いな」が実感でした。

そんなとき、〝林ふじを句集〟に出会いました。「これや!!」要するに〝作為〟(作意)が先に立つのは以っての外なのです。

人生の若さ(?)を保つため、ご指導よろしくお願いします。

ゆきずりの幸せらしき顔憎し
下げられぬ頭を母として下げる
まっすぐに歩いていつもつきあたり
ひとりでも歩けるけれど……ひとり　(林ふじを句集から)

こんにちは　新同人です

川柳に出会って

鳥取市　副井　ゆたか

若い頃古川柳の本を読んだことがあり川柳に少し興味を持っていたが、一句も作ったことは無かった。

後期高齢者になった頃、鳥取市の生涯教育講座に「川柳」があることを知り、ためらわずに申し込んだ。講師は森山盛桜さんで一年間十二回の講座は非常に充実した内容であり、興味深く聴講出来た。現代川柳の基礎とその面白さ、奥深さを実践しながら学んだ。一番面白い素材が自分であることも知った。

紙と鉛筆があれば作句出来る簡便性、人間や社会を題材に取り上げる奥深さ、表現の複雑多様さ、師匠をも「さん」付けで呼ぶ平等さ、他の結社の例会へも自由に参加できる開放性、時には選者をも務めさせる新人教育、川柳を通じた仲間作りなどが私の心を惹き付ける。理系人間の私が川柳を趣味にする意外性にも驚いている。

今は盛桜さんの勧めに従い大会（誌上大会を含む）やよその例会への出席、新聞・雑誌への投稿等自分の出来る範囲のチャレンジをするよう心掛けている。

三十歳で始めた趣味のテニスを古希過ぎから本格的に再開した。川柳とテニスの合わせ技で心身共に健康な生活を送りたいと考えている。

川柳の扉の前で

岡山県　藤澤　照代

この度は、同人に推挙していただき有難うございます。一層身を引き締めて精進致す所存です。

今から約三年前のこと、当時六十七歳の私は脳トレの文字に惹かれて地元の公民館主催の川柳講座に通うことにしました。川柳の知識はゼロ、でもまあ面白そうだし、何より後退していくばかりの脳みそを鍛えたいというなんとも呑気な動機で、私の川柳生活はスタートしたのでした。

その後もっと川柳を学びたい気持ちが強くなり、新家完司先生が講師を勤められている山陽新聞カルチャープラザの川柳講座を受講することにしました。

軽い気持ちで始めた川柳でしたが、川柳は深い深い海でありました。高い高い山でありました。五・七・五には、市井の人々のか細い吐息から、壮大な宇宙の抒情詩までが詰まっていました。川柳の底知れなさに圧倒されたか弱い私はただただ畏怖してひれ伏すばかり。知れば知る程、遠ざかる川柳。形を変える川柳。川柳って一体なに?……

川柳は望んだ者に開かれる扉だと信じ、諸先輩方のレベルの高い作品に刺激を受けつつ、一句でも快心の句を生もうと日々もがいております。

こんにちは 新同人です

えらいことを…

三田市　松本　ゆかり

四年前、後期高齢者に一歩踏み出した途端、魔がさしたのか、あしがる川柳会にふらっと立寄りました。勿論、故上垣キヨミさんから予備知識はもらっていましたが…。

北野哲男先生のあの笑顔にもかなり強い磁力がありました。しかし、まさかこの歳で知らない世界へ入っていくとは、そんなエネルギーがまだ自分にあったのかと今更に驚きます。

全くヨチヨチと、周囲を見ては首をすくめ、句会の楽し気な空気にそっと首をのばし、お陰様でお仲間に入れていただく事となりました。成果は何もありません。でも身に合った穴を掘って居座るつもりです。

きっかけとこれから

加西市　山端　なつみ

地域の高齢者大学三年の時に、「一本の鉛筆と紙があればできる」という部活紹介で行った教室が、北野哲男先生との出会いで、川柳を始めたきっかけです。俳句より季語がない分、川柳の方が取っ付き易いかなと、サラリーマン川柳しか目にしたことがなかった私の安易な選択でした。

「川柳は人間を詠む」と教わり、平凡な私は悪戦苦闘していますが、楽しい教室のお蔭で続けることが出来ています。

このたび同人のお話を頂き、未熟者で分不相応だと思っておりますが、これを機に句作りに励みたいと思います。

その為には女性団体活動、ボランティア活動、各種講座、旅行など、手帳の空きをすぐに埋めて真っ黒にする癖を見直して、よく取捨選択します。六月十月は農作業月間と諦めず、句作りに早めに取り掛かり、川柳塔へ締め切り間際に速達送付などしないと、ここに宣言して実行に移します。

息子の恩師でもあった木津川計先生に「川柳塔の川柳讃歌」欄に一回でも選んでいただけるような、私の川柳を作りたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

私の好きな一句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　　路郎

こんにちは　新同人です

縁は異なもの

大阪市　横山里子

二〇一五年一月に、老人大学の同期生の友が、脳トレと思って「川柳塔すみよし」に、一緒に行こうと誘っていただいたのが、私と川柳の初めての出会いでした。

会場でお隣りに座っておられたのが、恩師川端一歩先生でした。川柳と俳句の区別もつかない私に、まず田辺聖子さんの『でんでん太鼓』と『道頓堀の雨に別れて以来なり』を読むように、推薦していただきました。それと他の人の句を多読するよう教えて下さいました。

古今堂蕉子様には、毎月の句会で呼名された句を、褒めて下さる一筆箋をいただくのが嬉しくて。一年分を何度も読み返しては、句作りのエネルギーにしています。

川端先生、古今堂様には、いつもアドバイスをいただいた上、この度の同人に推挙していただきありがとうございました。私に川柳の場へ誘ってくれた友は、鬼籍に入ってしまいましたが、友の形見の川柳と共に、余生も歩んで行きたいと思います。

同人には、まだまだ未熟者ではございますが、諸先輩方の御指導御鞭撻の程よろしく御願い申し上げます。

朝日なにわ柳壇　今年の十秀

— 令和元年12月18日　朝日新聞発表 —　（太字は本社同人）

川柳塔社相談役　**西出　楓楽　選**

最優秀句

起床ベルいちばん若い日の始動　**村上　直樹**

秀　句

個人差あり隅に小さく読みにくく　石田　貴澄
無言館ただ戦争がうらめしい　小嶋　令子
万葉の詩心いまに届きけり　土井　正臣
郵便受けたのしみに待つアナログ派　彩后　笑美
少し派手が嬉しい嫁のプレゼント　木下　越子
キッチンは句のアイデアを生むお城　**木見谷孝代**
長生きに薬は要らぬ恋をする　森田　恵子
機嫌悪いとおろし大根出来過ぎる　**藤塚　克三**
千円の時計も同じ時刻む　廣田　和夫

番傘川柳本社主幹　**田中　新一　選**

最優秀句

覚悟したとたんに今が光りだす　坂本　星雨

秀　句

喜んでもらえたことが杖になる　松熊　克衛
強がっているから見える弱いとこ　森本　和子
タガ少し緩めて甘い味を出す　上山　堅坊
手をつなぐ一人一人はみな独り　鳥居　宏
道頓堀の降る雨見てた聖子逝く　原田　正士
口開けて自分で食べる今が華　立石雉枝子
キッチンにぶれぬ女の芯がある　阪本　秀子
人間の器大きくする悩み　佐波　正春
苦しみを過ぎて人生コクを増す　金　昌則

（投句207名）

あちこちで盆梅展が開かれているニュースなどを見ると、ずっと前に長浜に行ったことを思い出します。

樹齢を重ねた見事な梅を楽しむどころか、足先から登ってくる寒さに参ってしまった情けない記憶しかありません。

しかし、寒い中で凛と咲く梅だからこそ、後に続く桃や桜を待ち遠しく感じさせてくれるのでしょうね。

では、ナビです。

大阪市　平賀　国和

化石賞とノーベル賞の日本人

（評）名誉あふれるノーベル賞と不名誉極まりない化石賞、日本人と日本国、何だかフクザツな気持ちです。

熊本市　杉野　羅天

能天気対無一文いい勝負

（評）この勝負は簡単に勝ち負けを決められないようですね。どっちもどっち、諦めが肝心と言えるかも。

羽曳野市　徳山みつこ

お立ち会いダイヤも象も出しますぞ

（評）ちっちゃいダイヤと動物の中で一番でっかい象さん。両方が同時に出てくるところ、見たいでーす。

神戸市　上田　和宏

お湯掛ければ年金すぐに倍ですよ

（評）あれれ、こんなに簡単に倍増するなんて素晴らしいではないですか。何て言っているうち夢が覚めてしまいました。

鳥取県　斉尾くにこ

本当のことはだあれも言いません

（評）本当のことを言わないのは保身のため、それとも…。あれこれ考えると少し寂しい気がします。

河内長野市　梶原　弘光

一強が政治のタガを弛ませる

（評）自分たちに都合の悪いことはウヤムヤにしたり、賄賂に失言、国民を馬鹿にしてやりたい放題ばっかり。

八尾市　山根　妙子

来春の桜が寄って会議中

（評）二〇一九年は桜にとって受難の年でありました。でも、やはり春には満開の桜、見たいです。

鳥取市　倉益　一瑤

鳩が出たのは昔むかしの話です

（評）マジックショーの正しい（？）姿のように思えます。今時は見物人の要求がどんどんエスカレートするのかも。

大阪市　小野　雅美

辛ければ足踏みしてもいいんだよ

（評）前向きに歩くばかりでは疲れてしまいますよね。人生、ちょっと休んだり足踏みしたりで丁度いいくらい。

寝屋川市　平松かすみ

一杯のコーヒー代をユニセフへ

（評）何百円かで救える命も地球上にはあるというのに、実行に移せないでいる我が身を恥じ入るばかりです。

大阪市　奥村　五月

六法を僕に隠れて妻が読む　和歌山市　武本　碧

生返事ばかりが続く雨の午後　橿原市　居谷真理子

国会の地下に巨大なゴミ箱が　高槻市　島田千鶴子

大掃除おもいがけない物が出た　長野県　丸山　健三

帽子からあなたに虹をあげましょう　大阪市　田中ゆみ子

思い出が溢れ断捨離を迫る　佐賀県　真島久美子

春ですね厚生省のバンクシー　松山市　郷田　みや

入ってもすぐに飛び出す癖がある　可児市　板山まみ子

上等の肉を買う日は十五日

岡山市　永見　心咲
ポッポッポ鳩に食わせる豆もない

大阪市　古今堂蕉子
泡と消します年金マジックショー

神戸市　山根　弘華
恋心発火しましたご用心

米子市　八木　千代
姥捨の入山料はどうしよう

弘前市　高瀬　霜石
わたくしと2千万との深い溝

池田市　太田　省三
大臣は在庫一掃繰り返し

和歌山県　三枝眞智子
言うだけは言うてみるとは小心な

寝屋川市　森　茜
無策の日小さなドラマこしらえる

堺　市　澤井　敏治
シュレッダーあるから悪は高いびき

和歌山市　まつもともとこ
住みにくい国だ人間がうるさい

大阪市　岩崎　玲子
むずかしい言葉出会うと復唱し

松江市　石橋　芳山
シラを切る自信が君にありますか

箕面市　出口セツ子
粗衣粗食欲しがりません年金者

大阪市　江島谷勝弘
うつらうつらしていてもたんともらえます

鳥取県　山下　節子
議事堂に入ると公私見失う

丹波篠山市　長谷川善輔
まあいいか我が家は一人天下なり

大阪市　柴本ばっは
永田町春夏秋冬多事多彩

高槻市　富田　美義
ひらめみな仲良く並べ干してある

奈良市　山本　昌代
夢希望暮らしに春を見いつけた

三田市　北野　哲男
トリックの前口上を聞かされる

唐津市　仁部　四郎
法律がふえて年金目減りする

大洲市　花岡　順子
これだからまだ役人は止められぬ

香芝市　大内　朝子
議事堂の中味品格持ちなさい

松山市　柳田かおる
少子化へベビーブームが乗っかった

尼崎市　近兼　敦子
人ごとと笑っているね議員さん

生駒市　飛永ふりこ
なんでやろコーヒーの香にすぐ睡魔

防府市　坂本　加代
年金が逆三角で転びそう

奈良県　長谷川崇明
白黒は一切つけぬまつりごと

三田市　谷口　修平
下手なりに心に残る祝い歌

枚方市　山口弘委智
この霧は夢の入口また出口

大阪市　寺井　弘子
夕焼けに愚痴の一言吹きとばす

和歌山市　土屋起世子
政策に長寿の森がゆれ動く

犬山市　金子美千代
外面はいいがこの国火の車

五所川原市　むらのひとり
引き算を覚えてからは生きやすい

倉吉市　牧野　芳光
どうにでもなれよ天国行くだけだ

和歌山市　古久保和子
世の中はタネも仕掛けもございます

宝塚市　岸田　万彩
指切りをしたのにこんな暮らしとは

千葉市　海老池　洋
世界一長寿の国になる不幸

朝霞市　前田　洋子
私が総理にならなもうアカン

堺　市　内藤　憲彦
証拠消しますわたし失敗しないので

神戸市　山崎　武彦
桜から梅見る会に宗旨替え

4月号発表
(2月15日締切)

(平本　霧石人　画)
柳箋に2句

110 旅を楽しむ（1）

日頃の決まりきった暮らしに少し倦んだときや、気持ちが沈んでいるときなど、気分転換に絶好なのが「旅」です。

ひとくちに「旅」と言いましても、気軽な日帰りのバス旅行から海外旅行までさまざまです。今回はしばしば詠われている「バスツアー」と「フルムーン」を拝見しました。

はち切れる熟女を乗せたバスツアー　宇野　幹子
トイレからトイレおばさんバスツアー　古橋　文子
ほどほどの幸せが乗るバスツアー　吉道あかね
ダムの水覗いて帰るバスツアー　籠島　恵子
二列目はうなずく役のバスツアー　久保田千代
おばちゃんの飴が飛び交うバスツアー　中井　アキ
バス旅行飲む男にも回る飴　藤井　正雄

バスツアーを利用するのは趣味の会とか婦人会など、顔見知りが多いのが心強いところです。中には熟女ばかりというグループも多いことでしょう。安くてお手軽に楽しめるといっても、借金取りに追われていては旅行どころではありません。やはり「ほどほどに幸せ」な人ばかりでしょう。

おばちゃんからのサービスは定番の飴ちゃん。早々とビールを飲んでいる男にまで「どうぞ！」と回ってくる。欲しくなくても有り難く頂戴するのが浮世の仁義です。

バス旅行やっぱり夫しゃべらない　穂口　正子
バスツアー黙ってるのはみな夫婦　藤井　則彦
集合時間その都度書いてバスツアー　難波智恵子
バスツアー車体ナンバー写メしとく　金川　宣子
日帰りのバスツアーでもいる土産　坂　裕之
バスツアーつい買いすぎる道の駅　三宅　満子
腰痛の話で終わるバスツアー　平井美智子

夫婦なら当然のように一緒に座らされます。それが嫌なのでバス旅行を敬遠している人もいるとかいないとか…。

また、バス旅行で心得ておきたいのは「集合に遅れないこと」。時間をメモしてナンバーを記録しておけば万全です。

お土産を買う余裕があるのも「ほどほどの幸せ」。腰痛の話が出るのは長時間バスに揺られていたせいでしょうか。

計画でいつも躓くフルムーン　木田比呂朗
なんとなく気乗りがしないフルムーン　上田ひとみ
夫じゃない人と行きたいフルムーン　曽我　悦子
フルムーン服も着馴れたものを着て　平木　公子
老妻のヘソクリで行くフルムーン　田中　辰夫
埋め合わせ一度で足りぬフルムーン　山田　耕治
どっさりの薬を持ってフルムーン　渡辺　富子
フルムーン酒控えとは妻言わず　奥村　五月
宮島で朱に染まったフルムーン　岡本　昇
フルムーンまた買ってくる夫婦箸　井上　勝視
褒め言葉少しは欲しいフルムーン　小川てるみ

ハネムーンほどドキドキもワクワクもしないフルムーン。なんとなく気乗りがせず緊張感もなく「普段着でいい」というのはご亭主も同じでしょう。しかし、散々苦労をかけた奥さまに対する「埋め合わせ」のつもりで、少しは「労わりの言葉」や「褒め言葉」をかけてあげましょう。

本社 一月句会

◇一月七日（火）午後一時
アウィーナ大阪

七草で胃を労る七日、新年句会は雨の中、百三十六名（内投句者十四名）の参加で開催された。句会に先立ち、月間賞永久保持者の木本朱夏さんが表彰され、本社句会皆出席の44名が、主幹直筆の色紙のお祝いを受けた。

今月のお話は小島蘭幸主幹。題は「ひるまえ川柳」。NHKからの依頼で一回限りのつもりで引き受けられた番組が、来年で五年、その間に放送時間も9分45秒から16分に、入選句6句から16句に増え、六百句を越える投句と格闘しておられる。投句も入選者も川柳塔同人、誌友が多く、「川柳塔社主幹でよかった」とは私達にも嬉しいお言葉。放送初回に「婚活の環状線を抜けて春」を願って入選した藤井智史さんの直近の入選句「十二年かけ嫁という春に会う」を紹介してお話を終えられた。智史さん、おめでとう！（眞澄）

月間賞は木本朱夏さん（和歌山市）

（司会―真理子・美智子）（脇取―奏子・隆彦）
（受付―靖鬼・惠）（懸垂幕墨書―耕治）
（清記―憲彦・勝弘）

席題「地」　柿花　和夫　選

方向音痴地下も地上も迷路なり　磯島福貴子
天地返し畑に夫の鍬の音　安土　理恵
天の声地の声父と母である　川上　大輪
土地柄が好きで不便な村に住む　長髙　俊雄
人類に地球まかせた神の悔い　村上　玄也
地下茎があいさつなしに隣家から　山下　純子
地下足袋の亡夫のお蔭今がある　柴本ばっは
純白の地図を握って呱呱の声　山野　寿之
地酒が効いてはずんでるお年玉　横山　里子
曖昧な私を急かす着地点　小野　雅美
地獄極楽決まらないのでまだ途中　長谷川崇明
上からの目線に余計意地を張り　藤井　則彦
地図広げ中近東の地理学ぶ　平賀　国和
地下組織とつながっているゴーンさん　きとうこみつ
地元産食べて元気なお年寄り　能勢　利子
縄文の妻で地に足着いている　吉村久仁雄
地を這った過去があるから今の幸　大内　朝子
地団駄を踏んで足首捻挫する　大久保眞澄
芽が出てる嘘をつかない春の土　緒方美津子
東京の地下レバノンまで通じる　岸田　万彩
地元ではなんとか小町言われてた　藤井　宏造
どんと地を蹴って父母から脱皮する　山本　昌代
形より味が自慢と露地野菜　藤原　大子
地震かと思えば妻の寝返りじゃ　矢倉　五月
地が出たなその食べ方と笑い方　上野多恵子
K点を越えて飲んでる午前二時　村田　博
人間の驕りに怒る病む地球　平賀　国和
孫と描くバラいっぱいの世界地図　村上　直樹
親不孝これでご容赦墓地を買う　大久保眞澄
草刈りをしろと故郷が呼ぶのです　中岡千代美
心地よい店だお酒もママもよい　長髙　俊雄
有頂天次の一歩がままならぬ　川上　大輪
無地のカンバス八十路の英気ぶっつける　坂上　淳司
地に還るために毎日しこを踏む　山岡冨美子
背伸びにも疲れて踵地に付ける　松浦　英夫
まだ地雷埋まる地に生く子の瞳　米澤　俶子
地についた意見下さい総理殿　緒方美津子

佳

友増えて地酒が旨い左遷の地　伊達　郁夫
ゴーンさん天地無用と箱の中　磯島福貴子
この大地守って渡すこと誓う　上田ひとみ
今度こそ地に足着けて第二章　斎藤　隆浩
アフガンの大地で消えた星惜しむ　鈴木　栄子

人

煩悩がすぐ邪魔をする無の境地　中島　一彌

地

そのうちにノアの箱舟出る地球　萩原　狸月

天

パプリカを踊ると花が咲く大地　片岡　加代

軸

古里の土を裸足で踏み締める

兼題「ほこほこ」　太田扶美代　選

太陽を食べた蒲団に抱かれてる　石田ひろ子
湯上りのほこほこ不安消えていた　山本　昌代
ほこほこと早や七草の朝の粥　山根　妙子
ふっくらと炊き上げた飯粒が立つ　中島　一彌
スーパーの入口焼き芋が呼びかける　中岡千代美
絵に描いた餅はほこほこしていない　川上　大輪
アホやなあほこほこ顔に騙された　上野多恵子
懐がほこほこ心まで温い　伏見　雅明
ほこほこの焼芋に勝つスイーツなし　奥園　敏昭
一年の憂さほぐれゆく柚子の風呂　宇賀　史郎
外は雪いろり囲んで聴く民話　鈴木いさお
言うこと無しほこほこ餅が焼きあがる　上野多恵子
誤字当て字母の手紙のほこほこと　鴨谷瑠美子
貸した肩温もり貰う白い杖　長川　哲夫
大笑いすると体もあたたまる　西出　楓楽
侘助咲いて心ほっこりお正月　松尾美智代
ほこほこを囲むと母のことばかり　片岡　加代
仏壇も炊けたてご飯待ってはる　北野　哲男
寒風の中一輪が笑ってる　岩佐ダン吉
逢って来た時間を胸で温める　長髙　俊雄
札束に埋もれて眠る四畳半　木嶋　盛隆
神に合う予感ほこほこ初詣　石橋　芳山
御座候を抱き底冷えの街急ぐ　西出　楓楽
ほっこりのやさしいお鼻道祖神　柴本ばっは
湯上りの曽孫受けとるバスタオル　能勢　利子

春という字を見るだけでほっこほこ　新家　完司
ほこほこの川柳持って出る句会　川端　一歩
お年玉もらいほこほこしてる子ら　きとうこみつ
湯タンポとカイロでほこほこの夜寒　鈴木いさお
あの人が来るとほっこり座が和む　山崎　武彦
冬の陽を吸った布団でつく眠り　松浦　英夫
七草のみどりほこほこ胃がなごむ　大内　朝子
ほこほこの焼きいも天下とる心地　伏見　雅明
愛情を編んだセーターの温いこと　清水　英旺
ほこほこと母のセーター今も着る　田中　廣子
みくじ大吉ほこほこほこの初詣　安土　理恵
背中までほこほこ長いハグでした　山田　耕治

佳

毛糸買う時から浮かぶ君の顔　小野　雅美
字余りも字足らずもなし日向ぼこ　山岡冨美子
惰眠する冬の陽溜り背に受けて　荻野　浩子
冷える日は腰にべったり貼るカイロ　村上　玄也
スイセンがパッと開いた春がきた　内田志津子

人

話したら心ほこほこ母の膝　酒井　紀華

地

いつだってあなたの側はあたたかい　上田ひとみ

天

嬉しいと書けば心も温くなる　小野　雅美

軸

大切な人へほこほこ食べさせる

兼題「ピーク」　内田志津子　選

人生のピークを追って喜寿になる　伏見　雅明
頂上の見えぬ原野に冬ごもり　森田　旅人
限界を越えた所にあるピーク　川上　大輪
何回かピーク迎えてまだ夫婦　長井　善純
人生の今がピークの花の色　木本　朱夏
その時に女はきっと髪を切る　くんじろう
絶頂期すぎたスターの家族葬　澤井　敏治
北岳のピークで富士が笑みをくれ　吉村久仁雄
当日にピークを合わすアスリート　鈴木　栄子
ピーク越え喧嘩もしなくなりました　山田　葉子
いつだって今日がピークという笑顔　平井美智子
僕の首今日か明日かと棒グラフ　平松かすみ
人生のピークは明日の午後あたり　新家　完司
頂点に立つと見えなくなる正義　澤井　敏治
今日生きているのが何よりのピーク三宅　保州
人生のピークも過ぎて畳む羽　森　廣子
さあピークれもんを齧る山男　柴本ばっは
ステーキワイン君いて今が絶頂期　矢倉　五月
喜寿までがピークだったな酒の量　北野　哲男
今ピーク娘の軽い靴の音　藤井　宏造
あの時がピークだったかハネムーン　太田としお
お水取り春呼ぶ火の粉今佳境　渡辺　富子
胡蝶蘭人気のピーク見ています　山田　耕治
アスリート五輪ピークに生き尽くす　山口弘委智
これ以上あかんと閻魔言うている　居谷真理子

おみくじは大吉ピークです今年　鴨谷瑠美子
何時の日かピーク迎える要介護　今井万紗子
頂点に立つと掴まる枝がない　伊達　郁夫
占いでピークは今という悲劇　石田　隆彦
胸の鈴鳴り続けます絶頂期　山本　昌代
ピーク過ぎても結婚願望あるらしい　藤村　亜成
終章をピークに人生遣い切る　山口弘委智
頂点に立てば違ってくる景色　鈴木　かこ
バブル期は3億だったうちの家　きとうこみつ
どん底もピークも知らず生きてきた　米澤　俶子
老いピーク美容整形思案中　平松かすみ
ピーク過ぎ生き方少し変えてみる　榎本　舞夢

佳

引き際を山口百恵から学ぶ　清水久美子
舞台暗転君のピークはもう過ぎた　上野多恵子
トップの座で今日も充実した孤独　柿花　和夫
陣痛の天辺で会う女神様　栃尾　奏子
悲しみのピーク涙はこぼれない　西出　楓楽

人

沸点の愛も別れは氷点下　山野　寿之

地

バラ百本もらう私の絶頂期　木本　朱夏

天

霊山の温もり貰い峰に立つ　長川　哲夫

軸

今ピーク転んでばかりいる左脳

兼題「切ない」　石橋　芳山　選

指示通りやって責任取らされる　伏見　雅明
バレンタイン焼け食いしてるチョコレート　奥園　敏昭
独り暮し気楽と不安同居する　寺嶋恵美子
入院の義母に渡せぬ雑煮餅　冨永　恭子
下駄箱に誰も履かない下駄がある　くんじろう
ハルカスに通天閣が身を縮め　水野　黒兎
体重計切ない顔で降りる妻　森松まつお
赤飯鯛省略されて誕生日　川端　一歩
切ないと言いつつ口に柿の種　原田すみ子
八合目膝が切ない声を出す　萩原　狸月
切なくて毎日爪を切っている　太田扶美代
ペットショップ直視出来ない売れ残り　能勢　利子
片思いでした切ない恋でした　鈴木いさお
言い訳をしながら涙止まら無い　齋藤さくら
アゲンスト切れて切ない凧の糸　村田　博
臨終を腕時計から告げられる　小野　雅美
七年目今も貴方に囚われて　宇賀　史郎
空缶を山と積でるホームレス　中里はこべ
たふたふとどこか切ない素っ裸　平井美智子
切なくてワイングラスを空けている　山本　昌代
松阪の宿でアメリカ牛を食う　岸田　万彩
何とでもと言うた勇気が通じない　古今堂蕉子
「フランダースの犬」の最後の名場面　きとうこみつ
虐待を受けたあの子のゴメンナサイ　敏森　廣光
君が代を聴くと骨まで切なくて　上野多恵子
若造りしてても席を譲られる　長井　善純
お支払い結構ですとお店から　坂　裕之
来年のことは考えなくなった　山田　葉子
日本がじわりじわりとガラパゴス　上田　和宏
空っぽとわかっているが振ってみる　平井美智子
パソコンも加齢なんだね突然死　澤井　敏治
昼飯は妻から貰うワンコイン　木嶋　盛隆
鎖だけ無意味に動く象の足　鈴木　かこ
年越にひとりぼっちでカップ麺　きとうこみつ
星空の妻へ届けとニニ・ロッソ　藤井　宏造
僕を一杯詰めたパソコンごみに出す　上田　和宏
オンザロックあいつがいたらなと思う　片岡　加代

佳

好きですすに迷惑ですという返事　片山かずお
住み慣れた家が更地になっている　鈴木　栄子
あああああ九回裏の逆転打　太田としお
ここぞと言うときにお金がないのだ　江島谷勝弘
生きるとか死ぬとか爪を噛みながら　木本　朱夏

人

マドンナがアッチを向いて桂馬飛び　木嶋　盛隆

地

老いるって切ないロックだぜベイビー　居谷真理子

天

まだ森は私を抱いてくれません　くんじろう

軸

チリチリとむしり取られていくハート

兼題「養う」　西出　楓楽　選

心中に脱皮かさねた虫を飼う　伏見　雅明
好奇心という虫を胸に養う　杉野　羅天
子養い終われば親が待っている　川上　大輪
大脳を養う読書三昧の冬　山本希久子
子ら去んで英気養う小正月　初代　正彦
一病を養う豆腐あたためて　居谷真理子
結婚しようと女性次次押し寄せる　斎藤　隆浩
反抗期もあった子育て振り返る　太田扶美代
身中に養うずぼら虫一匹　原田すみ子
名句詠みことばの海に養われ　水野　黒兎
図書館で英気養う素浪人　江島谷勝弘
私の身体で育つ脂肪肝　きとうこみつ
あいさつの出来るこどもの親思う　大内　朝子
中卒の兄が大卒させてくれ　坂上　淳司
子育てを妻に任せていた懺悔　佐々木満作
一人では食べてゆけないので夫婦　川端　一歩
虫養い過ぎて見事な体型に　磯島福貴子
飼い続けた反骨心は老い知らず　村上　直樹
AIに養われそう余命表　山岡冨美子
養毛剤上げたら白髪染め呉れた　村上　玄也
どん底で生きる指針を養われ　飛永ふりこ
教養がないから汗が生きる糧　長井　善純
三猿を養い嫁と同居する　鈴木　栄子
手の平に大志をつつみ育ててる　福田　正彦
ゴキブリも扶養している僕の家　石橋　芳山
師の薫陶心に余裕養われ　油谷　克己
じっくりと養う味噌と子らの明日　山口弘委智
ひと坪菜園まずはみみずを育てます　柿花　和夫
強情を養い顎が四角張る　冨永　恭子
養ってもらおう隙を見せておく　小野　雅美
親のスネもう骨だけになりました　きとうこみつ
切り岸の自分養うひとり膳　中村　惠
捨て犬と目線が合った定年日　藤田　武人
ニッポンを養っている多国籍　小野　雅美
忍耐力養い合ってまだ夫婦　敏森　廣光
順番に死んで養ってるお寺　岸田　万彩
故郷に養いきれぬ墓一基　くんじろう

佳

あんたなら養ったげる福の神　横山　里子
なにくそを養ってきたハングリー　荻野　浩子
お猿さんに養われてる猿回し　山田　耕治
耳に蝉目に蚊を飼って元気です　渡辺　富子
感性を磨く日常非日常　宇賀　史郎

人

養生訓ひらく人生八合目　木本　朱夏

地

塩浸けにしたい男を飼っている　山﨑　武彦

天

身のうちに蝶を育てている詩人　木本　朱夏

軸

詩人ですワイフの扶養家族です

兼題「最初」　新家　完司　選

川柳はもっと楽だと思ってた　能勢　利子
師の烽火以来千百拾弐号　山岡冨美子
おとこ吐く最初の嘘が「愛してる」　穂口　正子
新しい下着をつけて初詣　藤井　宏造
初詣で吉と出たけど風邪をひく　内田志津子
子の年も最初の出費お賽銭　北野　哲男
日記帳一ページ目の固い文字　藤原　大子
書初めは空に大きく天と書く　水野　黒兎
最初から見ていましたよ君が好き　内藤　憲彦
最初はグーその次もグー次もグー　中岡千代美
やはりトイレに行って置くべきだった　江島谷勝弘
好きですとノックしたのはあなたです　栃尾　奏子
最初から返事決めてた初デート　中里はこべ
最初のキスとても綺麗な花畑　川端　一歩
ファーストキスぶつかり合った歯の記憶　鈴木　かこ
嫁はんは逢うた時から決めとった　荒川　鈍甲
一目惚れされてしまいました私　大久保眞澄
結婚してハイと言ったの三日だけ　石田ひろ子
あの頃はシッポも羽根も生えていた　上田ひとみ
十五で呑んだ初めての酒旨かった　鈴木いさお
スタートは乾杯フィニッシュはダウン　石橋　芳山
指定席なのに最初に並ぶ人　山根　妙子
ほんまに可愛い小さい口の最初の歯　きとうこみつ
フランスパン最初から固いまま　鴨谷瑠美子
第一印象でいつも損してる　長井　善純

似顔絵を名刺に描く初対面　三宅　保州
ユニクロを褒めちぎられた初対面　小野　雅美
はじめからすっぽんぽんのおつきあい　初代　正彦
まず最初バスを覚えるバスツアー　藤井　宏造
算数は本当に一から習う　片山かずお
初孫へ有り金はたく松屋町　島田　握夢
最初から女でこれからも女　鴨谷瑠美子
生まれた時は確かに男だったはず　川上　大輪
人生の最初で最後の逆走　岸田　万彩
初めから太目なんかじゃありません　上田ひとみ
期限切れ最初にボクが食べさされ　上山　堅坊
合併の名前で最初から揉める　三宅　保州

佳

元旦のトースター餅膨らんで　山根　妙子
初めての手術患者も先生も　大久保眞澄
天地創造からやり直したい地球　出口セツ子
最初から金依存症ＩＲ　岸田　万彩
十月の筍　長寿への励み　杉野　羅天

人

ときめいた最初があってまだ夫婦　渡辺　富子

地

夜が明けるたびに私が新しい　平井美智子

天

ふり出しに戻って縄を綯っている　木本　朱夏

軸

この星も僕も最初はゴミだった

句会燦燦

十二月句会を読む　板垣孝志

常連と一緒に歳をとった店　居谷真理子
蕎麦は美味しくなる一方だが　定休日が増えていく
少しずつ要らないものが増えてゆく　山田　葉子
断捨離に使うというダンボール箱が山積み
アイドルだったね店先のペコちゃん　美馬りゅうこ
ビクターの犬も首をかしげて待っていた
油絵も書道も三日ほどやった　新家　完司
基本だけ覚えれば大抵のことは出来る
テレビ切るやっと頭が動き出す　岩佐ダン吉
サブリミナルで自民党って流れていないだろうか
娘が嫁ぐ朝もいつものお味噌汁　松尾美智代
一生使えるこの味は天下無敵の嫁入り道具
ニヤリとも見えるモナリザの微笑　江島谷勝弘
画像にマスクを付ければ解る　絶対にニヤリだ
譲れない味です母の玉子焼き　平井美智子
同僚の弁当は40年間毎日玉子焼きのみ、享年58歳
爪まるく切ってあなたの嫁になる　小川賀世子
一週間で伸び、40年後を綾小路きみまろが語る
ゼロ歳に未来百歳にも未来　鈴木いさお
きんさんぎんさんには老後の蓄えがあったのだが
明日飛ばす紙飛行機を折っている　宇都満知子
遠くまで飛んで欲しい　小さな夢のせて
店の名は忘れた雨が降っていた　木本　朱夏
気が付いたらわたし一人・・・　絶妙のプロローグ

柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

保育器の中からゲームする未来　ひろ子
缶コーヒー軽い相談なら聞こう　和　子
カラオケ調でお経をあげるお坊さん　保　州
ラブゲーム男が下手な芝居する　智　三
イケメンの口説き上手に泣かされる　准　一
血圧を上げるタネなら持っている　日出男
焙煎をされて私が香り出す　知　香
短気損すぐに血圧はね上がる　一　雄
新聞を覗いて世界広くする　起世子
ローカル線ふたりの旅はまだ続く　当　代
コーヒーの苦味海馬も目を醒ます　宏　枝
雑踏にコーヒーの香のプレゼント　ま　き
足し算の人生求めボランティア　敏　照
コーヒーを飲み干して打つ句読点　幹　子
血圧は高いが今日も飯旨い　よしこ
自己主張少し譲れば争わず　康　則
コーヒーの香り背伸びをしたくなる　昇

一生に二度は乗られぬ霊柩車　俶　子
錯覚の恋かもしれぬアメリカン　菜　摘
遺伝子が高血圧を連れて来る　富　香
古新聞旬を包んだ里の味　美枝子
再会のコーヒー溶けてゆく月日　純　子
カフェテラス今も青春しています　あき子
サイフォンのしずくゆったり待つ香り　明　子
助手席でハンドル操作するお口　八重子
いろいろなものに出会った縄電車　昭　枝
廃線の話が届くふる里よ　ダン吉
生き残りなのかひっそりアキアカネ　理　恵
病床の父へ届けるスポーツ紙　眞智子
翼が欲しい渋滞中の気の焦り　悦　男
血圧を上げる見舞いのラブコール　かず子
返納にいつも愛車が袖を引く　俊　介
手の届く場所に缶コーヒーを置く　みつ江
世の動き新聞記事で教えられ　一　歩
D51の煙にむせた青春期　千　鶴

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

昭和平成令和たのしく生かされて　舞　夢
ロボットが寿司も握るし脈も取る　萠
ぜいたくに慣れて戦後へ戻れない　雅　美
完全に取り残されたPAY払い　里　子
じいちゃんはちぢみのシャツとステテコと　美世子
世が世なら僕も天下を取れたやろ　進
みそ醤油貸し借りできたいい時代　志津子
路郎師のふところにある陶冶の詩　満　作
円満なお顔してはる給料日　としお

母の懐金はないけど暖かい　シマ子
断捨離は懐古ばかりで捗らず　妙　子
懐の深い主人と五十年　廣　子
懐かしい地名が消える淋しさよ　一　歩
ひと呼吸素顔に戻る時を待つ　大　輔
熱くなり正気に戻るすってんてん　俊　雄
振り出しに戻ると見えてきた根っこ　(矢)五　月
振り向けば子育てしてた日の私　満知子
喧嘩して別れた友とより戻し　ミナ子
振り出しに戻り挑戦何度でも　ゆみ子
体力が戻り熱燗染み渡る　ふりこ
振り出しに戻り一回休みます　まつお
黙祷の最中に咳が止まらない　いさお
日本だけ夫婦別姓不承認　郁　子
話そうと思う言葉が出てこない　大　子
何一つ教えず妻は長の旅　(奥)五　月
助けてくれますかいっぱいあります　勝　弘
好きな酒飲んではダメと言うカルテ　宏　造
ツアーバストイレ休憩まだ遠く　福貫子
飲み出すとどんどん旨くなるお酒　篤
ピンポーン返事しましたノーメイク　輝　子
好きなだけ食べては悩む腹回り　ひろ介
覚えるより忘れる方が多すぎる　直　子

はびきの市民川柳会（おおさか）　中川ひろ介報

初孫が笑って妻の目に涙　久仁雄
青空を背負って笑う柿簾　みつこ
産室の窓を揺るがす呱々の声　壽　峰
拉致家族感動の日を待ち侘びる　ちづる

士農工商むかしの農は偉かった　いさお
引きこもりなどない農の汗をかく　大子
感動のあまりか涙雅子様　久仁子
二日酔い嫁さんむいた柿食べる　フジ清
農民は大事な国の宝です　瑠美子
感動を溜めてポケット重くなる　かつ美
農作業してるおかげで季節知り　シルク
野良仕事終えて夕陽に軍手干す　専平
刑務所の黒毛和牛の瞳が綺麗　一文
柿食って鐘の鳴るのを待っている　高鷲
芋掘りに園児の歓喜谺する　千鶴子
四万十で生命見守り走る医者　紀雄
自家菜園野菜が旨い無農薬　洋一
四季の農食を彩る和の文化　泰子
被災地に感動を呼ぶボランティア　正義
塀越しにうれし柿の実秋を告げ　美喜
前歯折れに熟柿優しく甘かりき　さくら
農村の厳しさ知らずあこがれる　雄太
サヨナラのアーチ感動呼び込んだ　ひろ介
災害のリスクに負けぬ農の意地　

川柳塔なら　大久保眞澄報

涙目に学校やめと拗ねる孫　ひろ介
走れないもつれる足になんでやねん　展代
おい諭吉なんで私を避けるんか　すみえ
飢える民尻目にミサイルを飛ばす　俊八
なんでやねん俺がリストラそりゃないわ　恭昌
銃弾に倒れた医師のこの無念　百合子
鏡見てなんでやねんとシワ伸ばす　すみれ
世話しない無情兄にも遺産分け　行久
なんでやねん妻が着飾る知らんけど　盛隆
なんでやねんあんなボールストライク　光堂
ええ大人が返事もちゃんとできてへん　眞澄
なんでやねんペシャワルの悲劇口惜しい　文聡
絵巻物欠けたピースが謎を呼ぶ　敬子
部品として生きる人生悔いはない　のぶよし
おお欠伸みられ思わずピースする　たか子
家族って掛け替えのないピースです　圭
四世代屠蘇を囲んでいる平和　甚之市
幼気な少女怒りの温暖化　壽峰
一強のおごりが臭うドブに蓋　成子
どの会もぶんぶんしてる加齢臭　倫
ぶんぶんの最中血圧計らせる　和夫
怪しげにぶんぶん媚薬にちがいない　理恵
金策に頭も走る年の暮れ　薫
もう走らなくていいよと遺影抱く　雅美
懸命に走る生きてる証拠です　ふりこ
十秒を切れば世界が待っている　柾子
忘れたい過去が脳裡を走り出す　恵美子
もう走ることはないんだ余生坂　優
出世道走れば妬心背にささる　國治
練り直すプランが走る煌めく日　美智子
急ぐまい景色たのしみゆるり行く　賛郎
走ったらアカン転けると言うたやろ　勝弘

川柳塔唐津（佐賀）　仁部四郎報

はいはいと妻は徳利に水を入れ　蜂朗
澄んだ眼の写真なんども撮り直す　四郎

山口光久選

一人には一人の音のある暮らし　智三
快方の気配おいしく食べられる　大子
ギアチェンジせねば明日へ続かない　葵
しみじみと話す言葉にウラがない　准一
病棟のなぐさめあっている仲間　和子
ふんわりと包んであげる何もかも　ひとみ
よく切れるハサミは急所はずさない　隆允
やさしい彩になるまで愛を振りかける　華
久々に雲の流れに溶けている　心咲
お互いに信じ合ってる種と土　黒兎

佳句地十選（1月号から）　久保田千代選

炊き立ての新米つややかに光る　みつこ
駆け抜ける少女レモンの香を残す　恵美子
一石を投じるための石拾う　亜成
隠された言葉が人の輪を繋ぐ　弘委智
身の丈のゴールへ色を足してゆく　冨美子
結局は一人に還る風の中　常男
お茶沸かすへそがこの頃働かぬ　茶子
還り行く母の匂いが消えてゆく　一粋
忖度が無くても桜咲くのです　恭子
赤い火を抱いて女は嫉妬する　楓花

僕の貌忘れた妻を介護する　高明
発言を控えメモとる癖がある　實

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

こだわりの一句で人を唸らせる　重虎
裸婦像に木枯し容赦してくれぬ　ひとし
北風にとろみを付けて遣り過ごす　風来坊
引き際が大事なれどもまだ押して　冬道
津軽野に木枯しふいて四股をふむ　美鈴
ミネラルが豊富赤穂ときめている　一呑
寝室に国境線が引いてある　則彦
妻だけのチャンネルがあり部屋を出る　黙人
こがらしのタクトで枯れ野みぎひだり　のぶよし
木枯しの唸りを聴いているベッド　慕情
線引きはしない私はまだ五十　規子
古希迎えこだわり捨てて生きて見る　初枝
万有引力覚悟の出来たリンゴから　吹喜
こだわって選んだ人がこの人か　孝子
こだわりは延命治療しないこと　柳子
居酒屋へ木枯し背中押してくる　隆樹
物事にこだわる癖はまだ抜けず　呑舟
逝く友を送り清めの塩を振る　きよし
敵に塩やっぱり絶対無理だよ　澄子
忘れない心動いた時間なら　真由美
せめてもの贅沢豆からのドリップ　英子
古希ちかく書いた作品えりすぐる　京子
令和元年カルアミルクの味覚え　龍馬
年重ね枯れてしまった泪つぼ　ふさゑ

二次会の銚子に揺れる蜃気楼　花峯
土笛ホーホーいのちの響きだな　劦
靴音で一瞬鳴き止む秋の虫　小とみ
納豆に味噌汁スイッチが入る　霜石
苦手なのレンジでチンのお料理は　洋子
イケメンがイクメン令和まっしぐら　和香子

川柳同友会みらい（鳥取）　吉田　陽子報

おいと呼びぐっと身近な人になる　清春
授かり婚二つ嬉しいこと叶う　みどり
こだわると水に流せぬことばかり　葵
衣替え昨日と同じ服を着る　章子
禁煙の次はメタボと戦う子　美恵子
街に出てIT弱者痛み知る　千恵子
老い二人許し合わねば続かない　華蓮
美しい桜汚した安倍総理　一眸
近況を喪中はがきで知る無念　れい子
幸か不幸か親のレールが剥がせない　海希
人相がみんな良くなる笑いヨガ　洋子
絶望の底でも待とうワンチャンス　和郎
歩いてきた道にいろんな花が咲く　亜矢
口癖はごめんありがと低く生き　健二郎
携帯を忘れ生きた気しない今日　真帆
夕焼けにレシピ抱えて腰上げる　安子
水引き草何事もなく咲いて散り　陽子
温度差を確かめてする橋渡し　游子
明日きっと実る汗などないだろう　ダン吉
マイナスの忖度される年金者　公弘

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

パソコンの上手な孫が家業継ぐ　重忠
合格にうれし涙の母一人　弘六
自分史の最後うれしいことを書く　一粋
世渡りの下手な男とみちずれに　一瑤
リズム良くパソコン指のバレリーナ　一平
お水下さい花がお辞儀をしています　美恵子
蟹貰い嬉し猫へもお裾分け　たぬ
生きているこんな嬉しいことはない　菖子
あの人が俺の味方と知った時　幸安
老境に入りて下流の石となる　敏子
ひと刺しで天狗の鼻が折れました　茶子
うれしいが口に出せない訳がある　雅女
妻の後三歩下って濡れ落ち葉　振作
ばあちゃんになる日がついにやって来た　真理子
下々の花見は自費でワンカップ　彰夫
生きるのに上下はないぞ陽が当る　千代
遠慮して下手に出ればつけあがる　凱柳
パソコンが脳梗塞と軽くいう　蟹郎
エプソンをはずし一日の感謝する　節子

南大阪川柳会　松岡　篤報

偉くなったな髭ぼうぼうの妻の顔　あや子
ワラ屋根に雑草繁る一軒家　柳伸
若草山ぼうぼうと燃え春を呼ぶ　楓楽
孫7人弱気返上お年玉　柳右子
ノムさんもひとりになると弱気見せ　直子
遠くからクレームつける妻を見る　東風

腕力が負けそで息子叱れない　国和
言い勝って母の涙を見て弱気　ひさ乃
見舞客弱気な言葉口封じ　歌留多
ありがとう今日も感謝の赤い空　修
被災地の夕焼けごめんと言って落ち　シマ子
戻り道夕焼けだけが優しくて　実
夕焼けて一日の罪朱に染まる　亜成
山襞の夕焼け見事万華鏡　弘委智
夕焼けに抱かれて帰るわらべ唄　弘子
大落暉今日のすべてを呑みこんで　克己
サンセット次なる国へ輝こう　ばっは
ワイルドに生きて穏やかな余生　いさお
ワイルドな服着ているが気はやさし　一歩
ワイルドな暮らしあこがれまず歩く　峰子
ときどきはワイルドピッチしてるボク　勝弘
台風禍皆の優しさボランティア　ルイ子
空想に酔うハルカスの遠あかり　志華子
老いる程妻への感謝雪ダルマ　篤

竹原川柳会（広島）　古田比呂子報

バンジージャンプ私を試すことにする　蘭幸
宣告の余命試してみる薬　陽子
道遥か二十才のハードル試される　敬子
意地悪を仕掛けて愛を確かめる　昭紀
試されていても私は動じない　栄香
ほのぼのと見る親子三代継ぐバトン　慶子
チビッ子はまず仏壇に手を合わす　夢香
信楽の温みほのぼの干支ねずみ　弘子
柿熟れる縁側ほのぼの秋の陽よ　比呂子
ほのぼのと北の訛へ旅つづく　鬼焼
ほのぼのとこころ温もるみすゞの詩　和子
ほのぼのと夜が明けわたし生きていた　寿子
半日はノートで遊ぶ一年生　笑子
ノートって年は取っても書くものだ　規代
ノートとる君の横顔光ってた　淑子
反省ノート毎日書いてまたあした　千代美
まっさらのノートのはずむ育児録　幸子
家計簿は我が家の歴史五十冊　輝恵
このノート僕の堪忍袋です　宣之
鏡の向きで明るい顔になれる朝　歩美
山で育ち海を眺めた秘密基地　初音
嫌だとは言えず重い返事する　貞子
背筋伸ばして雑踏の風に乗る　厚子
天国の祖母が見ているから泣かぬ　史子
おまたからのぞくとぜんぶさかさまだ　四歳　ちか

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

人になる前に摘まれてゆくのです　あきこ
若くして悔いを残して迎える死　ほのか
水垢離の白装束にある祈り　保州
寒気団雪のダンスを連れてくる　紀子
井戸掘った医師へ薄情なる仕打ち　愿
年よりに冷たい仕打ち消費税　よしこ
球根が芽吹く足並みそろえてる　徑子
抜かりなく答えを二つ用意する　知香
晴れ舞台心の準備まだ出来ぬ　准一
いつの間に準備せずともおばあさん　秀子
あるがまま準備不足で老いが来る　冨美子
雑草といえどすすきにある誇り　寿子
たなぼたを待って薄目を開けておく　小雪
美人薄命私はすでに卒寿です　紀久子
薄味に慣れて感度が鈍くなる　日出男
親密度まず羊羹が薄くなる　大輪

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

ストレスは生きてる証拠背負うもの　たみえ
とうに髪がそして歯が抜け次何だ　(入)修平
大そうじ来年もあるほどほどで　孝治
もみじ狩り色のるつぼにいるわたし　れい香
姿盛り鯛に睨まれ箸が出ず　英坊
冷たい手冬にはいつも嫌がられ　初音
ゲレンデでは白馬の騎士に見えたのに　厚江
美しき火と会う師走の墓参り　(高)千賀子
十二月今年の誓い未だ出来ぬ　新録
合い言葉忘れ討ち入りあせり出す　真桜子
インスタ映えよりも美味しい方がいい　りこ
レントゲン美男も美女も分らない　(竹)千賀子
青い目が舞子姿で闊歩する　良種
香港にジャッキーチェンあらわれず　勝弘
師走でも走ることない皆スマホ　五月
くもの巣にかかった蝶の終末期　紀華
卒寿でも十年日記買う気概　紀恵
信楽のたぬきはきっと脂肪肝　こみつ
プラゴミに失われゆく清い海　純
一度きりの命もがいているばかり　雅美
せせらぎが聴こえる鮎の姿ずし　公子

温暖化人も自然も失せて行く　正彦
短日を行ったり来たり家事雑事　ヨシエ
検査結果良くも悪くも今日は飲む　久仁雄
髭を剃る姿は見せぬニューハーフ　(谷)修平
じたばたとシュレッダーかけほっかむり　健二
停電で気付く我家オール電化　正和
友人がドミノ倒しのごとく逝く　祐康
サンタさん素通りをする寺神社　宏造
二合飲み夜空に心解き放す　かずお
虫の知らせかいつもと違う別れ方　シマ子
天皇の姿スマホで撮る時代　耕治
わたし何時もスッピンですという美人　靖鬼
有頂天になって始めて見た奈落　美籠
棺に釘じたばたしてももう遅い　ひろ介

川柳茶ばしら（愛知）　関本かつ子報

譲られた席でこの世を語る老い　雅美
新聞のレシピに挑みひどい味　まみ子
失敗を気にしていたら生きられぬ　美千代
赤い糸三行半で縁を断つ　三樹夫
糸口が掴めないまま拉致の海　遡行
入れてから気付く不足の切手代　かつ子

八尾市民川柳会（大阪）　中薗　清報

開戦日繰返さない子や孫に　紀雄
羊水にゆっくりひたり出番待つ　高鷲
顔見世や時の流れの矢のごとし　みどり
中村氏アフガン守る大スター　清
人間を長らえて来た使い減り　幹和
涅槃会のかすかに温い釈迦の息　あかり
ぬくぬくとパパのふところここち良い　千里
泥濘が冷えて湧き立つ霜柱　壽峰
冷え込んだ隙間を埋めるありがとう　耀一
足跡は真一文字に父の道　寿之
風を編むここから先は流れまい　かこ
メタセコイア巨大な錐が天を衝く　卓郎
風待ち港武士も女も潮を読む　涼子
限りある未来夢想の中を舞う　恵
丸焼けの拳再起のど根性　欣之

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

順不同だから笑って生きられる　(北)哲男
新年の空に幸せ深呼吸　稠民
また一つ年をとるどと溜息が　善輔
御節へと爺婆も選る丹波黒　剛
平均寿命越えたぞゴールもう間近　重男
終電車つい寝入り乗り過ごし　喜弘
豆選でダンス上手が落とされる　良子
毎日を電子レンジに助けられ　照代
守ってね作句へねがうぼけ防止　美智子
百薬の長と名付けて酒を飲む　(長)哲夫

京都塔の会　山田　葉子報

ライバルのパンチに闘志煮えたぎる　則彦
まだ寝てる脳へパンチの栓ひねる　保子
存分に感涙を吸う優勝旗　欣之
バージンロード父の涙が溢れそう　哲子
一粒の涙欠伸の所為にする　文代
顔を見てよちよちと来て愛らしい　ルイ子
野生の猫愛たっぷりで手懐ける　ふりこ
犬好きに野良犬までも寄ってくる　朝子
小さなくらしへ味わう小松菜のたいたん　昌乃
ラーメンをゆっくり味わう午前二時　弘之
昔の切符パチンパチンと音がした　美津子
自分の子へパンチを振るう親心　忠子
夫婦げんかパンチを受けるのは男　宏子
友が逝くパンチいっぱつ食らわせて　求芽
涙出るのはみんなが居なくなってから　葉子
世界一侍ジャパン男泣き　北舟
犬散歩思い出しては涙する　弘子
話かけたらジッと見つめる雀の子　多津子
スマホゲーム指がなついて離れない　万紗子
無料パス今や会釈で秋探す　悦子
便利だね女性は涙すぐ出せる　かずお
煩悩がパンチをくらい空をきる　弘委智
観て食べて読んで味わい深い秋　英旺

きゃらぼく川柳会（鳥取）　後藤　宏之報

わからないいつ勝ったのか負けたのか　治代
ルノワール裸婦像よりも痩せている　令位子
値上がりの令和の秋はどんとくる　菜々
ラグビーの金のやかんは何処いった　美緒
稲も色づき朝の散歩も友とはずみ　美草
おめでとう言って欲しくて電話する　紀の治
誰にでも公平に来る運不運　宣子
妖艶さ目を奪われる曼殊沙華　瑞枝
仕方なく見た目大人で生きている　俊久

人の句と並ぶと急に色褪せる　美穂
AIに誰が心を入れるのか　汪
メモをとるペンと静かな京の秋　ゆたか
すぎ去れば残暑恋しくなる私　恵子
いつものことで後ろ髪ひく犬の声　日枝子
こちらはと言えば黙って受話器置く　雨奇
何をして遊ぼう余白すこしある　千代
秋風に着たり脱いだり迷う服　多美子
夕焼けでこんがり焼けた海の肌　久直
笑われてやっと一人前になる　宏之

プラザ川柳（大阪）　穂口正子報

モリカケに桜参戦あせる安倍　正子
買おうかな白寿に備え宝くじ　千枝子
ハンサムが同窓会に来る噂　五月
夕方の値下げシールに目を配る　克三
掛け捨ての保険一つで家族葬　清乃
ノーマーク心中期するものがある　弘光
初孫のチンチン見事記念ホト　政夫
袖丈をうんとすぼめて甚平さん　園子
山歩き一期一会の「こんにちは」　悦夫
相談と上手く持ちかけ自慢やんか　和代
モリカケにサクラに民の目は光る　淳司
相談をうのみにしてる児童事故　修
空は父海は母です寿官さん　一彌

ほたる川柳同好会（大阪）　水野黒兎報

一年後の暮しの予想など立たぬ　桂子
後一曲ねだる拍手が鳴り止まぬ　正子
後ろ姿にほっこり滲むお人柄　則彦
リーダーの後ろ姿を信じ切る　一
後で後でと延ばし師走に大あわて　黒兎
人生の岐路右か左かさてどっち　奈津子
兼題にさてと瞑想ルーティーン　一弥
夫の留守さて夕食はフルコース　郁子
さて明日は覚悟を決めた脳ドック　順子
さてご飯蓋を開けたら炊けてない　信男
吹き消して歳を重ねる誕生日　純子
荒れた地に希望が燃えていた戦後　堅坊
トイザらスの森で迷っているサンタ　春代
振り返り昭和一桁浮き沈み　守啓

川柳塔鹿野みか月（鳥取）　福西茶子報

メタボでの朝のラッシュはダイエット　好幸
千鳥足そんな地鶏かこの俺も　草文
腹割った話お茶では間に合わぬ　弘子
繁栄の裏側にある温暖化　宏章
少々の酒では酔わぬ客が来た　孝子
午前二時目ざめ川柳とりかかる　大鮫
ラッシュ時子連れの移動危険です　弘六
少々の不満もあった婿養子　重忠
猫も杓子も美人に見える露天風呂　茶子
傘の骨少々どころか皆いびつ　孔美子
亡母の味塩少々が難しい　鈴
湯気立てて怒る元気はもう出ない　照彦
混浴を湯気がじゃまする露天風呂　文道
ベビーラッシュ黄泉への道もラッシュです　ゆり子
ごめんねに少々混ぜる嘘涙　綾子
少々は余るつもりで組む予算　実満
湯気の立つ噂もすぐに冷めていく　すみれ
遠からず墓地はラッシュになるだろう　盛桜
私もラッシュ年の瀬の頭　和子
世間では儲け話に詐欺ラッシュ　小鹿
ロマンスも餃子も湯気のあるうちに　完司
調子に乗るな少々釘を刺しておく　満
放し飼いしたら地鶏に化けよった　恒
漁がない船霊さんに御神酒注ぐ　蟹郎
少々の赤字はうめていけるかも　かおる
大江の郷鹿野地鶏がバーガーに　ゆたか
厨房の湯気が心を豊かにす　一平
味噌少々水で薄める二番汁　英子

あかつき川柳会（大阪）　磯島福貴子報

恋をして花を選びたくなる少年　多津子
十億円当てて今年は這いあがる　忍
良き友よポトリ訃報の寒椿　信二
中村医師に続け平和を受け継ぐ子　ひろ介
お花見に前夜祭まである不思議　博美
故障してやっと決着洗濯機　勇
COP25見事に咲いた花一輪　いさお
アフガンの空に輝く二つ星　清
安倍総理みごと詐欺師に利用され　(櫻)秀夫
老い迎えしきりに恋し祖母の声　(田)廣子
川柳のネタは尽きない安倍政治　千鶴子
「核禁」のリーダーになれ被爆国　九条男
京アニメ無念怒りの献花台　壽峰
枯葉舞う夜寒しきりに母のこと　ひろ子

まだ噛んでいる昼めしのこてっちゃん　一筒
感謝の念と後悔しきり喪のハガキ　満知子
来年は見ごとな花をオリ・パラで　万作
噺家に心底ほれた春団治　己智子
米・朝の話コロコロ沼の底　堅坊
ひとしきり泣いて悲しみから脱皮　朝子
核兵器教皇縁を切れとだけ　ダン吉
底力まだまだ出せる夫です　ばっは
十六の少女地球の救世主　里子
腹の底から笑いたい除夜の鐘　(立)信子
今日という花を毎日咲かせたい　保州
さざんかに不倫の罪をきせる唄　克己
打ーちまひょ大阪締めで干支仕舞い　一志
酒絶てとしきりに妻の目が光る　善之
決着を付けると言って家を出る　(松)秀夫
我慢することにも慣れた靴の底　茶助
ベロ出してマルチ商法加勢する　鮎子
寝られへん夜中手洗い分刻み　(寺)恵美子
どないして逃げようかしら花見の会　(川)武
海の底プラスチックの雪しきり　みつ江
葬儀の最中しきりに遺産知りたがる　敏子

川柳塔さかい（大阪）　内藤　憲彦報

手の届く位置に目標置いておく　禮子
先輩を目標にした若い頃　廣子
米寿まで生きたい夫支えます　世紀子
抜擢のポストに酔えるのは暫し　玄也
プロポーズした夜は酔っておりました　いさお
あと何度酔うだろ満開の桜　ゆみ子
酔うていたのでなんて可愛い嘘をつく　扶美代
酔う前に貸した千円取り返す　憲彦
深酒の夫にパンチ夢の中　輝子
第九の歌声迫力で酔わせる　満知子
成功に酔う暇もない立志伝　憲
妻との暮らし不満などあるはずがない　宏造
退屈はしないあなたがいる限り　雅美
妻で嫁母で女で悔いが無い　ひろ子
難題を解いてゆるりと入る風呂　佳子
朝の水じわっと満ちてくる気力　敏治
まあええかこれが私の充実度　(綾)清
持たされた財布諭吉が詰まってる　舞夢
仕事おもろい家族仲良い酒旨い　としお
残しては死ねない人と酔うている　瑠美子
ルミナリエ蝶とび立って帰らない　みつこ
花よりも心を酔わす彩紅葉　妙子
酔う程に粋に都々逸節冴える　光雄
一杯の酒で酔います喋ります　志津子
酔うほどに母が恋しい三回忌　(向)清
焼けた肌ハワイでバイトタフな彼　洋一
やり切った筈でも悔いはたんとある　さくら
やり過ごしはたと気付いて立ち止まる　素頓馬
止めてよし二十歳そこらで貯めるクセ　富夫
約束ですと花が咲きます田んぼ道　五月
やりくりに薄氷を踏む食べ盛り　雅明
病む身には歯痒いことの絶え間なく　愿
やるせない二十歳の恋よため息よ　進
約束を果たす小指が頼もしい　唯教
痩せ我慢歯の根も合わぬ滝の下　時雄

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

五人産んだ腰は国民栄誉賞　完司
そーれ見ろ夏の五輪は腰砕け　次男
腰かがむ以前の姿今はなく　さちこ
腰曲り身長計る医者苦労　日出子
御無沙汰の友のくらしを知る賀状　風露
新年の度に地獄が近くなる　石花菜
新年は休め財布の肩を揉む　麦青
新年の飾り年々小さくなり　萩江
玄関に横綱のよう藁飾り　大鯰
年明けに歓喜と寒気やって来た　祐子
新年の八十路風吹く老い二人　恭子
新年が年末ジャンボ夢で明け　明友
お父さんもっと稼がにゃ餓死するぞ　紀美恵
親は子へもっと出来るとハッパかけ　玲子
戦後日本もっともっとで伸びてきた　鬼一
逝った妻もっと生きてて欲しかった　重忠
もっと早く検査を受けてほしかった　龍枝
もっともっと自分らしく生きていこ　美知江
世界中もっと旅して巡りたい　酔芙蓉
信じ合うメガネにルーペ重ねても　雄大
我が道を信じて歩き蹴躓く　祐子
自分以外信じては駄目世の中は　由紀子
病院の薬信じて飲んでいる　智恵子
金持ちは何より金を信じてる　けいこ
助けてね貴方の言葉信じてる　隆昌
ちょっとだけ神様信じ初詣で　瑞子
切符無しテレビ見るだけ五輪年　茂夫
照彦

川柳藤井寺（大阪）　太田扶美代報

とぼけ顔重大事がよけていく　シルク
たんぽぽは吾子の最初のプレゼント　フジ子
孫誕生ご先祖からのプレゼント　真澄
削除キー押しても消えないおもかげが　シマ子
サンタさん靴下ひとつ増えました　ばっは
あれこれを削除子歳のスタートへ　みつこ
以下同文他に言い方ないですか　一歩
アフガンへ足跡残す中村師　信二
あの大統領には嘘発見器を　まつお
ありがとうの言葉に妻が返す笑み　久仁雄
元カレのアドレス消してふっ切れた　いさお
とぼけてる父を演じるほかはなし　瑠美子
不確かな事は忘れた事にする　喜代子
都合よくとぼけて生きる処世術　俶子
とぼけても証拠写真がホラあなた　ちづる
ドラえもんポケットをユニセフに贈る　みつ江
とぼけても人がええからすぐばれる　進
応援に日向子スマイルプレゼント　一文
削除した記憶を埋めていくパズル　キーキー
知らんぷりしつつ薄目で探ってる　婦美枝
反対の一声削除されている　ダン吉
人類愛とぼけて悟すチャップリン　ひろ子
おとぼけはこれも手のうち世渡りに　正義
句読点とぼけた場所に打ってある　扶美代

長柳会（大阪）　辻村ヒロ報

ときめきも淋しさもある妻の留守　ヒロ
一歩前へトイレの汚れに泣かされる　佳子
雪見酒つい飲み過ぎて医者通い　規之
腹ぺこに耐えて頑張るダイエット　たけし
喜寿傘寿吟行ツアー紅葉狩り　靖博
デート前人気スポット下調べ　秀子
あの出会い思い返せば今に在り　千代
欲望がもしも失せれば朽ち果てる　洋二
おいお前名前呼ばれず五〇年　由子
エイヤーの投句が天になる皮肉　敬二
徘徊に備えて持たす迷子札　隆明
父母の情手元足元照らす愛　登美子
極楽への道と時々善を積む　ふみ
縁日で買った金魚が鯉になる　正博
子と孫に期待と注目無理やった　弘美
エレベーター最後に乗ってブザー鳴る　孝
背後から感じる視線恋かしら　正美
生卵黄色いだけで胸を張る　由夏
二千万タンスの奥で出番待つ　ともこ
立場上知らぬ振りする義理がある　和子
注目浴びると足を掬われる　隆彦
人気だった進次郎だが化石賞　淳司
どんな時も備えがあれば憂いなし　幸子
冬晴の明日を信じる退院日　旅人
いつの日か国境のない世界地図　直樹
この星の未来危惧するグレタの眼　福子

六甲川柳会（兵庫）　奥澤洋次郎報

説明のつかないくらい君が好き　ひとみ
お互いに愛するふりで五十年　和郎
もう一度亡夫と喰べたい晩日そば　弘華
安全な距離を保っている恋慕　盛夫
我が家では風呂飯寝るを飼っている武　彦
脱いだズボン眼鏡になっておいてある　廣光
年末だ体と気持発破かけ　芳江
税金をかすめておごる花見会　洋次郎
久し振り川柳寄ってカラオケに　保雄
かすむ目に程良く写る世の流れ　千賀子
それならばめだか六甲ワンチーム　ひろし
クールだと言われるけれど無関心　崇史
大晦日入歯念入り掃除する　浩司
古稀過ぎて暑さ寒さも図書館で　弘
更新で認知教わる教習所　恭三
ノーベル賞の名誉と不名誉化石賞　邦子
被災地にエールを送るルミナリエ　美穂
進歩する家電がずぼら助長する　博史
若造り歩く姿は隠せない　敏夫
全没の御払いに行くルミナリエ　義明
装えば紳士に見えぬこともない　利子
装い新た令和を刻む花時計　和宏
嘘のない無骨楷書の手で握手　美恵子
寄せ鍋の具は賑やかだ一人鍋　稔
吉もあり凶もあったよ大晦日　道子
装って自分を変えて勝負する　光久
独身のずぼらへ妻と言う天使　正彦
哲学を覚えロボット狂い出す　狸月

西宮北口川柳会（兵庫）　緒方美津子報

哲子

今が旬僕と貴女と紅葉と　野薫
もみじの手可愛かったよあの頃は　敦子
丈夫そう暇そうだねと役が来る　恭子
紅葉も今が盛りの喜寿の秋　一徳
日本の行く末見てる竜馬像　宏造
末長く言った祝辞が仇となる　新録
ネジひとつ落ちて人生狂い出す　野鶴
人生のキリトリ線で立往生　千賀子
末期ガン告げられ絆強くなる　利子
世の中の混沌消えず除夜の鐘　盛夫
末席の愚痴がネットで炎上す　宣子
ユニークといつもケナされています　勝弘
秘めごとを守り通して紅葉散る　武彦
煩悩で狂わぬように鐘が鳴る　伯備
山火事がすごいもみじの湯治宿　健彦
末代に残すものなど無い身丈　洋次郎
至極ノーマルというユニークな彼　靖夫
嘘やないあれは本当に冗談や　伸
孫五人みんな見上げてお年玉　徹
行く末は考えてない花すすき　いわゑ
紅葉色づき師走正月駆け足で　浩司
来年は末広がりとお告げあり　紀華
自分流貫く気力蕪の白　弘子
土の中密談すすむ春の草　弘委智
もみじの手銃握るなと祈る母　忠夫
八十路坂終末医療考える　敏夫
どうしたのなんて私もわからない　ひとみ
大阪弁の転校生は人気者　りこ
もみじの手入園しても繋いでね　邦男
末っ子の髭は兄よりなお立派　富次
私を狂わせたのはあ・な・たなの　光久
恋狂い炎の中を蝶が舞う　美津子
核持てば狂いたくなる地球人　正彦
ええやっちゃなあまた逢おうなあと焼香　和宏

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

跳ねるのは百一歳と決めてある　青春
紙おむつしてまでのぼる坂がある　盛桜
日本一だと鳥取のカニ跳ね上がる　くにこ
喉仏大きい孫に男見る　ゆたか
太陽が跳ねてわたしを光らせる　楓花
跳ねあがる税は年寄り痛めつけ　風露
念仏が広い宇宙へ旅をする　麦青
八十路坂三段跳びでひょいひょいと　石花菜
念仏唱えそっと眺める診断書　みちを
あの人のウィルス貰い喉不調　余光
いざ行かん仲間もみんな高齢者　幸子
念仏を理解しているのか木魚　正人
弟が私に念仏をとなえる　けいこ
満天がカバンの中で跳ねている　雄大
骨つぼの頭の上は喉仏　隆昌
恋のスイッチ切れた心へお念仏　厚子
念仏と思えば小言ありがたい　由紀子
念仏を唱えるうちに津波来た　熊四郎
喉元を過ぎてウォッカハイになる　七七
浴衣の金魚が飛び跳ねて夏祭り　モナカ
喉自慢全国が聞く俺の唄　のぼる
経本を念じて写し晩酌す　正男
俎板の北にてこずる料理人　道唱
念仏唱え車の落ちた谷覗く　重忠
幼な子がなむなむなむと手を合わす　鈴野
跳ねたいな百歳生きて月旅行　久子
乃木坂もケヤキ坂でも同じ顔　清明
先生のイジメ子供にどう言おう　希楽良
窮屈な田舎飛び出し蝶になる　コスモス
念仏を聞き飽きている奈良の鹿　規雄
酒場への道は楽しい下り坂　完司

ふうもん吟社（鳥取）　山下　凱柳報

口出しは無用の位置に居る私　敏夫
中秋の名月見惚れ何もせず　大
戦のがれた昭和の街がまだ残る　節子
読書の秋十分持たず夢心地　凱柳
不自由もあって人間らしくなる　一粋
ドーピングドラマ出る前検査する　勲章
貧しくは無いけど金はありません　修
即位パレード令和の希望ふくらます　房江
紅葉狩り隣の庭で我慢する　回春子
悲の面も情け容赦もなく下りる　妻子
花園歩く両手が羽根に変わるまで　とも湖
そして冬恋は平行線のまま　みゆき
足元がぐらつく愛が欲しくって　一瑤
無言でも威厳漂う亡父でした　亨
土壇場で無口見事な啖呵きる　毅
ヘソ曲げた妻の無言にカップ酒　茶人
朝帰り妻は無言で仁王立ち　隆浩
よう喋る姑が無言何かある　蟹郎

九条は無言ぴくともたじろがぬ　金祥
廃屋は無口誰を待つのか門構え　千代
私は無言でいればいい女　天翔
爆弾を抱いた無言が隅に居る　美恵子
無言でいい哀しい時は手を握る　幸子
いつもそううなずくだけの父でした　真理子
返事来た動揺押さえ封を切る　紀美江
何事も動揺見せぬ百歳だ　茂登子
再会に心が躍る火種もつ　振作
言い訳にコップの水が揺れている　宏章
真っ直ぐな瞳に本音見抜かれる　無限
パスワード時に忖度することも　善平
パスワードなくてもすぐに友になる　紫陽
夫婦愛阿吽の呼吸パスワード　一平
パスワード開かないまま閉じた恋　八千代

富柳会（大阪）　山野　寿之報

秋まつり重荷になった過疎の村　よりこ
捕まった蟹は無念の泡を吹く　和子
耳許の火種は人を弄ぶ　恵
踏まれてもまた踏まれても立ち上がる　武人
褌の漢祭りは火の祭り　寿之
ひそひそと内緒話に雪が降る　一文
坪庭の枯葉の朱色秋風情　高鷲
静謐の庭に轟く鹿威し　壽峰
義太夫も場末じゃ唸る馬の足　正治
群れてるが一色守る彼岸花　伸雄
どんぐりの在り処ひそひそ森のリス　田鶴子
陸奥の訛纏うてきた林檎　欣之
一年中百花繚乱妻の庭　清
百歳を少し残して潔く　文重
黒豆は母が残した鍋で炊く　由夏
花吹雪行方ゆだねる花吹雪　エミ
景色見ず喋り疲れて戻る旅　きよみ
朝市の声声はずむ白い息　隆允
お化粧か仮装か聞かれショックな娘　常男
じわじわと今朝の寒さを丸く着る　良恵
何気ない事も出来ぬと十指泣く　安希子
懐かしさの妻に良く似た十三夜　晴美
石庭に黙して並び無我の境　彦次
わたくしの生き様を問う寒の月　あかり

川柳塔まつえ吟社（島根）　相見　柳歩報

ブラジャーを赤に今夜は魔女になる　寿代
魔女なんかお化粧とればスッテンテン　久絵
夕暮れに魔女が出そうな雲の色　邦代
カレーパンの中で国歌が腐りだす　芳山
本日も歌を求めてショッピング　とも子
どっちでも歌える軍歌・反戦歌　みちを
AIのひばりが唄うみだれ髪　徳利
燃えあがる恋歌月は聞き惚れる　左余
おもてなしどじょう料理に安来節　雪代
また人を愛したくなる風の歌　瑞人
伸び縮みしながら今日を作っている　美智子
読経中頭に浮かぶ一行詩　モナカ
今夜こそふたりで作る物語　柳歩
パンジーの色選んでる冬日和　知恵子
選良も篩にかける週刊誌　豊仙
選んだにとっととあの世行くなんて　(内)幸子
主治医から許されている酒二合　弘充

川柳花の輪（大阪）　岡本　薫報

あせっても時は同じに流れてる　笑子
楽しいから笑う笑うからなお楽し　泰子
百歳へ生き様決めて準備する　信子
終活で墓と斎場決めてある　正太郎
四十過ぎ自立せぬ子にあせる親　みちる
上手下手共に楽しむ川柳を　やすの
サックスの音高らかに舞う夜空　亜成
三分で化粧すませる妻が好き　薫

豊中もくせい川柳会（大阪）　初代　正彦報

お礼状の手書きにほんわかと温み　公子
マドンナは記憶の中にいつもいる　英旺
インタビュー胸張っている赤い羽根　肇
ひとりもの水屋の皿は乾ききる　求芽
忘れないピカドンのこと次世代へ　英三
乾いてるうつろな瞳どこを見る　多美子
ともかくは生きて楽しむことにする　健二
父の眼に映る郷愁赤とんぼ　真理子
記憶にはございませんと身を躱す　武彦
何よりもまずは挨拶して欲しい　時子
禁酒して乾く五感の軋む音　歌留多
泣く笑う笑わない男達のパレード　きらり
年金日前は乾いている財布　敏治
性別に「その他」の欄がいる時代　堅坊
ともかくもしがらみ捨てて風と旅　野鶴

他人とは違う私だけの夢　美智代
年末の恒例第九他を凌ぐ　弘委智
記憶力日日減退にあまた書く　(岩)玲子
おしゃべりな私の口はよく乾く　こみつ
ともかくも今日も貴女は美しい　見清
風鈴に乾いた心癒される　則彦
京の町四角に歩き上り下り　黒兎
他意はないとさらり笑顔で躱される　美籠
まだ言うか私は関与してません　勝弘
二日目の洗濯物を干す冬日　耕治
からからの老躯に落葉まとい付く　(福)正彦
かくれんぼうみんな遠くへ行きました　千鶴子
ひとり居の心が乾く夜の底　(永)玲子
親はもう居ない夜中に爪を切る　葉子
酒好きは他人のような気がしない　宏造
次世代へともかく種を撒いておく　(初)正彦

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

ハーネスを着ければスイッチが入る　日出男
政治家の謝罪会見聞き飽きた　保州
ああ平和新米炊けるいい匂い　俶子
許されて許す絆の温かさ　起世子
日常の暮らしに花のアクセント　宏枝
結局はカネの話で行き詰まる　准一
カラオケで顔まで似せてヒーローに　よしこ
ゲーム差に一喜一憂する拳　富香
百歳の笑顔平和のありったけ　幹子
失敗もユーモアにする後日談　敏照
イス取りゲーム椅子に名前が書いてある　知香
十八番をば先に歌われどうしよう　康則
平和に慣れ平和の良さを疎かに　まき
カラオケは一家団欒安上がり　一雄
過労死のこと考えず働いた　彦弘
身の丈に咲いて平和な路地育ち　純子
平和とはこれだ三食昼寝つき　当代
よう働いた笑い話になる夕餉　美枝子
朝日から夕日にタッチして平和　八重子
陣取りゲーム地球に線を引きたがる　和子
カラオケのマイク曲がった腰のばす　ひろ子
そして今自分自身へ振るタクト　菜摘
葱刻む軽いリズムにある平和　あき子
妙な勘働く妻にしばられる　明子
ラブゲーム男が下手な芝居する　智三
平成から平和のバトン継ぐ令和　昇
ぽつぽつの日を積み重ね蟻の道　昭枝
魂ふたつ行き交う隙間あけておく　理恵
少年の心を盗むスマホ漬け　眞智子
負け組へ応援したくなるゲーム　悦男
行く末はどうあろうとも今一人　かず子
世界中椅子取りゲームまだ盛り　俊介
のどじまんカラオケ成果カネ三つ　一歩
鍬の柄が作ったまめは土の中　エイ
ゆるキャラも一役担う郷土愛　千鶴

川柳ねやがわ(大阪)　籠島　恵子報

遅咲きのバラが掴んだちさい幸　寿子
介護の手助けが足りぬ長寿国　祥昭
その時は神の手になるボランティア　弘一
豊穣の稲架立ち並ぶ里の秋　壽峰
白い骨なるまで修業積み重ね　高鷲
喪中のハガキ悲しく読んでいる　ルイ子
被災地のりんごを選って買ってくる　茜
傍に居るだけで助かる病める時　賢子
神様の決定権のある寿命　かすみ
売上の胸算用や仕舞風呂　千賀
またひとつ老いを迎えるお正月　朝子
古里の匂いを消した墓終い　信子
手助けがいる筈老母の十二月　麗
知恵を出し売上増えて努力賞　さち子
孫先生パソコン指導高く付き　尚世
気が多くだからあちこち不義理する　高志
美しき言の葉迎え句が踊る　弘委智
もう少しこの世で馬鹿を演じます　郁夫
厚化粧落とし他人になりすます　仁
直球の愛に空振りしてしまう　和織
死神よお前の都合で迎えるな　亜成
シンプルがベスト地のまま演じきる　修
恋ごころ南天の実の雪化粧　鈍甲
金婚の杖は要らぬが欲しい腕　博泉
決定の時には父は居なかった　恵子

翠　洋　会(大阪)　大久保眞澄報

背負いきれぬ重荷になってきた夫　富子
やっかいな荷物にだけはなるまいぞ　理恵

ぜい肉が重荷になるね寒い冬　弘美
子等の為重荷にならぬ様元気　舞夢
孫と住み子守するのは荷が重い　善之
介護の荷おろして気付いたらなさ　敬子
道草好きで夕陽とジャンケンポン　弘子
道草を食った分だけ子は太る　蕉子
人生の道草と知る回り道　げんえい
道草の訳は誰にも内緒です　志華子
てるてる坊主逆さに吊るし雨を待つ　和夫
重箱にジンクス詰めて出来上がり　義
ジンクスに振りまわされている弱気　大子
連勝に縁起かついだ無精髭　恭昌
ジンクスを避けると吹っ切れた迷い　満作
タピオカも飲まないままに冬に入る　楓楽
アカンもんアカンと言ってなぜアカン　行久
生き様の見事は逝き方も見事　希久子
痛み知る仲間と作る輪が温い　すみ子
空腹を満たすまあるい握り飯　千枝子
つむじ曲がりをからかっているへそ曲がり　眞澄
ひざ腰と痛みを友に出かけます　廣子
反発を防ぎきれない母の悔い　宣子
やがて来る春を匂わす除夜の鐘　昭

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

逝ったひとへの傾斜にいまも悔いはない　あきこ
家事全般子供に任せて自由の身　しず子
後のこと任せて星に帰ります　ふさゑ
アタッシュケースそっと大事な紙バンツ　輝子

薬から鞄に入れる旅仕度　益子
麻薬犬旅行鞄を嗅ぎ分ける　秀夫
行く末の重さを知らぬランドセル　信二
汗しみる仕事の鞄捨て切れず　康信
鞄持ちいつの間にやら大社長　笑司
食後すぐ禁煙パイポ締めに吸う　雲水
諦めて降参なんかするもんか　規予子
締め切りがせまりペン先馬鹿力　大輔
なるようにしかなりません酒を飲む　小雪
鋭さの影に悲しい過去を引く　多喜子
鋭い目刑事と犯人との区別無理　タカ子
鋭角に刺しても糠の安倍暖簾　洋二
ドキュメント番組現実を攻める　信子
三才児鋭い問にうろたえる　隆昭
教皇の鋭い口調核はノー　ダン吉
つきささるただ鋭角に冬の月　みつ江
アンテナを鋭くたてている寡黙　恵子
セールスにもってこいだねこの口調　和美
起きるのは目覚し鳴って十分後　義泰
急ピッチ被災地先に頼みます　恭子
フルマラソンテンポを上げる後二キロ　英夫
人間が地球のテンポ狂わせる　喜代志
テンポよい喋りで人を惹き付ける　珠子

川柳大阪　山﨑珠生報

木の葉散るしみじみグラス傾ける　昌代
心機一転私のグラス替えてみる　芳香
バカラのグラス割ってはじめて価値を知る　福貴子

今日の悔いグラスに沈めあおる酒　俊雄
江戸切子で冷酒飲んだら超旨い　(北)賢子
ボス猿の背に哀愁を垣間見る　(小)雅美
孫悟空楽しい話為になる　(田)廣子
猿真似か中身の薄い進次郎　美世子
三猿を通す明治の母でした　志津子
猿真似のうまい男に芯がない　朝子
見ぬ聞かぬモノ言わずして会議終え　珠生
軒下で甘さを競う吊るし柿　司
寂しさが匂う老母の空元気　(田)ゆみ子
硝煙の匂いが消える日はいつか　一歩
金木犀よりも赤ちゃんの匂い　(鈴)いさお
ドリンクを呑めば春の火の匂い　弥生
良い匂い漂う薔薇の落とし穴　堅坊
雑談もすんだし会議始めよか　まつお
雑談も心の糧と聞いておく　(今)万紗子

城北川柳会（大阪）　近藤正報

中東のお国事情が暴挙生む　福貴子
たらればでなかなか酔えぬ独り酒　博
拉致の子を命あるうち抱きしめる　賢子
人生は一生修業だと思う　朝子
老いの日日今日も変わらぬ日を望む　堅坊
繁雑な謎が謎呼ぶヒチコック　榮子
雪しんしん殊更むなし仮設の灯　志華子
ひとり旅回顧の道に雪しきり　寛昭
振り向けば嵐のようでした一年　満知子
地吹雪が叫び津軽は寝正月　直樹

騙し絵と気づかず買ったジャンボくじ　郁夫
肩に雪父の背中はでかかった　廣光
わが妻よボクより先に逝かないで　一歩
神様に祈願してから試験場　宣子
七色の薬を熟す日に三度　捷二
雪女を叩き起こして山眠る　北舟
安産を望む夫の百度石　肇
冠雪の遥かな峰に夢を見る　高志
ごたごたが嫌でポツンと一軒家　洋志
災害の酷さを隠し雪化粧　俊雄
ごちゃごちゃは忘れ呑もうよ純米酒　武彦
雪の山陰おいでおいでと招く蟹　克己
繁雑なあなたにもらったストレス　千賀
高望みせず身の丈の幸せを　杁香
秋霖の見知らぬ人の傘と触れ　弘委智
普段着の心の中を開かせる　正彦
羽ばたいた孫に未来と託す夢　満作
雪解けへ芽吹く春待つ蕗の薹　野鶴
ええかげん辞めてほしいなエコヒイキ　勝弘
新年に期するものありいま傘寿　正

川柳さんだ（兵庫）　**村田　博報**

爺ちゃんに出世払いで借りる金　哲男
貸し借りはするなと母に諭される　順子
借りた恩きっと返すと日記書く　千賀子
カネ余り借りる企業の頭が高い　徹
貸してくれ返さなくても良い金を　洋一
借りたのじゃないから返さない免許　万彩
通り雨やさしい傘を借りました　ひとみ
マイブランドちくちく縫ったあっぱっぱ　美津子
信楽焼で毎朝お茶を飲んでます　哲夫
元カレのブランド時計高く売る　真桜子
錦織に着せてユニクロブランドに　好文
安ものも着こなす妻の良いセンス　優子
安い酒飲んで二日も酔うてはる　野薫
本当に美人になれば安いもの　修平
焼酎の湯割りで未来ふくらます　健二
低金利それでも預金する庶民　義徳
安いもの買う度思う作る人　堅坊
手術台安くしてよとよう言わん　廣光
クリスマスオールナイトでタマが添う　弘
プレゼント孫のサンタがもってくる　宣子
一年を振り返りつつ聖夜来る　恭子
わたくしも今日は天使になれるかな　ちあき
喜寿傘寿囲むケーキに笑皺　一子
仁義立て梅宮辰夫死出の旅　利尚
休肝日臨機応変型ですの　勝弘
私のためにショートステイに行く白寿　利子
汗まみれの金が出ていく年の暮れ　武彦
反発力の尾ひれ震わす活け造り　つな子
男かて耳に孔開け反抗期　正和
反発に備え鍛えるスクワット　美籠
逆ろうたら話が長くなりますよ　耕治
反発をしたのはいいが返り討ち　正彦
イヤイヤはすぐにおぼえたゼロ歳児　紀恵
反発の裏に自信の持論持つ　厚子
化石賞貰いNOとは言えぬ国　雅尚

やまと番傘川柳社
創立70周年記念川柳大会

日時　**2020年3月8日（日）**
午前11時開場
（昼食は各自でお済ませください）

場所　THE KASHIHARA
（旧橿原ロイヤルホテル）
橿原市久米町652—2
℡ 0744—28—6636
近鉄 橿原神宮前駅下車
東出口徒歩1分

事前投句
「美」阪本 高士 選
締切 2月10日（月）必着
出席者に限る

宿題
「作る」（古川 洋子 選　笹倉 良一 選）
「赤い」（藤本 鈴菜 選　大楠 紀子 選）
「音」（片岡 加代 選　徳永 政二 選）
「支える」（小島 蘭幸 選　森中恵美子 選）

出句
各題1句　締切 12時
事前投句は所定の用紙、または葉書でお願いします。

会費　2000円（記念品・発表誌呈）
懇親宴　8000円（17時～19時予定）
問合せ先　阪本きりり
634—0077　橿原市南八木町
1—4—115—901
℡ 090—1479—6025

主催　**やまと番傘川柳社**

第44回 全日本川柳2020年秋田大会

日　時　2020年6月14日（日）午前9時開場
会　場　秋田キャッスルホテル
〒010－0001　秋田市中通1－3－5
TEL018（834）1141
交通機関　JR「秋田駅」西口下車、徒歩10分
JR「秋田駅」西口下車、バス「木内前」下車徒歩1分
主　催　一般社団法人　全日本川柳協会・全日本川柳秋田大会実行委員会
後　援　文化庁・秋田県・秋田県教育委員会・秋田市・秋田市教育委員会・秋田県芸術文化協会・秋田魁新報社

宿題　第一部　4月15日締切（当日消印有効）
事前投句　一　般（高校生も含む）部門
「　田　」山口まもる　選　「重　い」新家　完司　選
「拓　く」安藤　波瑠　選　「あふれる」大楠　紀子　選
事前投句　ジュニア（小・中学生）部門
「発　見」仁多見千絵　選　「　駅　」大場　孔晶　選
「ポケット」竹崎たかひろ　選
専用用紙のない方は2×16cmの句箋一枚に一句を記入、各題二句無記名。
封筒の裏面に住所、氏名明記。
投句料　一、〇〇〇円（定額小為替・現金書留）を同封して左記宛に郵送または郵便振替口座へ送金のこと（当日消印有効）。
小中高生は投句料無料。
投句先　〒530－0041　大阪市北区天神橋2丁目北1－11
ステップイン南森町905
一般社団法人　全日本川柳協会　宛
TEL06（6352）2210　FAX06（6352）2433
郵便振替口座　00970－9－3575

講　演　「ことばの力　秋田の魅力」　講師　浅　利　香津代　様
宿題　第二部（当日投句・11時締切）
「歌　う」大石　一粋　選　「好奇心」矢沢　和女選
「発　見」いしがみ鉄　選　各題二句、当日配布の句箋に記入。
第二次選者　赤井　花城　田中　新一　安藤　紀楽
高瀬　霜石　鈴木　順子
参加費他　四、〇〇〇円
（参加費二、〇〇〇円・昼食、記念品二、〇〇〇円）
表　彰　(1)文部科学大臣賞　(2)参議院議長賞　(3)川柳大賞
(4)大会賞　(5)ジュニア部門は賞状とメダル

全日本川柳秋田大会実行委員長　長谷川　酔月

〈表彰式典・懇親会ご案内〉

◎表彰式典＝2020年6月14日（土）13時から
川柳文学賞・功労者・大会連続参加者・令和柳多留入賞者
大会連続参加者の表彰は自己申告のため日川協事務局まで申請してください。
◎懇　親　会＝表彰式典・大会終了後、同一会場で
参加費　八、〇〇〇円（会食・アトラクション）
大会・懇親会のお問い合わせ先
全日本川柳秋田大会実行委員会事務局　宛
〒010－0953　秋田市山王中園町10－17シーライトマンション306
TEL090（2973）8871・FAX018（802）0870　菅原浩洋方
TEL090（9031）0687・FAX018（832）1900　藤咲子方
大会・懇親会の参加費の送金先　4月15日締切
郵便振替口座番号　02230－9－127870
全日本川柳秋田大会実行委員会

〈宿　泊　の　ご　案　内〉

（一泊朝食付き・お一人様／税金・サービス料込）
1　秋田キャッスルホテル
（秋田市中通1・3・5）シングル　10，000円
2　イーホテル秋田
（秋田市大町2・2・12）シングル　8，800円
3　ホテルパールシティ秋田大町
（秋田市大町2・6・25）シングル　8，500円
4　ホテルパールシティ秋田川反
（秋田市大町3・4・18）シングル　8，500円
※記載の1～4のホテルが全て満室の場合は、ご相談の上、記載されていないホテルをご案内させていただく場合もございます。
※取消料に関しては、宿泊のご案内にてご確認をお願いいたします。
宿泊の申し込み、問い合わせ先
東武トップツアーズ株式会社秋田支店　（担当）横山・岩浪・中島
〒010・0951　秋田市山王2・1・40　田口ビル1F
TEL018・866・0109　FAX018・866・0177
宿泊のお申し込みは専用の申込用紙にご記入の上、郵送またはFAXにてお申し込みください。

句会名	日時と題	会場と投句先
あかつき川柳会	14日(金) 14時締切 あれこれ・星・気配・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第１ビル２Ｆ） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
岸和田川柳会	15日(土) 14時締切 文字・踏む・ほのぼの・シグナル	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ５分 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19　中岡香代
川柳藤井寺	16日(日) 14時締切 アドバイス・病院・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
豊中もくせい川柳会	17日(月) 13時50分締切 パワー・刻む・いよいよ 自由吟	豊中市立中央公民館　3Ｆ 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩５分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳さんだ	18日(火) 13時30分締切 愛用・薄い・ケア・迷う 自由吟	キッピーモール（JR三田駅前） 〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳たちばな	19日(水) 13時45分締切 席題・ちゃっかり・たたむ 自由吟	立花北生涯学習プラザ(尼崎市塚口町3-39-7) 06-6422-6741 阪急塚口駅北へ 10 分 〒 661-0953 尼崎市東園田町 3－49－5　藤井宏造
川柳塔すみよし	22日(土) 14時15分締切 油・磨く・オーラ	住吉区役所内　住吉公民館　2Ｆ 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山三幸川柳会	22日(土) 13時15分締切 梅・積む・いつも	和歌山商工会議所　4階　第３会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳ねやがわ	23日(日) 14時締切 席題・宿題・化粧・長生き 自由吟	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅から徒歩15分 または京阪バス市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
はびきの市民川柳会	23日(日) 14時締切 荒波・減る・さらさら・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳ふうもん吟社	23日(日) 13時から 自由吟・揉める・瀬戸際・風景 席題	県民ふれあい会館　4Ｆ　鳥取市扇町 21 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
南大阪川柳会	24日(月) 13時締切 靴・数える・グラグラ・雑詠	大阪市立住まい情報センター　5Ｆ　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901　松岡　篤
京都塔の会	休　会	以後開催は未定 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70－16　桝本宏子
川柳塔みちのく	29日(土) 17時締切 改・読む・苦い・意見	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　TEL 0172-36-8605

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

2月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北 川柳会	1日(土) 14時締切 変わる・ちょくちょく・白紙 自由吟	旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	1日(土) 14時締切 目・とことん	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0064　富田林市不動ヶ丘8-31　山野寿之
倉吉 川柳会	1日(土) 14時締切 あれこれ・文字・振り返る 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟社	1日(土) 13時30分締切 湧く・集める・意思 うっかり	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
川柳 あまがさき	4日(火) 14時締切 才能・土・ゆったり・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
川柳塔 な　ら	5日(水) 14時締切 世界・縮む・ぽちぽち	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4　近鉄「奈良」駅④番出口　徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　安土理恵
川柳大阪	8日(土) 14時締切 あかり・マッチ・甘い	メトロ・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
六甲 川柳会	8日(土) 14時締切 席題・サイズ・激しい なだめる・自由吟	六甲道勤労市民センター　5F　E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔 わかやま 吟社	8日(土) 14時10分締切 兼　題＝覚える・寒・ゲスト 課題吟＝所	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁３６ 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
川柳塔 打吹	8日(土) 13時30分締切 漫画・抱く・ころころ・席題	倉吉市上灘町９　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民 川柳会	9日(日) 14時締切 余寒・おそらく・急ぐ・雑詠	渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩５分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
西宮北口 川柳会	10日(月) 14時締切 ふるえる・途中・ぬけぬけ 自由吟	西宮市立中央公民館　6F　講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830　福田正彦
ほたる 川柳 同好会	11日(火) 13時30分締切 道・叫ぶ・いらいら	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔 さかい	11日(火) 14時締切 去る・石・折句：き・た・み	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から２分 〒599-8103 堺市東区菩提町5－171　矢倉五月

柳界展望

▽訂正とお詫び△

○1月号、P116 2段目29行目、天位　平井美智子さんの句　遣り場のない怒りに燃えたペンの先→**桜へと続く命を抱いている**

○1月号、P77下段18行目、板•野澄子→坂•野澄子。P97中段2行目、どの局も特番を酌•む即位式→どの局も特番を組•む即位式。

▽新誌友紹介△

尼崎市　**大林れい香**
紹介者　藤井　宏造

大阪市　**島田　明美**
紹介者　平井美智子

笠岡市　**水野　文恵**
紹介者　小島　蘭幸

尾道市　**小川　道子**
紹介者　小島　蘭幸

広島市　**常國　喜好**
紹介者　小島　蘭幸

井原市　**貞光美代子**
紹介者　小島　蘭幸

黒石市　**石澤はる子**
紹介者　木本　朱夏

西脇市　**生田　頼夫**

常任理事会＝1月7日
①「第26回川柳塔まつり骨子策定②「第8回誌上大会」取組について③定例確認事項。
次回常任理事会2月6日㈭AM10時～

新同人紹介

磯本洋一（いそもと・よういち）

―みつこ・いさお・武彦推薦

季刊『川柳展望』

A5版、１５２頁。誌代 ４，９６０円（年間）
☆見本誌進呈いたします。

〒567-0009　茨木市山手台４－６－３－１０１
TEL　０７２－６４９－５２２６
FAX　０７２－６４９－５２２６
川柳展望社

寒中お見舞申し上げます

川柳塔まつえ吟社

主幹 石橋芳山

同人一同

事務局　〒690-0001　松江市東朝日町206－7
TEL. 090－2003－5846　石橋芳山方

寒中お見舞申し上げます

川柳ねやがわ

会員一同

編集後記

★北国になお北のあり流氷よ　薫風

★「こんにちは新同人です」を特集しました。『麻生路郎読本』の語録から心にしみる言葉を見つけました。「柳友よ川柳の畑を耕す男／一本の燐寸が燃えつくすまでに／寒さや空腹がせまって来る迄に／わたしたちは／一句を遺しておかねばならぬ」。皆さんご一緒に川柳の畑を耕しましょう。

★『幸福な監視国家・中国』梶谷懐・高口康太共著NHK出版）によれば、怒涛の如くAI化の進む中国で政府が国民の一人一人に点数をつける、言わば格付けをするという。中国全土に監視カメラは2億台設置されており（2020年には6億台に）、超監視社会が形成されつつある。政府がその気になれば特定の個人の1日の行動を把握することも可能とか。ジョージ・オーウェルの小説『1984年』のような恐ろしい世界が始まりそうな予感に怯える。

★著書はいう。「本書は『幸福な監視社会』の謎を解き明かすことを課題としています。この謎が解き明かされたとき、驚くべき中国の監視社会はどこか別世界の現象ではなく、日本が今後直面する問題だと明らかになるはずです」と。私がこの本を買ったことも、昨日誰に会ったかも、趣味が川柳であることも当局に把握される、そんな時代が来るとしたら…。ぞわっと首筋が寒くなる。

★12月15日。第38回没句供養に参加。会場には小さな祭壇が設置され没句の束が山積みされている。袈裟をつけた会員と思しき方が読経、弔辞に続いて出席者が焼香する大会である。大会のユニークさもさることながら前日の宴は、松葉蟹のフルコースという贅沢さ。おもいきり蟹を堪能した。今年も蟹に釣られて鳥取詣でになりそうである。（朱夏）

□「川柳雑誌」から路郎師の発表句を拾っている。現在、昭和26年7月号・No.290に到達。拾った句数は約4100句。路郎師の『旅人』の句数は1100句なので、すでに、その4倍に達している。戦前は、発表句数が多かったので、当初1万5千句以上と予想していたが、戦後はガタッと減少。あと14年余りなので約6千句ぐらいで収まりそうで、順調に進めば、6月頃に終了する予定である。

□句を拾う中で、路郎師は、選者になれば「軸吟」を2句から5句まで発表している。と思うと「軸吟」を一つも発表しないときもあった。

□ある句会では全課題吟の選者を熟している。路郎師は句会での投句が少ない。なぜ投句をしないかの質問に「句会はいろいろとすることがあるんだよ」と答えられた。投句をすれば、佳句や三才に入選するので、それを嫌ったのかもしれない。（勝弘）

ひとこと

心の花を活けてこそ

いじめに関する話題に心を痛めておられる人も多いと思う。古い話で恐縮だが戦時中、田舎に疎開した時、私もいじめに遭った。その時、いじめっ子に負けるな、さまざまな事に対して、人間らしい心を見失ってはいけないと悟った。

松江城主であった不昧公は茶道の不昧流を興したことで有名である。毎年秋には三日間にわたって盛大なお茶会が催される。

その不昧公は

枝もなく葉もなく花も散り失せて心の花を活けてこそ花

の歌を遺しておられる。

人は慈愛の心を失わず、その心に花を活けてこそ人の道だと。

人を踏み倒してでも生きようとする人の多い昨今、古いと笑われようとも私は、信ずべきものを信じ、守るべきは守って生きて行きたいと願っている。（松本文子）

作品募集

4月号発表（2月15日締切）

川柳塔（8句） 小島蘭幸 選
水煙抄（8句） 川上大輪 選
愛染帖（2句） 新家完司 選
檸檬抄「花」（2句） 水野黒兎 鴨谷瑠美子 共選
インスピレーション・ナビ（2句） 大西泰世 選
一路集（2句） 「食欲」伊藤のぶよ 選 「借りる」岩本笑子 選
初歩教室 「坂」（3句）高瀬霜石 担当

初歩教室「坂」は5月号発表

本社2月句会

とき 2月6日㈭ 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ケ辻町19―12 電06・6772・1441

おはなし 「私と川柳」 松浦英夫 氏
席題 「　　」 山岡冨美子 選
兼題 「ゆとり」 藤田武人 選
「細い」 安土理恵 選
「果て」 初代正彦 選
「盗む」 岩佐ダン吉 選
「必要」 小島蘭幸 選
（各題2句以内）
会費 1000円 **投句料** 500円（切手可）

5月号
檸檬抄 「さすが」
一路集 「まぐれ」「ペット」
初歩教室 「スポーツ」

本社3月句会

5日(木) 午後1時から
兼題 「探す」「多少」「だけど」「老いらくの恋」「立場」

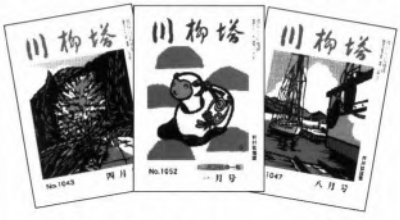
本社句会欠席投句のお薦め

＊幅4.5センチ×長さ25センチの句箋一枚に一句ずつを書き、裏面に題とお名前を記入のこと。
＊投句料は500円。または84円切手6枚。
＊句会日の前々日までに事務所に必着のこと。

定価 八百円（送料100円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）
二〇二〇年（令和二年）二月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
発行所 川柳塔社
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七 花野ビル201号室
電話 (〇六)六七七九―三四九〇番
振替 〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL (06) 4800―3018
FAX (06) 4800―3028
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp

川柳塔のホームページアドレス　https://senryutou.net

令和二年二月一日発行（毎月一日発行）
制刊大正十三年 通巻一一一三号 川柳塔 二月号 定価 八百円（送料 百円）

オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真っすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－2